㊃ 懸想人等歌をあて宮に贈る

〔語釋〕
(一)「下部の人どもも馬づかさ」歟。一本「しりへのひともし馬づかさ」

〔考異〕
(二)菖蒲草―時鳥
(三)うき身―うきに
(四)夜の―夜は

はりぬ。(一)下部の人もし馬づかさの男ども、物のふしらに腰插ぬのなど賜ふ。遊びあかしてつとめてかへり給ふ。

かゝる程に、東宮よりかく聞え給へり

東宮 ためしにも人のひくべき(二)菖蒲草このさみだれを今もあえなむ

ねたくも思ほされずや。なほ早くを。

と聞え給へり。あて宮、

言はざらんことぞ苦しき(三)うき身こそ世の例にもなるといふなれ

兵部卿の親王、

餘所にのみ思ひけるかな夏山の繁きなげきは身にこそありけれ

右大將殿より、

兼雅 わびはてて何の心もなけれどもなほ夏の(四)夜の長くもあるかな

中納言殿より、

〔考異〕
(一)思ひ―思ふ

正明 わびぬれば五月ぞをしきあふちてふ花の名をだにきくと思へば

源宰相、

實忠 沈みぬる身にこそありけれ涙川うきても物を思ひけるかな

身の徒になることも(一)思ひ給へず、志の空しうなりぬるこそいみじけれ。

など聞え給へり。あはれと見給へど御返しなし。三の親王、

忠康 君がためかろき心もなきものを涙にうかぶ頃にもあるかな

紀伊國より、

涼 何處ともまだ白雲のわびしきはいひやる空のなきにぞありける

藤侍從、五月の晦の日、朽ちたる橘の實にかく書きつけて、

仲忠 橘のまちし五月にくちぬれば我も夏越を如何とぞおもふ

侍從の君、

五月雨のすぐるも恐ろしくなむ。

〔語釋〕
(一)正頼の邸
(七)女一宮に
(八)「民部卿」なるべし

〔考異〕
(二)大殿—大將
(三)生ひたり—おひたる
(四)給ふ—給ふに
(五)十二日は—「は」ナシ
(六)賜へよ—「よ」ナシ

㊄ 正頼の家の納涼會。正頼兼雅の桂の家にて神樂を行はんとす

仲澄 うらやましやがて入りぬる夏蟲やたへぬ思ひぞ侘しかりける

少將、

仲頼 ながめつゝつひに朽にし橘はつねに空なるみとやなりなむ

良佐、

行政 山も野もしげくなれども我が宿にまだことのはの見えずもあるかな

かゝる程に六月の頃ほひにもなりぬ。大殿(一)(二)は、池ひろく深く、色々の植木岸に生(三)ひたり。水の上に枝さし入りなどしたる中島に、かたはしは水にのぞき、かたはしは島にかけて、いかめしき釣殿つくられて、をかしき舟どもおろし、浮橋わたし、あつき日盛には、人々すゞみなどし給ふ(四)、正頼「十二日(五)は暇の日にて、參りたまはぬを、釣殿にて今日すゞませ奉らむ。興あらむ果物など賜へよ(六)」など聞え(七)おき給ひて、釣殿に出で給ひぬ。君たち、さながらさふらひ給ふに、おとゞ御扇にかく書きつけて、式部卿(八)の宮の御方に、奉れ給ふ。

〔語釋〕
(一)仲澄
(二)忠雅
(三)「うちなる」は「つらなる」の誤なるべし

〔考異〕
(四)木がれて—木がくれは
(五)もえ松は—もえ松の

正頼 枝しげみ露だにもらぬ木がくれに人まつ風のはやく吹くかな

とて侍從の君(一)して奉れ給ふ。親王見給ひて、かく書きつけて右のおとゞ(二)に奉れ給ふ、

式部 こがくれに寒く吹くらむ風よりもうちなる(三)枝の風ぞすゞしき

とて奉れ給へり。右のおとゞ見給ひて、中務の宮に奉れ給ふ。

忠雅 風わたる枝にぞたれも涼みぬるもとの蔭をも頼むものから

親王見給ひてかく書きつけて民部卿殿に奉れ給ふ、

中務 木がくれて(四)蔭にまとゐるもえ松は(五)根よりおひたる末にあらずや

民部卿殿、

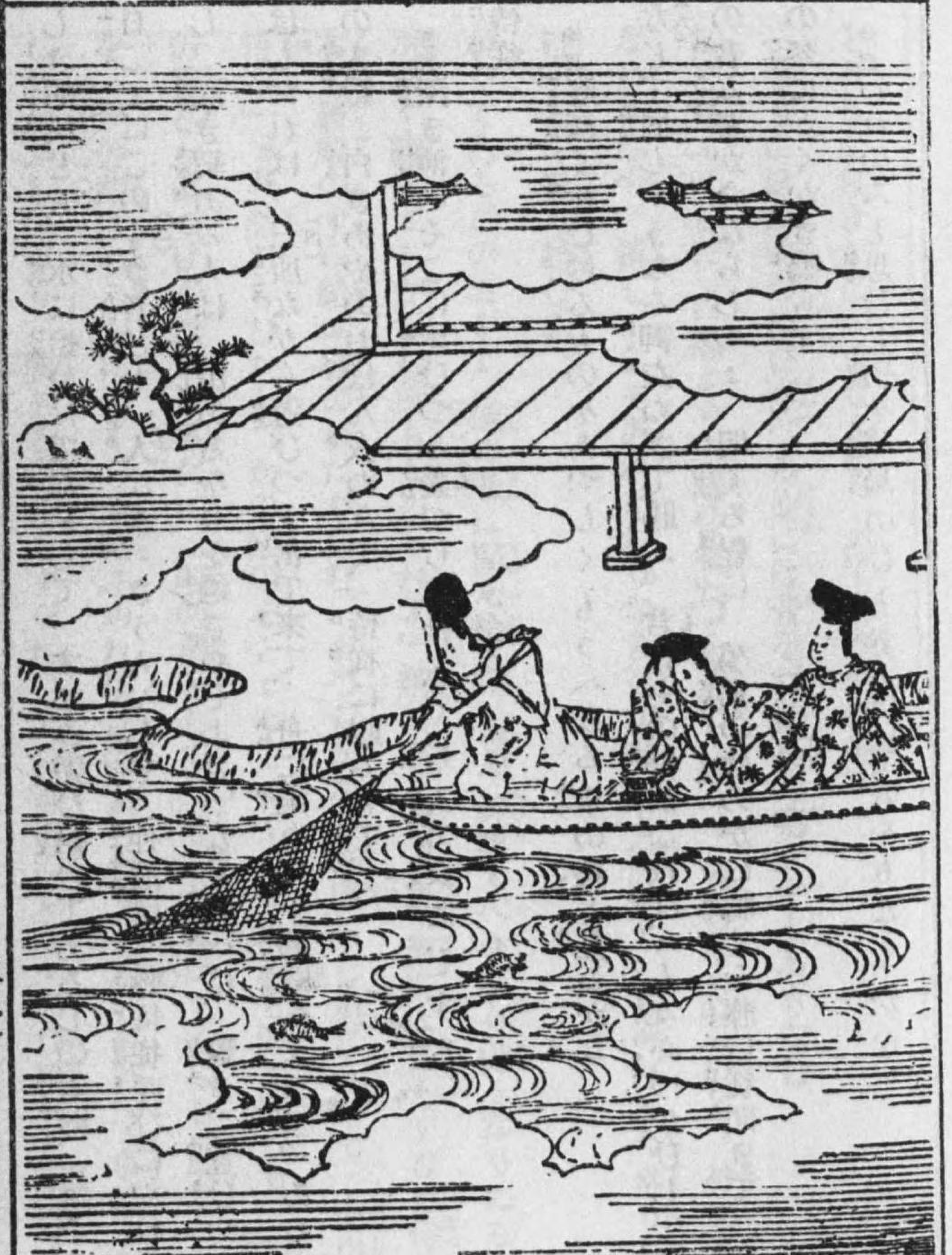
實正 大方の蔭とは見つゝこち風のふく木がくれと知らすぞありける

左衞門督殿、

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(二)七人共正頼の聟也
〔考異〕
(三)舟竝べすゑて—舟あみてすべて—なみすゑて
(四)さしつどき—さしつぎ
(五)など—ナシ

忠俊 我がたのむちとせの陰はもらずして松風のみぞ涼しからなむ
藤宰相殿、
實正 まとゐする千歳の蔭のうれしきはもるともなげの松の風かは
中將、
人ごとにちとせの蔭をそふる松いくよ限れる齢なるらむ

などて奉れ給ひて、(二)七所ながら釣殿にまうで給ひぬ。正頼「女君たちも出でたち(一)給へ」と聞え給へば、御車どもして、(三)舟竝べすゑてわたり給ひぬ。うなゐ、下仕らは、(四)さしつどき浮橋よりわたる。母屋に御簾かけ、御几帳立てわたして、君だちおはします。簀子に上達部、御子たちおはしまして、女君たち、おほん琴どもかきあはせ、男君たち、笛どもふき合せ、琵琶、御琴、磬うたせ、樂の聲にあはせて遊ばし、御前の池に網おろし、鵜おろして、鯉、鮒など(五)とらせ、よき菱、大きなる水蕗とり出でさせ、いかめしき楊桃、姫桃など中島よりとり出でて、をか



〔語釈〕
(三)仲忠仲頼等をいふ
(四)仲忠、仲頼、行政
(五)菱をあて宮に譬へたり
(六)「などとて」なるべし
(七)姫君たちの

〔考異〕
(一)胡桃—胡瓶
(二)今日—今日は

しき胡桃(一)ども、水に拾ひたてなどして、すゞみ遊び給ひてあるじの大殿、正頼「今(二)日こゝにこのすき者(三)ども一人なき、さうぐ\しや。仲澄は、藤侍従呼びにやれかし。深き契ある人は、由あるなりを過さぬぞよき」など宣へば、驚きて宣ひつかはしたれば、三所(四)ながら遊びつゝ出で來て、舟に乗りて、釣殿へまうづ。あるじの大殿、白きあやのおほん衣ぬぎて、侍従に賜ふとて、

正頼 深き池のそこに生ひつる菱(五)つむとけふくる人の衣にぞする

侍従、

仲忠 底深く生ひけるものをあやしくもうへなる水の綾と見るかな

など(六)て同じやうなる御衣ぬぎて賜ふ。君だち(七)の御前なれば、人々心づかひして物の音などかきならしつゝ、明くる程に、鳰鳥のほのかに鳴くを藤侍従聞きて、箏の琴にかくかき鳴らす、

仲忠 われのみと思ひし物を鳰鳥のひとり浮びて音をもなくかな

〔語釈〕
(二)忠澄、正頼の長子
(三)加茂川
(四)兼雅
(六)それ〴〵専門の男どもにまかせてさする事すち
(九)桂殿は
(一一)兼雅をはむる也

〔考異〕
(一)かき—ナシ
(五)し出されて—いだされて
(七)事だに—をだに
(八)かしこう—ナシ
(一〇)かの殿は心ことに—かの殿の心と

と有るか無きかにかきならす。あて宮琴の御琴に、

あて宮 には鳥のつね(一)に浮べる心には音をだに高く鳴かずもあらなむ

など宣ふほどに、内裏より、「藤侍従たゞ今參り給へ。宣旨なり」といふ。仲忠、「あなわりなや。折しもこそあれ。わりなき召かな」と言ひて、仲忠「たゞ今參りてなむ」とて參り給ひぬ。

かくてあるじのおとゞ、辨(二)の君に聞え給ふ。正頼「神樂すべきをり近うなりぬるを、水深く蔭すゞしからむ所もとめられよ」辨の君、忠澄「東(三)河には見えずなむ侍る。右大將(四)殿のすみ給ふ桂のわたりなむ、めづらかなる心ばへし出(五)だされて、面白く侍る」正頼「然あらむかし。かの殿の心とゞめてつくらせ給ふと聞く所なり。家々(六)の男どもにつけられたる事(七)だに、殿の例として、心ことにかしこ(八)うし出でらるゝを、かの(九)(一〇)殿は心ことにつくらせ給ふめれば、見所あらむ。人のし出だす事は、心にしたがふものなり。興(一一)ある道にもすぐれ、公の器物にもとゝのひ給へる殿にこそ

（語釋）
（二）式歟
（三）車に乘りて
（五）仲忠をわが聟にしたく思ふ也
（七）「などとて」なるべし

（考異）
（一）上のしきに―人のしなに
（四）よき―よきを
（六）給へれば―給ひつれば
（八）給ひたる―給うたる

あれ。上のしきに(一)つきて見給へしに、御子たち上達部、あるかぎり參り給ふなかに、右大將(二)、侍從、ひとつに奉り(三)て、下り給ひしこそ、有りがたく見えしか。そが中にも、侍從を見給へしこそ、常は厭はしき女子のよき(四)、ほしかりしかな(五)」と宣ふ。

かくて君だち、方々にかへり給ふ。おとゞ内に入り給ひて、正頼「などか涼みには出で給はざりつる。釣殿御覽ぜさせむとしつるを。闇の夜の錦とかいふ樣になむ」宮、大宮「人々すゞみ給へれば(六)此處になむ」とて、

大宮 枝ごとにわかずや風の吹きつらむ籠れる根さへすゞしかりつる

おとゞ、

正頼 おく山に松のふるねを殘しては岸に靡くぞかひなかりつる

などて(七)、正頼「神樂十七日になむすべき。その設せさせ給へ」宮、大宮「面白からむ所こそよからめ」おとゞ、正頼「右大將のぬしの、仲忠が母すゑ給ひたる(八)所は、仲忠

● 桂の家の夏神樂。

（語釋）
（二）大臣上
（三）年下なる女は
（五）車の窓の簾を下して

（考異）
（一）やは―「は」ナシ
（四）若苗色―あか色
（六）皆物見おろして―みかうのこおろして
（七）べき―つぎに
（八）べき―つぎに
（九）べき―つぎに
（一〇）べき―つぎに
（一一）殘る―殘り
（一二）つくり―めぐり
（一三）物―物を
（一四）器して―聟いだして―胡瓶いだして

が心に入れて造らせたる所。思ほしやれ。またはありなむやは(一)」など宣ふ。

かくて御神樂に出で立ち給ふ。大宮、女御の君、あなたの北の方(二)よりはじめ奉りて、二十の人は青朽葉、(三)それよりこなたは二藍おほむ小袿ども、おほん供の人は、大人、わらは、(四)若苗色に二藍がさね、御巫子、あをいろに二藍、下仕 檜皮色著たり。御車二十ばかり、四位、五位かず知らずして、桂川に出で給ふ。榊 左右にさして、一の車より皆物見(五)(六)おろしてまゐる。御車ども、つゞきて促し入る。御棧敷におり給ひて、おほん祓仕うまつりぬ。御神樂の召人、催馬樂仕うまつるべき(七)右近尉松方、笛仕うまつるべき(八)右近尉近正、篳篥仕うまつるべき(九)右兵衛尉時蔭、おほ御歌仕うまつるべき(一〇)殿上人のたゞ今の上手ども、みな召しつけつ。上達部、親王たち、むつまじきは出で給ふ。殿上人殘る(一一)なし。おほん前よりはじめ、召人らまで物まゐり、御土器はじまり、御箸下りぬるほどに右大將のぬし、河のあなたより、をかしき小舟、興ある樣に調じてつくり(一二)、をかしき物(一三)、興ある器して(一四)、土

〔語釋〕
(一)催馬樂の「我家」の中に「大君きませ聟にせん」といふ文句あり
(二)催馬樂の曲名
(三)正頼が
(四)古今集に「大ぬさのひくてあまたになりぬれば思へばえこそ頼まざりけれ」

〔考異〕
(五)ならむ―ならぬ

器とりて、侍従に狛の樂せさせてわたり給ふ。左大將のおとゞ限なく喜び給ひて、川つらに左のつかさの遊人、殿上人、君だちなど率て遊びて待ち給ふとて、「おほ(一)きみ來まさば」といふ聲ぶりに、斯うたひ給ふ、

正頼 底ふかき淵をわたるは水馴棹ながき心も人やつくらむ

右大將のぬし、「伊勢海」(二)の聲ぶりに、

兼雅 人はいさわがさす棹の及ばねば深き心をひとりとぞ思ふ

とてわたりて、左右あそびて著き並み給ひぬ。又兵部卿親王も、おほん祓しに、同じき河原に出で給へるを、喜びておほん迎して、おなじ御前に著きたまひぬ。かゝる程に東宮より藏人を御使にて(三)かく聞え給へり、

東宮 うちはへて我につれなき君なれば今日の禊もかひなかるらむ

あて宮、

あふ事のなごしの祓しつる哉(四)おほぬさならむ(五)人を見じとて

〔語釋〕
(一)さま〴〵の絲の結び合せたるを飾として附けたる几帳
(二)誤あらんか
(三)他の人々見ての意歟
(四)元輔集「みがくらん玉の光をたのむかな數にはあらぬたびしかはらも」
(六)實忠の文

〔考異〕
(五)水は―水の

けふの禊は、神も耳とゞめ給ひなむ。

と聞えて、御使に女のよそひ一くだり賜ふ。

かくて夕暮に君だち御簾あけて、絲結の御几帳(一)どもたてわたして、御棧敷の前になだらかなる石、かどある巖などひろひ立てたる中より、川の湧きたる、瀧の落ちたるなど見給ふとて、孫王、中納言(二)、兵衛、帥の君など、よき童べなど、岩の上ごとに出だしするゑ、御琴かきならし、人々に歌よませなどして出で居給へるを、ことかたの御前(三)、めでたう興ありと思す。藤侍従御前のわたりに立寄りて、孫王の君に物いひなどするに、わき出でたる水を見て、

仲忠 かはべなる石の思ひの消えねばや岩の中より水の湧くらむ

孫王「「たびしかはらも(四)」と言ふ」とて、孫王の君のいらへ、

孫王 底をあさみ石間を分て行く水(五)はわくと見れどもぬるまざりけり

などいふ程に例の宰相、兵衛の君の許にある文(六)を君だちこれかれと見給ひて、う

（語釈）
（一）誤あらんか
（三）あて宮が我を
（五）兵部卿宮は左樣に疎末にすべき人にあらずと

（考異）
（一）するに―するを
（四）思ほし―おぼし
（六）とく―きも

ち笑ひつゝ物も宣はぬを聞きて、又かく聞えたり、

實忠　我がふみは八百萬代のかみ毎によむとも數は盡きずやあるらむ

など聞えたれど、物も宣はず。

夜に入りて御神樂はじまりて、夜一夜あそぶ。御神樂はてて、才の男名のりなどするに兵部卿の親王、「すきものの才侍るや」など宣ひて、御前なる岩の上に居給ひて、（一）大宮に物聞え給ふついでに、兵部「月ごろ聞えさせまほしき事のあるを、序なくてのみなむ。今宵は神だに物聞き入れ給はなむ。年頃御中らひ（二）に聞ゆることあるを、あさましくなむ、（三）人よりも（四）思ほし捨てたる。（五）「さは有るまじき人ぞ」とやは聞え知らせ給はぬ」大宮うち笑ひて、大宮「いでや。かやうの折には神も外にのみぞ思ほゆるや。煩はしきことかな。とく宣ひ聞え給ひなば、さ物思はせ給はむやは。（六）とく宣ひ知らせてまし」親王、兵部「あるが中に思ほし捨てたれば、いづれの度かねたく思ほえぬ時なけれど、此の度こそ、身はいたづらになるとも、え思

（語釈）
（一）差上ぐる樣な娘があらば差上げたしと思ふにの意なるべし。さらば「見給へ」は「見給ひ」の誤也
（二）當方より申上ぐる折もあるべし
（四）誤あらんか。「みかきにたてる」を「みきにたてり」と書ける本もあり
（七）懸想人等歌をあて宮に贈る
（五）東宮に寵姫の數多あるをいふ

（考異）
（三）連れて舞ひ入る―いもやまひて入る

ひ忍ぶまじけれ」大宮「まめやかには、（一）見給へつべき人あらば、と思ふを、然りぬべきが無ければなむ。いま暫しありてば、（二）然きこゆる折もありなむ」親王、兵部「命あらずば然てや歇みなむ」とて立ち給ひぬ。曉に上達部、親王たちには女のよそひ、召人らには白張はかま、右大將ぬしによき馬、鷹など奉り給ふ。かくて皆かへり給ひぬ。

【畫詞】こゝは御神樂。御巫子ども（三）連れて舞ひ入る。才の男ども、御神樂仕つまつれり。（四）みかきに立てるとりものども奉る。うかれ女ども多なり。

かくて殿にかへり給ひて東宮より、常夏の花ををりて、かく聞え給へり、

東宮　ひとりのみ我が臥すやどの床夏は常にをり憂きものにぞありける

今は住にくゝさへなむ。

あて宮、

しら露の（五）おきかはるなるとこなつをいづれの折に獨り見るらむ

（語釋）
（一）書きて—「て」ナシ
（二）書きて—「て」ナシ

例の宰相、久しく照りたる日ざかりに、

實忠　大ぞらも我がごと物や思ふらむ草木こがれて照れる夏の日

あて宮、

時のまに入らぬ宿なくてる日には君さへなどか劣らざるらむ

兵部卿の宮より、夕立のいたうする折に、

兵部　年經れどいとゞつれなくなる神のひゞきにさへや驚かぬ君

あて宮、

ひゞけどもつれなき人は驚かであま雲のみも騷ぐべきかな

右大將殿より海にのぞきたる蜑立てる洲濱に、かく書きて付く、（一）

兼雅　わたつのみ底にみるめの生ふればぞ我さへ賴むふかき心を

あて宮あさりしたる洲濱にかく書きて、（二）

あて宮　あさりする蜑は何ぞも海といへどいかなる底に生ふるみるめぞ

（語釋）
（一）「住吉の」は「住吉に」なるべし
（二）五月は嫁娶を忌む

平中納言殿より、

正明　見る人はをじかの角にあらねども慰むほどのなきぞ侘しき

あて宮、

思ふらむことは知られで夏の野に角落ちかはる鹿とこそ聞け

藤侍從、祓しに難波の浦までくだりて、それより、

仲忠　まどひつゝ摘みに來しかど住吉の（一）生ひずもあるか戀忘れ草

あて宮、

あだ人のこゝろをかくる岸なれや人わすれ草摘みに行くらむ

三の親王、

忠康　なく蟬ももゆる螢も身にしあれば夜晝ものぞ悲しかりける

紀伊國より、

涼　常よりも夏越の月のわびしきは忌む（二）てふことの無きにぞありける

〔語釋〕(四)三春高基

〔考異〕(一)忘らるやとて―忘るるやとて

(二)衣手も―衣手を

(三)時だに―ことだに

㈧　三春高基、宮内の君を招きてあて宮を獲んことを謀る。

(五)來まほしけれど―行かまほしけれど

(六)まゐでたり―參りてけり―まかりでたり

と聞え給へるを君たち見給ふを侍従の君とりて見て、端にかく書きつけてあて宮に奉り給ふ、

仲澄　人はいさなごしの月ぞ頼まれし瀬々の禊に忘らる(一)やとて

たてまつり給へど、誰にも〳〵聞え給はず。少將、六月晦に、

仲頼　衣手(二)もほさで過ぎぬる夏の日をしむにさへも濡れまさるかな

兵衛良佐、七月一日、

行政　繁かりし時だに(三)あるにことのはの秋たつ今日の色はいかにぞ

(四)致仕の大臣の御許より、宮内の君の許に、日頃え申し給へでなむ。其方にもまうで來(五)まほしけれど、公どころの人目騒がしきによりてなむ。人知れず謀らひ申すべき事なむある。あからさまに渡り給へ。車奉る。」と宣へり。宮内まるで(六)たり。おとゞ逢ひて、高基「いかに、殿は何とかせしめ給ふ」

〔語釋〕(二)以下正頼の聟どもの人となりを譏る也

(三)世帶を經營する了簡なし

(五)勞して歟

(六)世渡りの仕事をすれば之を嘲る如き不屆者を聟に取るといふ筈はなし

〔考異〕(一)きしろふ―きそふ

(四)わらふ―娟らふ

宮内、「たゞ今はことなる事も侍らず。一日なむ、御祓、やがて夏の御神樂せさせ給ふめりし」おとゞ、高基「何處にてかせられし」宮内、「西河原右大將殿にてなむ。人は、殿におはします限、さては兵部卿の宮、右大將のおとゞ、源宰相、殿上人は例の如なむ」おとゞ、高基「大なる御經營にこそはありけれ。然知らましかば、いさゝか酒肴構へてまうで來ましものを。すべて殿は、斯かるすき者ども語らひつどへ給ひて物盡し給ふこそ、謗も取り、物のつひえもあらめ。賜はり給ふつかさは、盜人のみつどひて、人の衣を剝ぎとり、飯、酒を、さがし食む衛府づかさ。取り給ふ、御聟は、皆すき者、あるはしれ者、あるは衛府かけてきしろ(一)ふ大臣公卿と、これは皆あて人、すき者ども。(二)いさゝかに(三)構へ渡らふ心もなし。たゞ物の音を上手にひき、和歌もいさゝかに人の謗は取らじ。假名がき、和歌よみ、餘所目よき女をば、雲の上、地の下をもとめても懸想し(四)わらふ人をば、耳にも聞入れず人の田畠つくり、商し、(五)らうして蓄へ渡らひ(六)事す

〔語釋〕
(二)遣ひ樣なく
(四)春海本に「勢德」と傍書せり
(五)此處いきゝか心得がたし
(七)眞菅
(八)眞菅を除きては我こそあて宮の聟として適當なるなるべし
(九)又いつもの如くつまらぬ聟を取らるゝ事か

〔考異〕
(一)聟には—「は」ナシ
(三)めれ—らめ
(六)はかなき—「き」ナシ

れば、口をあきて居る人をば、聟(一)には取り給ぶべきものか。女に夫あはする心は、やもめなる人の、貧しく便なくて、親の煩とあるにより、するには非ずや。殿のせさせ給ふごとくにては、聟取の本意なし」宮内うち笑ひて、宮内「見る目や然あらむ。御方々は、豊にいきほひて、七つの寶を、(二)やらむ方なくおはしますめれ(三)」おとゞ、高基「物は、やぐらに積み見て、動かさであるこそ頼もしけれ。もしは望ある者の、(四)せいとくを蒙ぶらんとて、庄物、贄ばし奉(五)らせんにこそあらめ。すなはち家人隨身童、みな失ひつらむものを。なほ今だに斯かるはかな(六)きわざし給はで、たしかなる事し給はなむ。たゞ今、よき人の聟は、(七)滋野の宰相こそあらめ。御年やすこし老い給ひつらむ。さりとも、七十にはまだや餘り給はざらむ。よき人なり。御心全くたしかに、物盡さず貯へ、わたらひ心よくして、こともなき人なり。さてはこゝらにこそ、その九の君は得め。あたらよく聞え給ふ君に、(九)例のわざし(八)給ふらんよ、なほ北の方、あるじの君に聞え給へ。「わかき時に、貯へわたら

〔語釋〕
(一)時勢場合をも辨へず
(二)あて宮は我に娶せ給へ
(三)正頼に世話をかけず
(四)高基には妻もなし獨身故あて宮を遣はされては如何と申上げしに正頼が下の如く返事せしと也すべて宮内のつくりごと也
(六)東宮
(七)「すきものにいますめる」歟

〔考異〕
(五)いますがる—いますなる
(八)「と」は「ぞ」の誤歟

ひ心ある人につきて家刀自つきて、家の内に無き物なくしてある人なむ、ゆくさき頼もしき。末の世衰へては、家貧しき人の多きぞかし。心浮きたるにつきては宮仕などする人は、(一)世處も知らで、おやの後の世うしろめたく、末の世わろきものなり。(二)かの君は、なほ此處におはせさせ給へ。(三)殿のおほむいたつき入れず、子の代孫の世うしろやすくておはしさませむ、となむ聞ゆる」と聞え給へ」宮内「前にも斯くなむ聞え給へど、げにたゞ今、(四)殿に北の方もおはしまさず、一ところなど聞えさせしかば、「げに似つかはしき事にはあんなれど、たゞ今然あるべきもなし。あて宮は、たゞ今東宮に切に聞え給ふを、いかゞはせましとなむ思ほし煩らふ」とぞ宣はせし」おとゞ爪彈をして、高基「幸なき君にもいますがる(五)かな。(六)その坊の君は、如何にいますなる君ぞ。たゞ今は、この右大將のぬしの子に、仲忠とかいふすきものを、心に入れて、夜晝あそび召しするて、(七)すきものいますかめる宮に參り給ひては、何わざし給はんと(八)。親の綾錦にまとはれて、淸らをこのみ

(語釋)
(一)仲忠の仕込みし也
(二)仲忠を謗りていふ、「はかなもの」は「さがなもの」の誤歟
(四)醜くろ
(六)中紙
(七)「よばひ文を」なるべし、あて宮の文を貰はぬを歎くと也
(九)さぶらひ給ふ人卽ち宮内
(一〇)他に妻妾のなきをいふ
(一一)あて宮一人を

(考異)
(三)にを—「を」ナシ
(五)あらく強きぢうしに—あつごわきかみに
(八)給はぬ—給はらぬ
(一二)聞えて—ナシ

容貌をつくろひて、遊びわざうちして、行末はかなくてあるばかりぞかし。あな心苦しや。この坊の君も、かくは聞え給はざりき。多くは、この(一)侍從のしなしつるをや。(二)まだ知らぬはかなものにこそあれ。裝束をし、從者をつかふことのいみじう、かたち、身の才の勝れたるぞ用なきや。内は空しとて、その容面をやは倉には積まむとすや。御心をしもなやまし給ふとも、宿世なり。天下に、國王、儲の君に奉り給ふとも、かの君幸おはせば、此處にもおはしましなむを、なほよろしきにを(三)聞え給へ」とて、しこぶち(四)に古めきたる箱二つに、東絹一はこ、遠江綾、一箱入れて、肌(五)あらく強きぢうし(六)に斯く書きて奉れ給ふ、

人知れぬ宮仕は年經ぬれど、御方のよばひ(七)を見給はぬ(八)をなむ、思ひ給へなげく。おのづからこのさぶらひ(九)給ふ聞え給ひてむ。此處には、うしろめたき人(一〇)も侍らず。たゞ(一一)高き山とのみたのみ聞え(一二)てなむ。必ず御顧みかうぶらむ。さて、これはいとなめげなれど、御方の下仕らにも賜はせよとてなむ。

㊈ 滋野眞菅、宮内の君を招きてあて宮を獲んことを謀る

(語釋)
(一)滋野眞菅
(二)あて宮
(三)あて宮の忌む日は何日ぞといふ意歟
(六)誤あるべし
(七)二人共に眞菅の子
(九)汝等
(一一)多く歌はつくれども
(一二)和政、眞菅の子

(考異)
(四)御忌—みいへ—みいろ
(五)いつの—いづれの
(八)いふ樣—いふげに
(一〇)珍らしめ言ふべからむ—めでしめつべからむ

宮内に錢取らせてかへし給ふ。

かくて又師(一)のぬし、殿守の御を家にむかへて、眞菅「かの若君(二)の御迎すべき日、二十日あまり一日の日となむ定めたる。かの(三)御忌(四)はいづれぞ」殿守「え委しくは知り給はず。(五)いつの日にかおはしますらむ。さても、ふと御迎はし給はで、先づよく聞え趣けてこそ、定めさせ給はめ」師、眞菅「何かは、疑ある身ならばこそ。せう(六)もちせむとて侍る。やもめにも侍る。つかさ、かうぶりはた持てり。何事をかは女人の嫌はしむべきにあらしめずや」殿守、「げにさなむ物し給ふ。何かはゆるし聞え給はざらむ。そが中にも、殿守ら侍れば、おほん願も必ずかなへ奉り侍らむ。さはありとも、又々おほん消息聞え給へ」と言ふ。師のぬし、(七)藏人、木工の亮にいふ樣(八)、眞菅「まうと(九)たちの後見せしめむ女人珍らしめ(一〇)言ふべからむ歌一つつくらしめむ」と言ふ。藏人の主打笑ひて、藏人「みづからの爲に、(一一)多くし侍れども、ことに人なむめで侍らず」眞菅「さらば誰か女人らはめでさしむる」藏人「(一二)少將ぬし、

（語釋）
（一）これは眞菅の子、東宮の帶刀
（二）以前ゐて宮が感心せざりき
（三）棡田を仰ぐべき
（四）「所は」の「は」衍文なるべし
（五）歌よむ事は若々しき所業なれば自分は詠まねど若き男どもによませて贈るとの意なるべし
（六）譌あらんか
（七）みなかみ―皆髪、水上
（考異）
（八）なるべし―なるらし

十　藤英の苦學

帶刀(一)などなむ、人の驚くばかりは仕る」ぬし、「その帶刀が和歌にめでざり(二)きや。少將に言はむ」とて少將に宣ふ。「いと易き事なり」とてよみて奉り給ふ。よき色紙にかき給ふ。

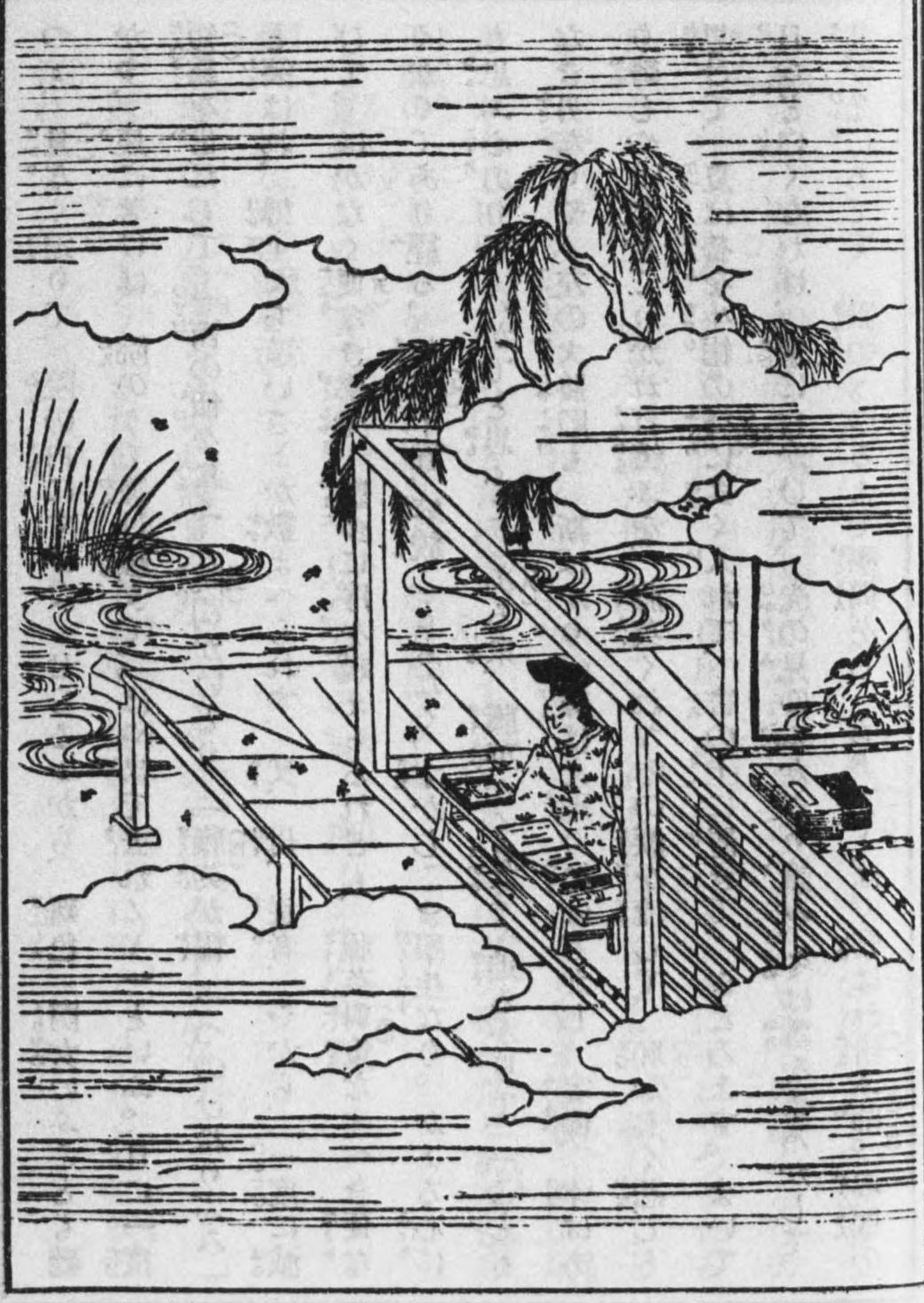
日頃、仲媒になむおこたらず聞えしむるを、この頃はみさい(三)賜はるべききたなき所(四)は、搔き拂ひかき拭はすとてなむ、御消息聞えしめざりつる。はや渡りますべき心づかひせしめ給へ。何時しか、まのあたりにて、具なる御物語も申し賜はらむ、となむなげき申す。さて、かよる(五)事は、若々しければ、わかき男どものにぎはしむるを音に聞くに。(六)

とて、

直菅君戀ふとみなかみ(七)しろくなるたきは老の淚のつもるなる(八)べし

絹綾祿にとらせて還しつ。

かくて、勸學院の西の曹司に、身の才もとよりあるうちに、身をすてて學問をし



つゝ、量なく迫りて、院の内にすげなくせらるゝから、雜色、厨女いふことも聽かず、(一)座に著けば、院のうち笑ひ騷ぎて、「はや出で去れ〳〵」といふ。日に一度(二)短籍を出だして、一笥の飯を食ふ。(三)院司かいとり、(四)「藤英が糧、一つのひねりぶみ」と笑はれ、博士たちにいさゝか數まへられず、父、母、從者、やから、一度に滅びて、はかなく(五)便なき學生、數多に序を越えらるれども、藤英(六)對策なすべき便なくかくてあり經る、年二十五、(七)容貌こともなく、才かしこき學生なり。かゝる心にも思ふ心ありて、いかでと思ふに、(八)ある衆、藤英かく量なく迫るを見て、「こともなき男なりや。左の大將殿も、斯ばかりの聟はえ取り給はじかし。容面、才はあり難しや」などこれかれ打笑ふを、藤英くれなゐの涙を流して、恥かしく悲しと思ひて、夏は螢を生絹の(九)袋に多く入れて、書の上に置きて、まどろまず。まいて日など白くなれば、窻にむかひて、光の見ゆるかぎり讀み、冬は雪をまろかして、其が光にあてて、眼のうつるまで學問をし、藤英「(一〇)こゝばく齋はれ給ふ師(一一)(一二)。學問の

〔語釋〕
(一)非常に困窮して
(二)札
(三)院司は勸學院の役人かいとりは「點取」の意歟
(四)此學生の名
(六)試驗を受くべき方便なく
(八)大學の衆即ち學生
(一一)先聖先師、孔子子思など

〔考異〕
(五)便なき—便なし—こともなき
(七)二十五—三十五
(九)袋—きぬ
(一〇)こゝばく—こくばく
(一二)給ふ師—給ふ聖の

力に、恥すくひ、願滿て給へ」と心のうちに祈り申しつゝ、身の沈むことを歎きつゝあるに、院より(一)出でたる人の丹後守になれるが、出で立たむとて、旅籠ぶるひの(二)饗する日、さうとうしきを(三)(四)使にて、「今日座に奉れ。(五)(六)たうとさにまかり(七)つきたる日なり」と言はす。藤英、「甚だ畏くかしこし。召し數まふること、入學してことし二十餘年、いまださうのねんにあづからず(八)。たま〳〵まかり著きし昔、身の恥あつかりしに因りてなり」と言はす。(九)さうとうしき、夏の衣の破れたる朽葉色の下襲のこうしたる(一〇)(一一)をとりに遣りて、かく言ひやる、

夏衣わがぬぎ著する今日よりはみるなる恥も薄くなりなむ

藤英くれなゐの涙を流して、

藤英　恥をのみ八重著るきぬに脱ぎかへてうすき衣にすゞみぬるかな

とて還す。さうとうしきたひは(一二)一つが盛物、藤英が曹司にやる。みなこれに文ども作れり。

〔語釋〕
(一)勸學院出身
(二)出發前の饗應
(三)下に「さうとうし」とあると同じ人なるべし役名なるべけれど未詳
(五)誤脫あるべし
(八)誤脫あるべし、饗宴に列席したる事なしと意なるべし
(一〇)誤脫あるべ

〔考異〕
(四)さうとうしきを—さうとうしにきうしきを—さうしとさうしきを
(六)たうとさに—たうとさに—たうをさに
(七)まかり—ナシ
(九)さうとうしき—さうとうしく—さうしとうしく
(一一)こうし—うらし—こらし—かうし—こえし
(一二)さうとうしきたひは—さうとうしとたへは—そうとうしたひは—さうとうしきたへは「さうとうしこへは」「さうとうしだいばん」歟

〈語釋〉
(一)今のもやし　黃變
(六)「紙ども配る」の意歟
(七)誤脫あるべし
(八)此一節畫詞の亂れたるかとも思はる
(九)正賴邸
〈考異〉
(一)藤英が―ナシ
(三)これは―こゝは
(四)のゝしる―のゝしり
(五)にはのみたさう―にのみれさら―にはのみたさら
● 正賴の家の七夕
(一〇)うへの…花薄―あはせのあこめみへん

畫詞　こゝは勸學院の西、藤英(一)が曹司。藤英文机にむかひて、文どもめぐりに山のごとく積みて、蟲袋に入れて、書の上におきて、太き布のかたびら一つを著て居たり。廚女、黑き飯飯笥に入れて、(二)さはやけの汁して、持て來たり。これは東の曹司。大學の學衆ども著き竝みて、酒、肴、飯、院司さうとうし(三)き、集ひて(四)のゝしる。政所の別當ども著き竝みたり。米、數知らず積みおきたり。大炊殿。男おものす。專女、廚女あり。「藤英がかしはで(五)にはのみたさう」と言ひて奪ひかへる。これは座につきたる進士、秀才。この人あはせて八十人ばかり、臺盤にむかひて物食ふ。丹後の守饗したり。(六)かみともくばる。廚女し(七)はりかけてうつ。

かゝる程に、七月七日に、(九)大將殿に、あくる日つとめて、西の大殿より、あを色(八)に蘇枋がさね、綀のう(一〇)へのはかま、海松色に花薄がさねの綾、搔練のあこめ著たる童、髮丈にひとしき八人、中の大殿よりあか色に二藍がさねのあこめ、ばかま、

〈語釋〉
(二)正賴
(三)誤あ　べし
(四)「おほやけごとによりて俄に」歟
〈異考〉
(一)處なし―ところはなし
● 試策。大學の學生等正賴の邸に參る。藤英はじめて正賴に識らる。藤英あて宮に懸想す。

同じき八人、北の大殿より、うすものに綾、緣かさねたる、女郎花色のかざみ、あこめ、はかま、同じやうにて八人、かた〴〵より歩み出でて、お前の前栽の松の下に、反橋、浮橋をわたしつゝ、色々の絲どもを一つづつ、機棚に奉る。つぎて、簀子に、蒔繪の棚、廚子七ツたてて、庇に御簾かけならべ立てて、よきけづり竿わたして、色々の御衣ども色をつくし、解きほどき、おほ衣架をならべ、御調度色をつくし、品をとゝのへ、御かづらども長をとゝのへ、數をつくして、方に飾られたり。風にきほひて、物の香どもふき加へぬ處(一)なし。節供例のごと、あづかりごとに折敷、まゐり物おなじ數にまゐる。預りどもに、女のよそひ一くだり、本家の御方より、召しならべて賜ふ。竝み立ちて舞踏したり。

かくておとゞ(二)、源氏におはしませども、外戚藤氏におはします、うけ申しける(三)によりて、大學勸學院の別當し給ふ。公の試策きこしめさすとて、博士、文人八十餘人、仁壽殿に參るべきを、おほやけごと(四)俄にとまりぬ。「さう〴〵しきわざかな。

〔語釋〕
（二）「申させてむ」歟
（三）正頼邸
（五）破れたる
（七）巾子ばかり殘りたる
（八）草履の一種
（九）「れちに」歟「おちに」とかきたる本もあり
（一〇）あたり前の人をすら
（一一）不都合なり

〔考異〕
（一）この由を—「を」ナシ
（四）上の衣—とめのきぬ
（六）なく—なを
（一二）しき—しろ

例よりも興あるべき試策なるべきを、たゞに過さじ。別當殿にこの由（一）を申させて（二）。大學より三條（三）の院ちかし。徒より歩まむ」とて列ひきて立てるに、西の曹司の藤英、常は、のゝしりて出で立つを見れど、思ひもかけぬを、今日はえ留まるまじく思ほゆ。上の衣（四）のわゝけたる（五）に、下襲の半臂もなく（六）、太かたびらの下の衣著て、上のはかま、下のはかまも無し。冠の破れひしげて、巾子の限ある（七）、尻切（八）の尻の破れたるを穿きて、色もなく青み痩せて、ゆるぎ出で來て、「季英、今日の御歩のをち（九）に入らむ」とて交りたり。博士友だちより末まで、笑ふこと限なし。「かの別當殿の殿、上の御殿に劣らず、宿德、かどある限集ひたちて、例の人（一〇）をだにゆるし給はぬ世の中に、いはむや、學生の男の御裝束にて參り給はゞ、氏の院の永き名になりなむ。速にまかり留まり給へ。いと不便なり（一一）。院をも追ひ捨てむ」など言ひて、取り寄りて打ち引かぬばかり、引き退け、おし倒しなどすれど、留まるべくもあらず。騷ぎ滿ちて、歩み歇みなむとす。さうとうしき（一二）參りて、「な

〔語釋〕
（一）さうとうしきの名
（二）誤なるべし。一本には「試策のこさめらにのおもくいたらで」又一本には「試策のみさみらにのおもいたして」
（三）「えさう」は衣裳なるべし
（五）誤あらんか
（六）「かうじや」は冠者なるべし
（七）「給はん」は「給はなむ」なるべし
（八）「などとて」なるべし
（九）「とて」の下脱文あるべし
（一〇）誤脱あるべし

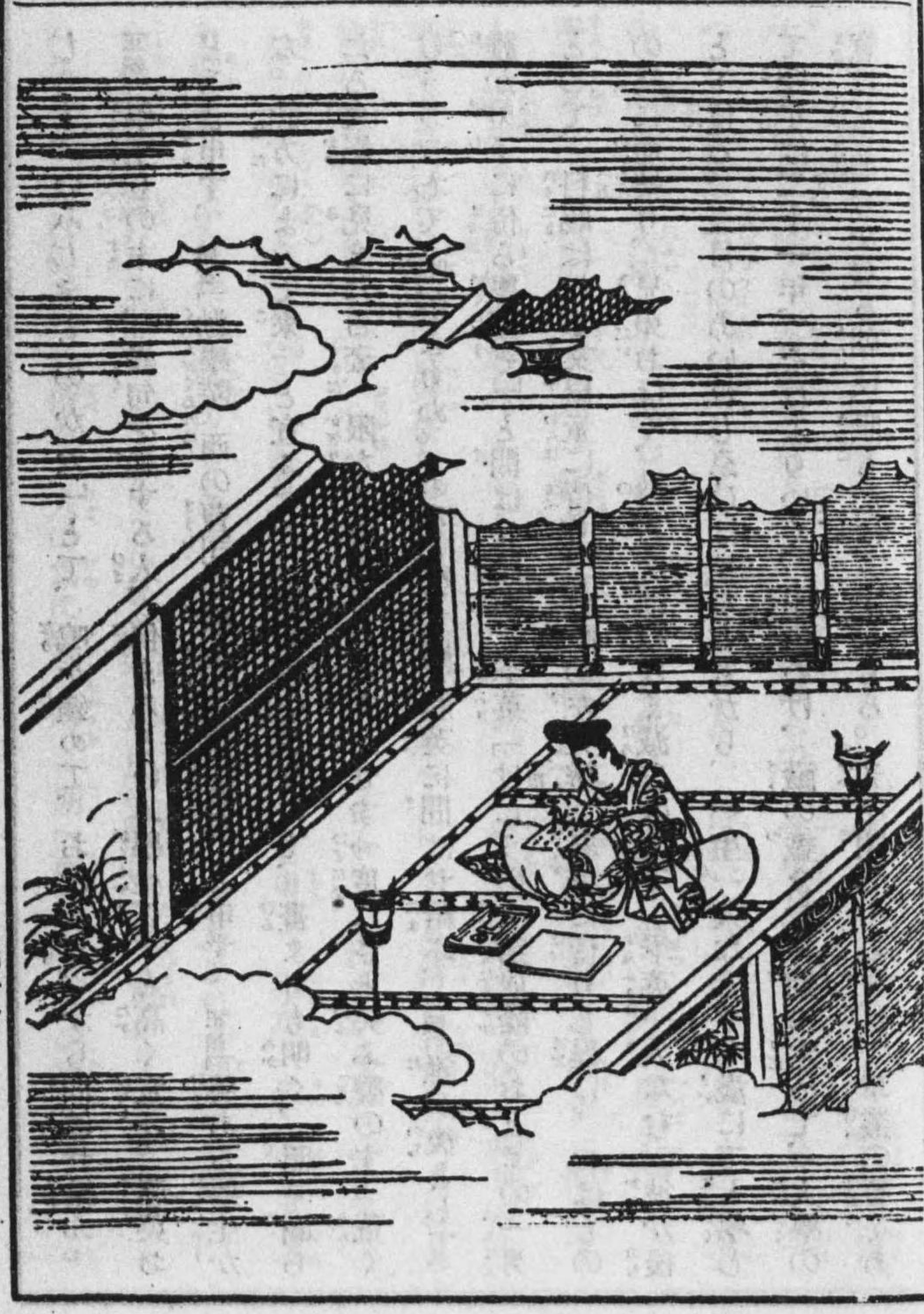
〔考異〕
（四）衆—生
（一一）さうとうしきりんし—さうとうしきにりんし—きうとうしきにけんし

どか、御歩のまだしかりける。忠遠（一）が參り來るを待たれつるか」衆のいらへ、「然もあり。又この藤英出立ち給ふに、こと亂れて、試策のこさめらにのおもくいたらで（二）歩みぬるは」さうとうしき、「などか藤英の別當殿に參り給ふらむからに、歩の止まむ。藤英は氏の院の學生には非ずや。えさう（三）古くてあることは、いはゆる大學の衆（四）なり。冠たゝなはり。つるばみの衣破れくづれ、襪破れて、憔悴したる人の、身の才あるをなむ學生といふ。これ、さこそ出で立ちもすれ。親ある人の、身の才もなくて、豪家をたのみ、財をつくして、したにくゝりをしつゝ（五）華やぐ人は、學生にはあらず。さても、何ぞのかうじや（六）童か、物笑はする。はや出で立ち給はむ（七）」など（八）て、「藤英立ち給へ。これなむ眞の大學の生」とて（九）。おとゞ、「例より興ある試策なるを、え見過すまじく思ほえつるを、いと切なる歩なり」と宣ひて、中島の釣殿に家司ども渡りて整へ、上達部、御子たち、衛府、院司まで著き竝み、博士文人、列引きて著き竝みぬ（一〇）。さうとうしき、りんし（一一）

（語釋）
（二）誤脱あるべし。「人々もろ聲に誦す」などありし歟
（三）「わたして」の下に脱文あるべし
（四）「たより文」は「作文」を「便文」と書き誤りたるを假名がきにしたるならん歟
（五）藤英の文は

（考異）
（一）賜はりて―たうびて
（六）あはせて―ゑらせて
（七）文人ら―文に

かくの所より　お前ごとに卓まゐり、土器はじまり、箸下りて、あるじのおとゞ、題出だし給ふ。探韻賜はりて（一）八韻の文つくる。上達部、御子たち、宮、家の子つくり給へり。作りはてて、お前に出でて、文奉る。式部丞講師して讀みあぐ。（二）もろすゞ。夜に入りて、燈籠間ごとに掛け、燈臺隙なく立て、松明ともしわたし（三）て、藤英は、文人どもかくたより文（四）奉るにも、お前にて作り出だしたる文は、（五）上達部見給はむに、名高くなりぬべければ、講師取り隠して、讀まずなりぬ。上達部、御子たち、ある者とも知り給はず。あるじの大殿よりはじめ奉りて、琴あそばす限、その聲に調べて、今日の文の興ある句をあはせて（六）遊ばすに、夜も更けゆくに、琴の音、人の聲、ゆたかに高し。藤英おのれが作れる文を、聲の限ふりたてて誦する聲、高麗鈴を振り立つるに劣らず。あるじの大殿きこしめして、正賴「今日の文に聞えざりつる句を、一人誦する人あなり。誰ぞ」と宣ふ。博士文人ら（七）聞え紛らはす。正賴「こゝら興ある句をおもしろき聲に、多くの人の誦する聲にま



〔語釋〕
（二）「けうさう」は「警策」の字音なるべし、警策しては注意を與へての意
（四）「けたう」は遣唐歟
（五）學問料

〔考異〕
（一）まうで來―まうこ―まうでよ
（三）弟子―しき
（六）誤脫あるべし
（七）三月…ともがら―三年のあいやしえいわするともがら―三年のあはれしゐひするともがら
（八）二十一年―三十五年―三十一年―二十八歲
（九）誤脫あるべし

じらす。いみじきものかな」とて、鳴を鎭めて、おほん口づから問はせ給ふ。正頼「學生らの末に、異句を誦する人、何まろといふ學生ぞ」と高く宣ふ。藤英おどろき申す、藤英「勸學院西の曹司の學生、藤原季英」と申す。正頼「興ある學生かな。此方にまうで來(一)」と宣ふ。そこばくの中を分けて、晝よりも明く、照り滿ちたる火影に見えたる姿、限なくめづらし。え念ぜず一度にさと笑ふ聲のす。荒くけうさう(二)して、鳴靜まりぬ。あるじの大殿、藤英に問はせ給ふ、正頼「誰が後として、誰が弟子(三)に侍る學生ぞ」と問はせ給ふ。季英、「けたうの大辨(四)成蔭のおとどの一男として、料(五)賜はれる文屋童に侍り。成蔭の左大辨、參議に侍りし程に、つはものの爲に命終り、兄弟おほく、殘るかばねなく滅びはてて、季英一人なむ、彼が後とて侍る。三月(六)(七)のあいれしゐひはするともがら、一生一人なし。七歲にて入學して今年は二十一年(八)、それよりいく(九)、眼のぬけ、臓の盡きむを期に定めて、大學の窗に光朗らかなる朝は、眼もかはさずまもる。光を閉ぢつる夕は、草叢の螢をあ

〔語釋〕
（一）學問料
（二）未詳
（三）武藝を業として
（四）料足卽金錢をいふなるべし
（六）博士等に
（七）默し居る
（八）咎にして

〔考異〕
（五）給はぬなし―給はぬはなし

つめ、冬は雪を集へて、部屋に集へたること、年重なりぬ。然あれど、當時の博士、あはれみ淺く、貪欲ふかくして、料(一)賜はらで、今年廿餘年になりぬるに、一つのしき(二)あてず。昨日今日入學して、兵(三)を業として、惡を旨として、博打、狩、漁にすゝめる者の、黑しあかしのさとり無きが、足(四)を奉るを、序を越して、季英多くのついでを過しつ」許多の博士の前にて紅の涙を流して申す。聞召す人、涙を流し給はぬ(五)なし。あるじの大殿、正頼「この學生がかく申すは、如何なる事ぞ」と問はせ(六)給へば、博士ども聞ゆ、「季英、まことにさとり侍る者なり。されど彼が魂定まらずして、公私、妨となるべきによりて、えせず侍るなり」と申す。季英、爪を彈き、天を仰ぎてさふらふ。大將のおとど、正頼「然侍るものか」とあまねく問はせ給ふ。心を合せて鎭む(七)る中に、さうとうしき忠遠、「今氏の院に、魂定まり、身の才すぐれたる者、これのみなむ侍る。人の爲に犯、過一期一生なし。身の便なきをおこ(八)

〔語釋〕
(二)「おこなはずそれに」歟
(四)「なし」は「なく」歟
(五)「さう」は「莊」歟
(六)此處誤脫あるべし
(八)誤あるべし、「一」に「う」とかける本もあり
(一〇)有爲の季英が嘆くは道理也
(一二)武惡の者の意歟
(一三)魂をさまりぬるものなりの意
(一四)藤英の作れる詩を

〔考異〕
(一)學生—かうたゞ
(三)臥すこと—やすること
(七)かくそくら—かくそくう
(九)功ある—ちうある
(一一)なり—なりや

たりとして、學生(一)院内すげなくして、わたくし豐にさとりなき學生どもには、ゆたかに賜へれども、季英がたよりを失ひて、學問につかるゝをば、一度のしきおこ(二)なふおそれに勞れ臥(三)すことなし(四)、跡を絶ちて籠り侍る學生なり」と申す。おとゞ、

正賴「大學勸學院といふものは、大臣公卿よりはじめ奉りて、封を分け、さうを入(五)れ、俸祿をおき(六)たる所は、大學のみちに(七)かくそくらといふことあらむ。豪家としてある正賴だに、ことにせぬ事なり。御子たちの御俸祿、かず數多あり。自らも一わう賜はる。かゝれども、家に功あるものに賜ひて、餘るをこそ料物奉るには給(八)ぶ。季英が申すごとくには、公(九)に仕うまつりぬべき者にこそあなれ。堪へたる事なき人だに、身の沈むをば愁とする事を、理(一〇)(一一)なり。貧しきをおこたりにせば、正賴こそは交らはざらましか。魂におきては、身の憂ある時は、公私にうれへをなし、よき人も鎭まらず、事叶ふときには、ふ(一二)あくの者もを(一三)さまりぬるものなり」など宣ふ。博士たち畏まりてさふらふ。おとゞ作(一四)れりける文を一人

〔語釋〕
(一)「あはせて」の「て」衍文なるべし
(三)「びさう」は貧相歟
(七)未詳

〔考異〕
(二)這ふてふ—這ひてし
(四)びさう—心みさう
(五)鬢搔きつくろひ—鬢かきよそひ—鬢かきひげそりよそひ
(六)言語—よく
(八)元則らが許に越し給へ—元則らも御許にぐしたまへ

に誦ぜさせて、御琴にあはせ(一)てさす。他事なく面白し。おとゞ、季英に御土器賜ふ。

正賴 色かへぬ松をばおきて藤が枝を秋の山にもうつしてしがな

季英、賜はるとて、

藤英 あらかねの土のうへより藤かつら這(二)ふてふ今日ぞ嬉しかりける

と聞ゆ。おとゞ、藤英が姿を思ほすほどに、民部丞藤原元則、あざやかに麗はしき裝し、すぐれたる帶さして出で來たるを御覽じて宣ふ 正賴「この學生、びさう(三)(四)なり。元則、しばし布衣になりて、その裝束、この學生に取らせよ」元則かしこまりて、藤英を呼びかくして、(五)鬢搔きつくろひ裝束せさせつゝ言ふ、元則「主は言(六)語絶え給ふなめり。元則らも、道のことのいみじう悲しきことは知り給へたり。細かなるこしかうたいも侍らず。主もはた然もし給はざなり。一向にあひ仕うまつらむ。(七)(八)元則らが許に越し給へ」など言ひて、つくろひ立てたり。裝束かたち、笑

〈語釋〉
(一)あて宮に懸想する心の歎み難さに出立ちし也
〈考異〉
(二)思ほゆ―おぼゆ
(三)院にまかでてもなほ―院のうち曹司にて
(四)かくて―ナシ
● 懸想人等歌をあて宮に贈る

ひつる學生らにこよなく勝りたり。つくり出だせる文そこばくの中に勝れたり。衆の中たゞ今一なり。

かくて、垣下の所の物の音出だして遊びおかして、曉方にみな、博士、四位には女のよそひ、五位には白張一かさねづつ　あはせの袴一かさねづつ給ふ。藤英も賜はれり。藤英、かしこき心に思ひ狂ひて(一)出で立ちしを、かひなくて殿をまかづることの、劍にあたるごと思ほゆ(二)。然ありとて、すべき事も思ほえねば、中の大殿の東面なる竹の葉に、かく書きつく、

藤英　ひこ星のあひ見てかへる曉もおもふ心のゆかずもあるかな

と書きてまかづ。院(三)にまかでてもなほ思ふこと限なし。

(四)かくて東宮より

東宮　つれもなき人をまつ間に棚機の逢ふ夜もあまた過ぎにけるかな

常にもうらやませ給ふかな。なほ斯うのみあめる。其處にや參り來べき。

〈語釋〉
(一)棚機とは東宮をいへり
(二)古今集「君や來む我や行かむのいさよひに眞木の板戸もさゝず寢にけり」
(三)「をとこ君たち」の誤歟
(五)實忠が兵衞の局を訪ひし時兵衞があて宮の御前に出で居て下らざりし事ありしなり
(六)あて宮の御食事の御給仕
(七)蜩
〈考異〉
(四)御琴―御碁
(八)なになり―なになる

など宣へり。あて宮、

(一)棚機の逢ひ見ぬ秋をまつものを逢ふ夜をのみもあまた聞くかな

ゆゝしき物羨をのみも、となむ。まことやまきの板戸(二)はさゝでのみなむ。

と聞え給ふ。

源宰相、中のおとゞの簀子にて、おとゞ君だち(三)、御琴(四)あそばしなどする夕暮に、御簾のもとにて兵衞の君に、實忠「(五)などか、一夜は下り給はずなりにし。今は君さへつれなくなりまさり給ふこそ侘しけれ」兵衞、「變らぬものは然ぞ見ゆるや。一夜は、まかなひにさふらひしかばなむ」など言ふほどに、蜩(七)たちかへり鳴く。宰相の君(六)、

實忠　夕されば　まろねする身の侘しきになく蜩の聲やなに(八)なり

と宣へど聞き入れ給はず。兵部卿宮より、

おく露に萩の下葉は色づけどころも擣つべき人のなきかな

如何せむ。斯くてのみはえあるまじきを、つれなき御氣色に見給ふるこそいと侘しけれ。

と聞え給へり。御返なし。右大將、

兼雅　いくたびか夜(一)にかへすらむ唐衣かへすがへすも恨みらるゝは

かつはあや(二)なく。

など聞え給へど御返なし。平中納言殿より、

正明　浦風はあるゝ海にも吹くものをなどあらししも早き川瀬ぞ

有りがたき御心となむ。

(三)聞え給へり。三の親王、

忠康　おぼつかなまだふみも見ぬもの故に君はあたごと思ほゆるかな

と聞え給へり。

月のおもしろき夜、今宮、あて宮、簾のもとに出で給ひて、琵琶、箏の琴、おも

〈語釋〉
(一)一夜の中に幾度かかへすらんの意、裏返して衣を著て寐れば思ふ人を夢に見るといふ俗傳ありし也
(三)「聞え」の上に「と」あるべし

〈考異〉
(二)あやなく—あやし

㊃　あて宮月夜に琴を彈く。仲忠孫王の君を介して歌をあて宮に贈る

しろき手をあそばし、月見給ひなどするを、仲忠の侍從、隱れ立ちて聞くに、調よりはじめ、違ふところなく我が彈く(一)手とひとしきを聞くにしづ心なし。身はいたづらになるとも、取り(二)や隱してまし、など思ふにも母北の方の御事を思ふに、なほいとほしく思ほゆ。思ひわづらひて隱れたる簀子に立ち入りて、孫王の君に、仲忠「などか一日の御かへりは宣はずなりにし」いらへ、孫王「侍從の君と御碁あそばす折なりしかばなむ」侍從、仲忠「承(三)はりからにやありけむ、あはれ手つき思ひやられても遊ばすなるかな。箏の御琴は然(四)なゝり。琵琶は誰が遊ばすぞ」いらへ、孫王「今宮にやおはしますらむ」侍從、仲忠「今だに斯る御琴ども、如何(五)にあらむとすらむ。いでや、かく物の覺(六)ゆればや、人の過をもすらむ。限なく思ひ忍べど え堪ふまじくもあるかな」いらへ、孫王「よくもあらぬものこそ、さる心もあれ。うたても宣ふかな」侍從、仲忠「いくそ度か思ひかへしぬ。されど、然てのみは得こそあるまじけれ。如何せむ」孫王の君「ものな宣ひそ」とて立ちて

〈語釋〉
(二)あて宮を奪ひて立退かんかなどと
(三)聞く者の心持故かあて宮の琴の音が身にしみて聞ゆると也
(四)あて宮がひくならん
(五)將來は
(六)人の過失をし出すは此樣に思の堪へ難き時の事なるべし

〈考異〉
(一)彈く—ナシ

入れば仲忠「見給へ。(一)然聞ゆとも、世に惡しきわざせじや」な(二)どて引き留めて、仲忠「まめやかには、いかで、餘所ながら物一言聞えさせてしかな。然はありぬべ(三)しや」孫王「いで、あなむくつけ。とき〴〵宣ふ返事も、いと聞え難うし給ふを、とかくしてこそあれ。思ほしだにかくるこそ、いとめざましけれ」(五)仲忠「怪しや。(四)内裏にては、仁壽殿などにても時々召して、もの宣ひなどはせずや。など人は(六)え宣ひ觸(七)れぬにこそあめれ」いらへ、孫王「それも、人してこそは聞え給はめ。此處にも己らは聞えずやは」など言ふ。侍從、龍膽の花押し折りて、しろき蓮の花に、笄のさきして、斯く書きつけて奉る、

仲忠淺き瀬にながれ(八)てくだる筏士はいくらのくれ(九)かなかれ(一〇)來ぬらむ

かく思う給へては久しくなりぬるを、いかで今宵だに、一言だに聞えさせてしがな。いらへこそ宣はざらめ、聞召すばかりには、何の罪もあらじ。とてなむ奉る。宮見給ひて、あて宮「何處にあるぞ」と宣ふ。孫王の君、「東の簀子

〔語釋〕
(二)「などとて」なるべし
(四)逢ひて詞をかはしたしなどと
(六)誤あるべし
(九)くれ—榑、暮
(一〇)なかれ—流れ。泣かれ

〔考異〕
(一)見給へ—まち給へ
(三)ありぬべしや—あるべしや
(五)めざましけれ—あさましけれ
(七)觸れぬに—「に」ナシ
(八)ながれてくだる—なげきれわたる

に」あて宮「然ば琴ひきつるは聞きつらむな。あな恥かしや。みな上手ぞや。われは聞えじ」(一)(二)とて入り給ひぬ。侍從聞きて、仲忠「あな心憂のことや。なほ吾が佛、(三)今宵ならずともたばかり給へ。人よりも親に仕うまつらむと思ふ心ふかきを、かゝる思つきにしより、片時世に經べくは思ほえねば、今さらに不孝の人になりぬべきがいみじければ、いさゝか(四)思ひ鎭まるやとてなむ」と泣く〳〵夜一夜物語しあかして、つとめて、黒方を銀の鯉にくはせて、その鯉に、斯く書きつけて奉れたり、

仲忠夜もすがら我がうかみつる涙川つきせ(五)ずこひのあるぞ侘しき

とて奉れたり。あて宮ものも宣はず。孫王の君、「この度はなほ宣はせよ。殊にものも宣はせず靜なる人の、心たましひもなく、泣きまどひ給へば、いとほしくなむ」と聞ゆれば、あて宮「聞きにくきこと出で來ば、君の御罪になさむ」とて、銀の川に、沈の松(六)ともして、沈の男に持たせて、(七)かく書きつけて遣はす、

〔考異〕
(一)返事せじ
(四)せめて詞をなりともかはしたらば心の鎭まる事もあらんかと思ひて賴むぞと也
(六)松明

〔語釋〕
(二)聞えじ—きかじ
(三)吾が佛—あがみ佛—あがきみ佛
(五)つきせず—つきせぬ
(七)てかく—ナシ

あて宮 川の瀬にうかべる男かゞりびのかげをや己がこひと見つらむ

など宣ふ。

近き程にだに、斯く思ほし入らるめれば、まして紀伊國の源氏、限なく思ひ歎くまゝに、かたち淸らに心ある童べ、人の子どもに裝束を淸らにせさせて、時々にめづらしき花紅葉、おもしろき枝に、ありがたき紙に書きて、日にしたがひて奉(一)らるゝに斯くなむ、

涼 數知らぬ身よりあまれる思にはなぐ(二)さの濱のかひもなきかな(三)

とのみなむ。いでや、塵もこそ積るところあなれ。とまるかげも覺えぬこそ、おぼつかなけれ。

など聞えたり。おとゞ見給ひて、正頼「上(四)手の所にうち出でたるに、かたはらいたからぬ文かな」など宣へど、御返りなし。

中のおとゞに庚(五)申し給ひて、男女、方わきて、石はじきし給ふ。侍從、御前なる

涼仲澄等歌をあて宮に贈る

〔語釋〕
(二)なぐさ—名草、慰
(四)貴人の前へ出しても
(五)庚申待

〔考異〕
(一)奉らるゝに—奉らる
(三)かな—かも

硯に、手まさぐりして、

仲忠 寐る間なくなげく心も夢にだにそふやと思へばまどろまれけり

と書くまゝに消えぬ。あて宮、見ぬやうにて物も宣はず。

源宰相、伏し沈みて、死ぬ〳〵と、天の下に惜まれつゝこもり臥して、思ひなげきて、かく聞えたり、

實正 數ならぬ身を思ひ給へ知らぬやうなるが畏きに、聞えさせじと返す〴〵思う給へれど、徒(一)になりぬばかりも、覺束なくて歇みぬるがいみじければ。

いでや、

涙だに川となる身(二)の年を經てかく水莖やいづち行くらむ

たゞ今も死ぬる身なれど、もしやと賴み聞えさせてなむ、今の程めぐらひ侍る。吾が君〳〵、たすけ給へ。

と聞え給へり。あて宮、「かくも言はぬものを、いとほしくも言ひたるかな」とは宣

〔考異〕
(一)なりぬばかり—なりぬるばかり
(二)身の—身に

〈語釋〉
(一)實忠危篤なりとて
(三)「宣へば」は「聞ゆれば」の誤なるべし
〈考異〉
(二)などしも―なども
(四)たゞ―ナシ

へども、物も宣はず。兵衛の君、「なほ此の度ばかりは宣はせよ。いみじくなりに(一)たりとて、いとほしがり給ふを、人を助くると思せかし」あて宮、「我に負すこそ怪しけれ。さてもかゝる人には、またなむ言はぬぞよき」兵衛「などしも(二)人に情なく思しなりしぞ。然あらでも見えぬるぞよき」など宣へば、(三)あて宮「さば聞えつべき人にこそは、時々ものすれ」とて物も宣はず。

兵衛良佐、思ひまどひてたゞ(四)斯くなむ、

行政 數ならぬ身を初秋のわびしきは時雨もいろに出でぬなりけり

など聞えたり。御返なし。

吹上(下)

梗概

㊀仲頼嵯峨院に吹上の勝景を奏す。御幸の準備。㊁嵯峨院吹上御幸。涼、院の殿上を聽さる。九日の宴。忠こそ法師吹上に參會す。涼仲涼を伴ひて還御。㊂神泉苑の紅葉の賀。藤英進士になさる。涼、仲忠琴を彈く。奇特。涼、仲忠中將に任ぜらる。仲忠に朱雀院の女一宮、涼にあて宮を賜ふべき勅。涼其の師彌行の事を奏す。㊃涼、三條に住す。その榮華。㊄忠こそ法師、眞言院の何闍梨に任ぜらる。落魂せる繼母を扶養す。宮あこ君を介して歌をあて宮に贈る。㊅懸想人等歌をあて宮に贈る

〈語釋〉
㊀仲頼、嵯峨院に吹上の勝景を奏す。御幸の準備
(一)嵯峨院
〈考異〉
(二)年の内の―年の内―年の内に
(三)程はいつか―程にいつかはと
(四)近き…春日野―近きほとりは嵯峨春日野

かくて八月中の十日の程に、院の帝(一)花の宴し給ふ。上達部、親王たち、殘りなく參り給ひて、御遊し給ふ。帝、嵯峨「年の内(二)の草木のさかり、秋の程はいつか(三)」と問はせ給ふ。藏人少將仲頼奏す、「野のさかりは八月中の十日、山のさかりは九月上の十日の程になむ」嵯峨「野山の中にはいづれか面白き」仲頼奏す、「近きほど、(四)野は嵯峨野、春日野、山は小倉山、嵐山なむ侍る。草木などは、心生ひに生ひたるは拙きものなり。人近にて、朝夕撫でつくろひたるなむ、姿ありさま情侍る。

〔語釋〕
(一)小鷹狩をして
(四)正頼
(五)趣ある
(六)「いとこそゆかしけれ」なるべし「いとゆかしけれあるかし誰かれも」とかきたる本もあり

〔考異〕
(二)木の葉も—「も」ナシ
(三)殊なり—殊なるに
(七)などかは—などかそは

花紅葉などは然侍らぬ物なり」と奏す。嵯峨「今年は、あやしく木の葉の色ふかく、花の姿をかしかるべき年になむある。興あるをかしからむ野邊に、小鷹(一)入れて見ばや」と宣はす。仲頼、「しか侍る年になむ。木(二)の葉もまたきに色づきて、おなじ露時雨もげに心ばへ殊(三)なり。つかさの大將(四)、尉ひき連れて大原野にまかりて侍りしに、その野いといみじき程になりにて侍りぬ」上、嵯峨「いとをかしき事かな。いかめしき逍遙などする、故(五)あるわざなりかし。さて何事かありし」仲頼、「異なる事侍らざりき。あまたが中に、こともなき、小鷹一つなむ侍りし」上、嵯峨「かの鷹を試みばや。入り所のをかしからむ、思ひ出でよや」仲頼「仲頼が見給ふるは、さきに奏し侍りし紀伊國になむ侍る。十六の大國にも、さばかりの所やは侍らむ」上、嵯峨「そよや、さる事ぞや。いと(六)ゆかしけれ。誰彼も然奏せしかど、いかでかは彼處まではものせむ。いと所狹きうちに、例なき事にもこそ」と宣はすれば右のおとゞ、忠雅「などかは(七)おはしまさゞらむ。唐の國の帝は、遠狩し給ふとて

〔語釋〕
(二)九月九日菊の宴
(三)藤英
(四)正頼が藤英の支度の世話をする也
㊁嵯峨院吹上御幸。涼院の殿上を驅さる。九日の宴。忠こそ法師吹上に參會す。涼を伴ひて還御

〔考異〕
(一)かたちを—かたちなど
(五)かくて院の—かくて嵯峨の院の
(六)おはしまして—おはしましぬ

は、十日二十日こそはありかせ給へる。まして四五日の程は、いとよくおはしましなむ」と奏し給へば、御氣色よくて、嵯峨「さらば」など宣はす。これかれ、「この頃こそ草木のさかりに侍れ。衰へざらむ前に御覽ぜさせばや」と聞ゆれば、嵯峨「よろしく定めてものせむかし」とて、才ある人、ある限(一)かたちを擇び給へり。(二)九日の宴は彼處にてきこしめさむ、とて文章生などさふらはせ給ふ。(三)季英かしこきものと聞召して、さふらふべき由仰せ給ふ。(四)大將殿、裝束、馬、鞍よりはじめて出だしたて給ふ。(五)かくて、院の御子たち、殿上人も、才あり、容貌あるは、みな出で立つ。紀伊國の源氏かゝる事をきゝて、御設し給ふ事いといみじ。九月一日に出でおはします。道のほどの事ども言ひ盡すべくもあらず。紀伊國に入り立ち給ふさかひよりはじめて道のほどの事ども、種松、金銀、瑠璃してつくれり。吹上の宮に著き給へれば西の陣をひらきて入らせ給ふ。五日の申の時ばかりに(六)おはしまして、めでたく磨きしつらへる所に、皆著き竝み給ひぬ。いとにな

き所なりけり。いかで斯くて住むらむ、と御覧ず。威儀のおものは、更にも言はず、上達部、御子たち、沈、紫檀の衝重して海山の(一)ものを盡してまゐり、六位の衛府、諸大夫、しなぐ〜に(二)いかめしくて、饗したり。上よりはじめて、御箸くだり、御土器まゐる。源氏殿上ゆるされて、御前に召して(三)御覧ぜらる。そこばく擇ばれたる人々に劣らず御覧ぜらる。御遊はじまりて、上琵琶の御琴、仲忠に和琴、仲頼箏の琴、源氏に琴の御琴賜ひてあそばす。(四)つよむ事なくおほめく事なし。嵯峨「いかで斯くはし習ひけむ」と仰せたまひて、又箏の御琴たまひて彈かせ給ふ。何れも(五)いとめでたし。(六)こくばくの上手どもに勝れり。御琴を取りてさふらふを御覧じて、

嵯峨　きのふまで二葉の松と聞えしを蔭さすまでもなりにけるかな

式部卿親王、

根をひろみ蔭もおよばぬ庭の松に(七)枝のならぶぞ嬉しかりける

〔語釋〕
(四)源氏涼の態度の遠慮なきをいふ
(七)涼を兄弟にもてる嬉しさをいふ

〔考異〕
(一)ものを—「を」ナシ
(二)いかめしくて—「て」ナシ
(三)御覧ぜらる—御覧ず
(五)いとめでたし—いとめでてたし
(六)こくばく—そくばく

兵部卿親王、

昨日けふ岸より生ふる松なれどすぐれてさせる枝にもあるかな

かくて(一)九日こゝにて聞食す。御前をみがき飾れること限なし。(二)笆の縦木には、紫檀、横木には沈、結緒には緂の組して結ひて、黄金のいさご敷きて、黒方を土にしたり。銀して菊を(三)かざり、うつろへる(四)花など調へたるなかに、紺青、緑青の玉を、花の露におかせたり。その日のつとめて(五)はかすそうせさせて、源氏參らせ給ふ。この源氏の名は涼となむありける。菊につけたりける歌、

涼　朝露にさかりの菊を折りて見るかざしよりこそ(六)御世もまさらめ

帝御覧じて、いと切なりと思したり。

嵯峨　(七)餘所ながら玉なす(八)ものは菊園の露のひかりを(九)見るがうれしさ

式部卿親王、

秋來れば園の菊にもおくものをわがみの露をなど(一〇)嘆きけむ

〔語釋〕
(一)九月九日の宴
(二)菊のめぐりにたつるませがき
(五)巨勢利和曰、土佐家本に葉數と字注せり
(七)我子ながら今まで餘所にして經來りし涼の立派に生ひ立ちたるを見る嬉しさの意
(八)ものは—ものと歟

〔考異〕
(三)かざり—かざれり
(四)花など調へたるなかに—花などの上中下に—花などの上下などに
(六)御世も—みにも
(九)見るがうれしさ—見るぞ嬉しき
(一〇)嘆きけむ—嘆くらむ

〔釋語〕
(一)正賴
(三)正届
(五)盛り物
(六)亙勢利和曰、十六の大國の生物歟
〔考異〕
(二)皆—ナシ
(四)よろひに—「に」ナシ
(七)沈—ナシ

中務親王、
菊園にいくらの齡こもれゝば露のそこより千代を延ぶらむ
兵部卿親王、
白菊のおなじ園なる枝なればわかれず匂ふ花にもあるかな
左大將(一)
白菊の千歳をこめて待つ園にのこれる露を玉と見るかな

かくて帝出でおはしまして、上達部、親王たち皆(二)著き竝みたまへり。御前には、錦の幄うちて、陣の座に文人學生など著き竝みぬ。暫しあれば、宣旨くだりて、殿上人仲賴、行政、涼、仲忠四人召されて、(三)横座につきぬ。かゝる程に、御前に、沈の棚厨子九よろひに(四)、棚一つに、おなじ轆轤挽の御器十五、こがねの御器十五づつ、(五)よそひは十六(六)の生物、干物よりはじめて貝甲をつくして、御菓物、數を調へかざり盛りたり。御物の臺九よろひ、(七)沈、黃金の御器、まゐり物おなじ數なり。

〔語釋〕
(一)未詳。「ゐかいおまへをかへてたまひ」と書ける本もあり
(二)くりかへし
(三)「たいさく」は對策なるべし、されど詞のつゞき穩かならず。
(六)祖父俊蔭と時を同じうせず
〔考異〕
(四)たいさくとて―かたき題いたさむとて
(五)二十―三十

御子たち、上達部に、紫檀の衝重、おなじ轆轤挽の御器、ほど〳〵に隨ひてとゝのへて參る。殿上人よりはじめて、所々の上下の人々におの〳〵馬添、ゐかは(一)おさへをかへまで賜ひ、おなじくくだし給ふ物も、いかめしくうるはしく盛りてくみとゝのへて、飽き滿ちたり。かくて御土器はじまる。文人に難き題出されたり。賜はりて、文つくりはてて御前に奉る。文章博士講師讀みまうす。諸聲に誦せさせ給ふなかに、季英が聲をきこしめして、帝驚きめでさせ給ひて、たちかへり(二)誦せさせ給ふ。うち次ぎて四人の殿上人の文講ず。帝驚きめでさせ給ふ。嵯峨「たび〳〵唐土にわたれる累代の博士の文に劣らず、この男どもの作り勝れるかな。(三)(四)たいさくとて學問せさせたる道の人にもあらず。年若くして遊にすゝめる者どもなり。行政幼くて唐土に渡れりといへども、まだ年若くて歸りまうで來たり。仲忠俊蔭が後といへども、俊蔭かくれて二十(五)餘年、仲忠世間に智ありといへども、(六)彼が時にあはず。琴にお

〔語釋〕
(一)春海翁曰、屯はむらとよむべし
(二)高麗錦歟
(三)誤脫あるべし
〔考異〕
(四)めづらかなる聲―めづらしろ聲―めづらしかなる聲

きては女に傳ふ。女仲忠に傳ふ。それだに有難し。文の道さへやは俊蔭女子に教へけむ。すべて仲忠、仲頼はいとあやし。變化の者どもなめり」と宣はするほどに、その日の祿、源氏の君、帝の御前に、銀のすきばこ、おなじ臺にすゑて、九つの包のなかに、綾錦よりはじめて、ありがたき藥、世に出で來がたき香、帝いまだ御覽ぜぬ物ども、銀黃金にて細かにし入れて參らす。上達部、御子たちまでつらねて持て參りて、立ち竝べり。左右の大臣、御子たちよりはじめて、白絹、たたみ綿百屯(一)、殿上人諸大夫どもよりはじめておほくの百官、しな〴〵にいかめしき事どもなり。上臈の御供の人々まで、程につけて賜はす。かくて夜に入りぬ。御前に、黃金の燈籠、燈蓋、沈の御松明、前ごとにともしたり。(二)高麗の幄十一間を鱗の如くうちたり。沈の舞臺、かねの絲して結ひわたし、よろづの樂器ども、金、銀、瑠璃をみがき調へて、簫四十人笛四十人、彈き物、舞人數を盡して參る。穴(三)ある物を、(四)めづらかなる聲せし御時なり。その道の上手、數を

盡したり。撰びすぐりたる上手を整へたり。亂聲、鼓、物の音、一度に打吹き、彈きあはせたり。夥しくいかめしく(一)めでたし。明くるまで遊ぶ。

其の夜、物の音しづまりたる明け方に、はるかに、行人の聲きこゆ。帝、聞しめして、嵯峨「怪しくたふとく讀經するものこそあれ。尋ねて召せ」と宣ふ。藏人、殿上人、馬に乘りて、ほのかに聞ゆる方をさして行くに、神の宮にいたりぬ。そこにかの行人は讀經してあり(二)。これは忠こそなりけり。あて宮の御上をはるかに思ふまじき心つきて、「そのあたりをだに、今一度見せ給へ」と六十餘國を行ひありきけるを、召すに參らぬを強ひて率て參りて、「さふらふ」と奏す。帝御階のもとに召して御覽ずるに、木の皮、苔の衣を著て、いふばかりなきものから、ただの人に見えず。帝、なほこれはある樣ある者なりと思召して、嵯峨「何事により何れの山につとめ行ふ人ぞ」と委しく問はせ給ふ。忠こそ、(三)斯くなりにたれば見知る人もなけれど、思召しもこそ出づれ、と悲しくいみじく思ふ(四)。帝、仲頼、行政に、琴をしらべさせ給ひて、行人に孔雀經、理趣經よませ給ひて、あはせて聞召すに、あはれにかなしく、涙落さぬ人なし。帝、この行人を、ほのぐ＼御覽ぜしやうに思さる。左大將、仲忠などは、春日にて見給ひしかば、それと思へど、恥ぢ畏まりしを思して、たゞ今もいみじう思へるを見れば、知らぬ樣にてさふらひ給ふ。帝、むかしより御覽じたる人を思し出づるに、忠こそを思し出でて、それなりけりと思し定めて、左大將に宣はす、嵯峨「この人、見し樣なれば哀なるを、一人なむ思ひ出でたる。昔契られたる中(一)なれば、見知られたらむとなむ思ふ」大將、悲しと思して、え奏し給はず。帝、(二)右の大臣して、「昔の御時に、上にさふらひしと見るは、あらずや」と問はせ給ふ。忠こそ、氣色御覽ぜられぬと思ふに、涙雨のあしの如くこぼる。帝よりはじめ奉りて、聲も惜まずなむ。大將、正頼「この法師見給へつけしはじめより、奏せむと思う給へしかど「世に侍りけるを聞召されじ」と、限なく恥ぢかしこまり侍りしかば、今に奏せず侍りつる」帝、限なく

〔語釋〕(三)以下忠こその心

〔考異〕(一)いかめしく—ナシ　(二)あり—あなり　(四)おもふ—思へり

〔語釋〕(一)正頼と忠こそとは殊によかりし中なれば　(二)忠雅

〔語釋〕
(一)汝が隠れし事を

〔考異〕
(二)とし木の皮—とし木の葉木の皮
(三)出で—ナシ
(四)とて院の帝—ナシ

あはれと思召して、御階に召し寄せて、嵯峨「年ごろ今に至るまで、隠れにし(一)を思はぬ時なし。怪しくはかなくて失せにしは、如何なる事にてぞ」など問はせ給ふ。山伏くれなゐの涙を流して奏す。忠こそ「山にまかり籠りしは、父「剣をもちて殺害すとも、汝が罪をば咎めじ」とまで申し侍りしを、かの朝臣勞はる所ありて參らず侍りし頃、許されぬ暇を奏してまかり出でて侍りしに、俄に許さぬ氣色見えて侍りしかば、親を害する罪よりまさる罪や侍らむ、と魂しづまらずして、速かにまかり籠りて、山林を棲處とし、熊狼を友とし、木の實、松の葉を供養(二)とし、木の皮、苔を衣として、年頃になり侍りぬ」と奏す。帝かぎりなく悲しと思して、嵯峨「過ぎぬること歎くにかひなし。今よりだに、近くさぶらひて、御禱も仕まつれ」と仰せらる。嵯峨「かくて世にありけるものを、え求め出(三)でずもありけるかな」(四)とて院の帝、

嵯峨 谷深くおりゐる雲のたちいでずなど山のはを求めざるらむ

〔語釋〕
(一)「山の」は「谷の」の誤なるべし

山伏、
忠こそ 空なるを見つゝ入りにし山邊には雲のおりゐる谷もなかりき
式部卿親王、
空に滿つ雲のかよりし秋霧を山(一)の底よりいでむとや見し
中務親王
空よりも尋ねて雲のかよるてふ暗部の山を賴むなりけり
右大臣、
忠雅 入る人を墨染になす山よりや暗部てふ名を人の知るらむ
左大將、
正賴 風ふけば空にあそびし白雲を谷におりゐむとやは思ひし

夜あけぬ。斯くておはします程に、よろづの事をつくし給ふ。かくて歸りおはしますに、源氏率てのほらせ給ふ。種松、上達部、御子たちに、御衣櫃、馬、厨屋船など、さま〴〵奉(一)り調じたる樣、言はむかたなし。かくて歸らせ給ふ路すがらも、興をつくして御遊どもありけり。

かくて院の帝紀伊國より歸らせ給ひて、內裏の帝(二)神泉(三)に紅葉の賀きこし召すべき御消息きこえ給ふ。右大將、(四)三條の北方にきこえ給ふ、兼雅「紀伊國の源氏、御ともに率てのぼり給へりしに、神泉の行幸、院の帝もおはしまして、御遊あるべかなるに、侍從も琴つかうまつるべきに、同じくば人に勝らむこそよからめ。かの「しばし」と宣ひし琴は出だされじや(五)」北の方、俊蔭女「昔の人の、世の中に出だし給はずなりにし物を、己が世にしも取り出でむなむ苦しき」兼雅「世に有難き物の音、一度この侍從の仕うまつりたらむに、來し方行く先あるまじき事をせさせむ」とて乞ひ出給ひて、行幸のともに仕うまつり給ふ。

院の帝もおはしましぬ。世の中のものの上手ども、みな參り集りて、文人も撰ばれたるかぎり參る。院の帝、御物語の序に、嵯峨「怪しく、この世にめづらしき所

〔語釋〕
(二)朱雀院
(三)神泉苑の紅葉の賀。藤英進士になさる。涼、仲忠琴を彈く。奇特。涼、仲忠、中將に任ぜらる。仲忠に朱雀院の女一宮。涼にあて宮を賜ふべき勅。涼其の師彌行の事を奏す。
(三)神泉苑
(四)兼雅

〔考異〕
(一)奉り—率る
(五)出だされじや—出だされなむや

（語釋）

(二)涼の事は兼て聞及べり

(三)稍を殿上に

(四)令義解に「凡秀才試二方略策二條一。文理倶高者爲二上々一」注に「方大也、略要也、大事之要略也」

(六)處誤脫あるべし

（考異）

(一)さふらはせ—とぶらはせ

(五)別いても—まいても

ありと、これかれ申しゝかば、見給へむとてものせしを、この涼が侍る所になむ侍りける。けに、見給へしに、世に似ずなむ侍りける。さる所に、さてのみ侍るまじく見えしかば、率てまうで來しを、殿上などゆるさせ給ひて(一)さふらはせ給へかし」帝、朱雀「承(二)るものなり」とて宣旨くだりて召上(三)げられぬ。かくて事はじまりて、文人ども題賜はりて、上達部、殿上人、文人ども文臺に文奉る。季英、試みの題たまはりて、一人舟に乘せられて出でたり。すなはち面白き文つくれり。進士になされて方略(四)の宣旨くだりぬ。かくて御遊はじまりて、上達部、惜む手なく仕うまつる。院の帝きこえさせ給ふ、嵯峨「上達部惜む手なく仕うまつるに、涼、仲忠、徒にさふらふまじき者なり」と宣はせて、嵯峨「琴仕うまつらすべし」ときこえ給ふ。帝、朱雀「おほせ給はむかし。別(五)いても仲忠、琴賜ひて効なきことなむあまた度侍り」とて、仲忠を召して、朱雀「こゝにかうなとにも仕うまつらず、「仲頼、行政ら、手をしまぬ夜なるを、仲忠しも徒(六)にさふらふまじきものなり」と院

（語釋）

(一)巨勢利和曰、此はそを風の琴は俊蔭が家に納めしを今日なん風の琴と共に兼雅の持ちて來りし也

(二)巨勢氏曰、此琴は朱雀院の東宮にておはしましゝ頃俊蔭の奉りし也

(三)涼

（考異）

(四)ありつる—ありける

(五)蓬萊の不老不死の—とこよの國の不死の

(六)手を仕うまつりぬ—手つかまつりぬ

なむ仰せらるゝ。これに手一つ仕うまつれ」と仰せられて、ほそを風(一)を五箇に調べて、仲忠に賜ふ。花園風(二)を同じこゝろに調べて、源氏の侍従に給ふ。かしこまりて奏す、仲忠「他男どもは、今日の爲にさふらふに侍る(三)を、仲忠は、たま〳〵仕うまつる手は、前々に仕うまつりつくして、今日の爲にはさふらはずなむありつる(四)」と奏す。帝、朱雀「殘したる手なくば、さき〴〵仕うまつりし手を仕うまつれ。身の才は、人聞く所にて、上手とさだめらるゝなむよき。今宵仕うまつらざらむは何かせむ。早う仕うまつれ」と宣はす。なほ仕うまつらず。帝、朱雀「仲忠がためには、天子の位かひなしや。(五)蓬萊の不老不死の藥の使としてだに、宣旨免れがたさによりて渡れり。ともかくもあれ仕うまつれ」と仰せらる。仲忠かしこまりて、仰を承りて、涼と競ろひて、なほ聲立てず。帝、朱雀「如何はせむ。涼おそし」と仰せらる。涼、苦しと思ひつゝ、さきの調にて一の琴をほのかにかき鳴らす。仲忠、辛うじて同じことを僅にかき合せて、五箇の手(六)を仕うまつりぬ。夜深くな

（語釋）
（一）不言

りもてゆくまゝに、琴のひゞき高く出づ。人々ことに心とまりて、五箇の手どもを仕うまつりつくす。帝よりはじめ奉りて、そこらの人、涙おとし給ふ。帝御土器賜ふ。

朱雀　秋を經てこよひのことは松が枝にすごもる蟬も調べてぞなく

仲忠、

秋ふかみ山べにかゝる松風をめづらしげなく蟬や聞くらむ

院の帝、

嵯峨　ながき夜の更くるもうれし朝露をおとす小松の蔭にすゞめば

涼、賜はりて、

涼　風をいたみ露だにおかぬ小松には宮人すゞむ蔭やなからむ

（一）二の御子取り給ひて、琵琶仕うまつる仲頼に賜ふ。

二御子　蔭ごとに人のみすゞむ松よりは風も常磐に吹きわたらなむ

（語釋）
（一）嵯峨院第四の皇子

（考異）
（二）の琴―御琴

仲頼賜はりて、

仲頼　松ちかみ吹きくる風も荒れまさるあきの蔭には誰かすゞまむ

三の親王取り給ひて、箏の琴仕うまつる行政に賜ふ。

忠康　木がらしの風も吹きつと松蟲やしげき木蔭と人に見ゆらむ

行政賜はりて、

行政　年經れど色もかはらぬ松よりはいかで吹くらん木がらしの風

（一）四の親王、倭琴仕うまつる仲澄に賜ふ。

師宮　おしなべて松風にしも知られねどわが身すゞしき蔭にもある哉

仲澄賜はりて、

仲澄　かくれ沼の草葉もさやぐ風をさへ松の響にいかゞたとへむ

とて賜はりぬ。連ねて下りて、舞踏す。

かゝる程に、涼、仲忠の（二）琴の音ひとし。右大將の主、もたせ給へるなむ風を、帝

〔語釈〕

(一)以下仲忠の心

(二)今更やめる譯にはゆかぬ

(四)涼が琴の師の名

(五)天人—仙人

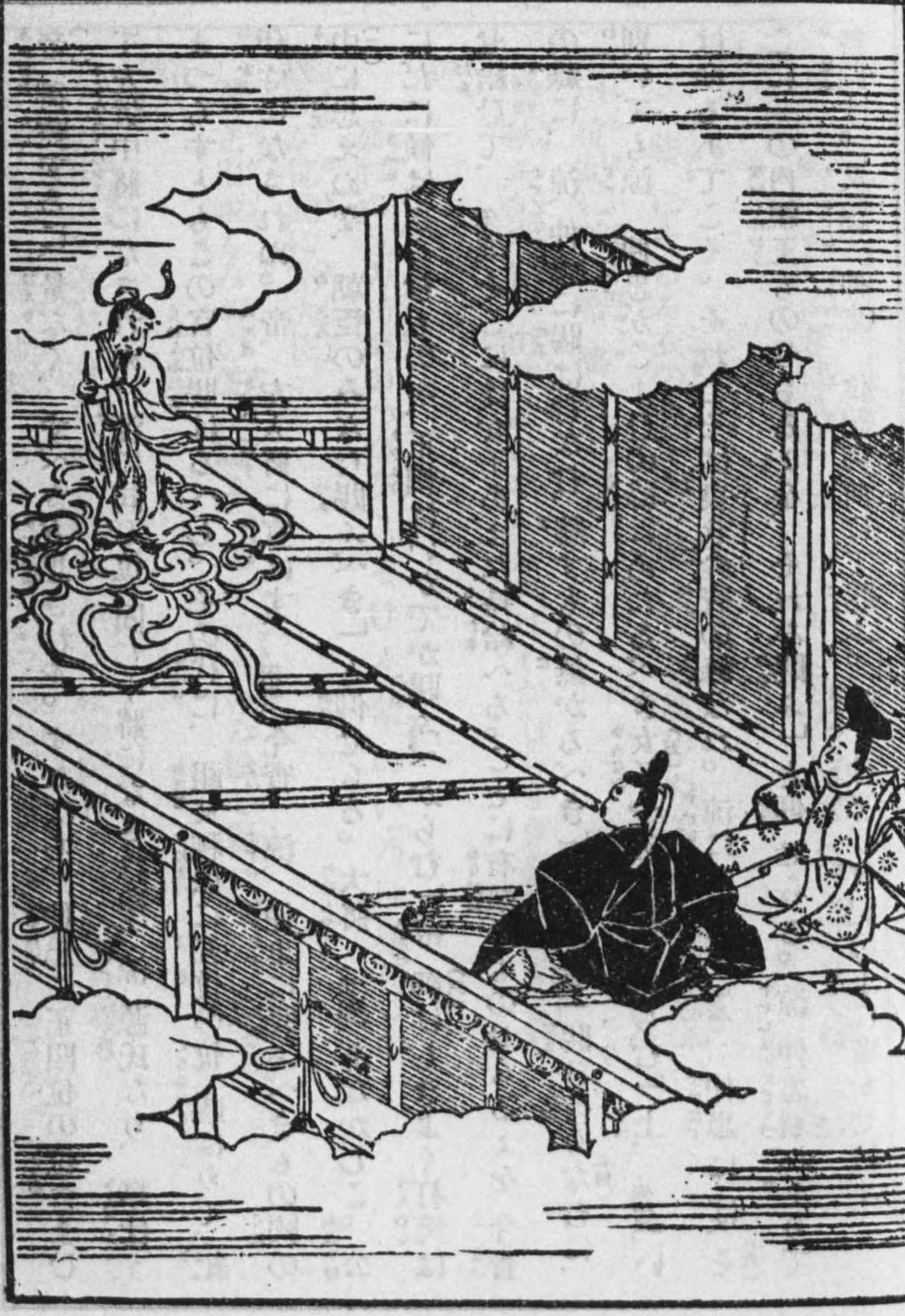
〔考異〕

(一)奉りて—「て」ナレ

に、兼雅「これなむ、仲忠が見給へぬ琴に侍るなり。仕うまつらせむ」と奏し給ふ。賜はりて何心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く。帝よりはじめ奉(一)りて大におどろき給ふ。仲忠(二)いまは限、この琴まさに仕(三)うまつり靜まりなむや。ねたく口惜しきに、同じくば天地驚くばかり仕うまつらむ、と思ひぬ。涼、彌(四)行が琴、なむ風に劣らぬあり、この琴を院の帝に參らせしを、帝同じこゝろに調べて賜ふ。仲忠、かの七人の人のつたへし手、涼は彌行が手を少しねたう仕うまつるに、雲の上よりひゞき、地の下よりとよみ、風雲うごきて、月星さわぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴りひらめく。雪衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人のしらべたる大曲、殘さず彈く。涼、彌行が大曲の音の出づる限仕うまつる。天(五)人くだりて舞ふ。仲忠、琴にあはせて彈く。

仲忠朝朗ほのかに見れば飽かぬかな中なるをとめしばし留めなむ

かへりて今一返舞ひて上りぬ。



〔語釋〕
(六)朱雀に皇長女がある故、仁壽殿腹の女一宮をいふ

〔異考〕
(一)帝—帝は
(二)中に—中には
(三)御氣色—御時
(四)なむに別いても—なむまいても
(五)女子やあり難く—女子やたれもあり難く
(七)崩れ下りて—くづれ立ちて

帝(一)御覽ずるに、量なく、すべき方思されず。すなはち、仲忠に正四位の位たまひて左近中將になされぬ。涼に同じ位、同じ中將になされぬ。涼 源氏なり、琴仕うまつらずともこの官位賜はるべし。その代に、祖父種松に五位の位 賜はりて、紀伊守になされぬ。帝、左大將に宣はす、朱雀「今宵、涼、仲忠に賜ふべきもの國の中(二)に思えぬを、朝臣のみなむ賜ふべき」と仰せらる。大將、正賴「あなかしこ。公にだに候はざらむものを、正賴はいかでか賜ふべからむ」帝 御けしき(三)よく打笑はせ給ひて、朱雀「そこには女子あまた持給へる。ことに有難くものせらるゝを、今宵の祿に、涼、仲忠に賜はむなむ、勝すもの無かるべき」大將、正賴「賜ひ侍りなむに(四)、別いても涼 仲忠がこよひの祿にあたるべき女子(五)やあり難く侍らむ」上、朱雀「いはゆるあてこそ。それこそは良き今宵の祿なれ。涼にはあてこそ、仲忠には、そ(六)こに一の内親王ものせらるゝを、それを賜ふ」と仰せらる。涼、仲忠崩れ下りて(七)舞踏す。又涼、仲忠、位記御前にて賜ふ。帝、仲忠が位記の上に書かせ給ふ、

〔語釋〕
(一)又琴をひかば三位に上せてやらん
(三)草葉は嵯峨院自ら比していふ歟
(五)五位の袍の赤きを紅葉に比したる也
(六)昇殿を許さる、「ゆるさるゝ宣旨」なるべし

〔考異〕
(二)涼の—涼が
(四)朽葉の—草葉の

朱雀 松風(一)のとくふきほさば紫のふかき色をばまたも染めてむ

仲忠、
紫にそむる衣の色ふかみ乾すべき風のぬるきをぞ思ふ

涼の位記(二)に院の帝 書かせ給ふ、

嵯峨 秋ふかみ野べの草葉(三)はおいぬればわかむらさきを今は賴まむ

涼、
盛だに花の朽葉(四)のつゆをこそけふ紫の「いろ」は染めけれ

種松が位記に左大臣、

忠雅 立田姫(五)もみぢの笠を縫ふことは一木ある松を露に」あへとぞ

種松、
佐保山のみどりの峰に隱れたる松の陰にも今は入りぬる

など聞えて、涼、仲忠、下りて舞踏す。種松、すなはち上(六)ゆるさる。宣旨下りて

〈語釋〉
(一)仲忠涼の琴のあまりに上手なりを怪しむ也
(二)「たひの」は「たらこの」の誤歟
(四)技藝を以ての仕官
(五)山伏即ち彌行也
〈考異〉
(三)仕うまつれる―仕うまつれば
(六)よりて―「て」ナシ
(七)きんち―きんだち

まうのぼりぬ。院の帝、(一)おどろき怪しがらせ給ふ。嵯峨「仲忠の朝臣がことは、俊蔭の朝臣が手にまさること限なし。涼、變化のものなり。五箇の調は、俊蔭彌行と等かりし、(二)たひのいやゆきが手なり。彌行かくれて三十餘年、その筋絶えて繼ぐ人なし。涼二十餘、琴の曲の手彌行に等し。如何なることぞ」と問はせ給ふ。中將涼奏す、涼「彌行まかり隱れて今年六年になむなりぬる。(三)「仕うまつれる公に數まへられず。(四)才の宮仕かひなし。菩提のつとめを致さむ」とて、深き山に入りてつとめ侍りけるを、涼五歲にて熊野にまうで逢ひて、(五)山伏の申し侍りし、「世に琴仕うまつる名を施してき。この手とゞまらざらむ悲しさに(六)よりてなむ、今まで娑婆にめぐらひつる。(七)きんち、此の手を傳へ施すものならば、この世に亡からむ世なりとも、とぶらひ守らむ。速かに、今は、いさめる獸に身を施し深き谷に尸をさらしてむ」と申して、もとの山にまかり籠りにし。然ある遺言を、え施さず侍る事」と奏す。院の帝、おどろき哀がらせ給ふ。かくて、まづ内裏の帝かへ

㊃ 涼三位に敍せらる。その榮華

〈語釋〉
(二)「小家」の「小」衍文歟
(三)「たてまつる」は「たねまつ」の誤なるべし
(四)種松
(五)涼
〈考異〉
(一)の東―ナシ

りおはします」

畫詞 こゝは神泉。上達部、親王たち著き竝みたまへり。探韻賜はる。藤英舟に乘りて放たれたり。仲忠琴賜はりて彈く。雪ふれり。天人おり來て舞ふ。

かくて源氏三條の(一)東に(二)小家つくりて、磨きとゝのへて、淸らなり。寶を貯へ收めて、萬の調度を金銀、瑠璃にみがき立てたる所に、(三)たてまつる、女ぎみひき率て上りたり。種松、赤の衣に白き笏もちて、妻君をがむ。妻君「おぼえぬよろこびかな」と言ひて、

種松妻　おく露も時雨もよぐと見しものをかはれる色を見るが怪しさ

種松、

雲におよぶ松の末だにあるときけば籠れる根こそ色かはりけれ

(四)紀伊守國へ下りて、面白くらうある所に、たのしび遊ぶ。(五)中將は、世間の人、聟に取らむと爭ひ聞ゆれど、聞き入れず、宮仕心に入れて、交らひ人にゆるさる。

㊄ 忠こそ法師眞言院の阿闍梨に任ぜらる。落魄せる繼母を扶養す。宮あこ君を介して歌をあて宮に贈る

〔語釋〕
（一）「藤中將」なるべし、仲忠なり
（二）忠こそ
（三）内裏の内にあり
（七）諸國よりみつぎ物として官に納むる布
（九）是千蔭也
（一一）是忠こそ也

〔考異〕
（四）時めく―時なる
（五）いと―ナシ
（六）笠の…持ちて―市女笠のいたくそこなはれしを戴きて
（八）取らせて―くはせて
（一〇）また世に思ふことなく―ナシ

時めくこと、頭中將（一）と等し。かの行人（二）を、院の帝限なく勞はらせ給ひて、院の内に檀所賜ひなどしてさぶらはせ給ふ。むかし師に就きてかしこく受けられ、さとりいと深く驗ありしかば、院の帝奏せさせ給ひて、眞言院（三）の阿闍梨になされぬ。弟子同行など多く、身のいきほひ時めくこと（四）昔に劣らず。召ありて嵯峨の院に參る。車清らに裝束きて、人いと多くて（五）參る。御祈のこと承りてまかづる、御門のほとりにて、老いかゞまりたる嫗の乞食、笠のいたく（六）損はれたるを持ちて、頭は雪をいたゞき、顔は墨よりも黑く、足手は針よりも細くて、つきの布（七）のわゝけたる、鶴脛に著て、阿闍梨のまかづるを見て手をさゝげて、乞食「今日のたすけ賜へ」と後にたちて這ひゆく。阿闍梨あはれがり物など取らせて（八）、忠こそ「昔はいかでありし人の、何時より斯くはなりしぞ」と問へば、乞食は、限なき財の王にて、世の一（九）の人の妻にて、また（一〇）世に思ふことなくなむ侍りし。その人の子に、母（一一）なき男子の、かたち心勝れたるを持ちて、限なくかなしくし給ひ、君もになく顧み給ふがありしを、己（一）には繼にて侍りしけにや、心にたがふことの侍りしかば、いかでこの人を亡ぼさむと思ふ心ふかくて、親の家のたからの帶を取り隱して、それが盗みたると人に（二）いはせ、親の爲に咎あるべきことを作り出でて、その人（三）に負せて、つひになむその人を（四）失ひてし報にや侍らむ、身を（五）かへても、斯かる樣にはかけてもなり侍らじ、と思う給へし多くの財ども皆失せて、生きながら斯かる身をなむ受けて侍る」といふ。阿闍梨むかしの一條の方に聞きなし給へ（六）ば、時のかはるまで思ひ入りて思ふ程に、大殿（七）の大願をたててもとめ給ふ帶も、我にこそ負せけれ、また大殿の御氣色も、さば大なる禍を聞かせ奉れるにこそありけれ、年頃、胸の焔さめず、歎きわたりつることを、佛世におはしましければ聞きあきらめつること、と思ひて、久しくありて言ふ、忠こそ「さやうに、如何にしてか、さる罪なき人の爲（八）に、あやしき心をつかひ給ひし。然ありける報に、かゝる身となりぬ。來む世には、地獄の

〔語釋〕
（七）以下忠こその心、大殿は父千蔭

〔考異〕
（一）己には繼にて侍りしけにや―ナシ
（二）人に―ナシ
（三）その人に負せて―この人に言ひ負せて
（四）その人を―ナシ
（五）身を…皆うせて―ナシ
（六）なし給へば―なし給ひつ
（八）爲に―爲には

〔語釋〕
（二）君の餘命
（四）あて宮

〔考異〕
（一）し果てし—してし
（三）家—こや

底に沈みて、浮む瀬あらじ」といふに、乞食涙を流していふ樣、乞食「この事を悔いおもふも、焰に燃ゆるが如し。されども、し果てし事なれば、かへすべき方な（一）し。思ひ出づるなむ、あたらしく悲しく侍る」といふ。阿闍梨、忠こそ「今幾許もあ（二）らじと見給へば、世に經給はむ限、勞り奉らむ。後の屍をも收め、地獄の苦をも救ひ申さむ」と宣ひて、小き家つくりて籠めすゑて、物食はせ、衣著せなどし（三）て養ふ。

かゝる程に、左大將殿の宮あこ君、物怪つきて、いたく煩らふ。とかくすれども怠らず。この阿闍梨に告げ奉れば、かしこくしていたはり止めつ。阿闍梨、宮あこ君に、心うつくしく語らひ宣ふ。殿の事など問ひ聞きて、忠こそ「この春、春日におはしましゝ御方に、いさゝかなる事聞えむ。奉り給へよ」とて、斯く書きて（四）奉る、

忠こそとぢ籠り巖の中に入りしかど君がにほひは空に見えにき

懸想人等歌をあて宮に贈る

かくてしも思ひ離れぬものになむ。

とて、忠こそ「これたてまつり給ひて、御返かならず賜はりて賜へ」と言ふ。宮あこ君「更にかゝる事見給へぬ人なり。如何あらむ」阿闍梨、忠こそ「など斯く、いたはり止め奉る志をも思はで。相思せとこそ思へ」あこ君、難きことと思へど參りぬ。あて宮に奉り給へば、あて宮「あなむくつけ。何でふ、さる物をか持ておはする」とて引き破りて捨て給ひつ。

かくて、九月晦に、東宮よりあて宮にかく聞え給ふ、

東宮秋ごとにつれなき人をまつ蟲のときはの蔭になりぬべきかな

あて宮、

色かへぬ秋よりほかに聞えぬは賴まれぬかなまつ蟲の音も

源宰相、鈴蟲を奉りて、

實忠鈴蟲の思ふごとなるものならば秋の夜すがらふりたてて鳴け

〔語釋〕
(一)五月と九月と嫁娶を忌むは此頃の風習也
(二)ひを―日を、氷魚。よる―寄る、夜
〔考異〕
(三)久しさ―久しき

兵部卿の宮、菊のさかりに、
兵部 頼もしく思ほゆるかないふことをきくてふ花のにほふ長月
右大將殿、晦の日、
兼雅 長月は忌む(一)につけても慰めつ秋はつるにぞ悲しかりける
平中納言、十月朔の日、
正明 薄かりしなつの衣や濡れしとてかへつる袖もかはらざりけり
三の親王、御前の紅葉の色濃きにつけて、
忠康 色ふかく染むるまに〳〵神無月袖やもみぢの錦なるらむ
中將仲忠、宇治の網代より、
仲忠 流れ來るひを(二)かぞふれば網代木によるさへ數も知られざりけり
初雪の降る日、涼の中將、
雲居よりたもとに降れる初雪のうちとけゆかむ待つが久しさ(三)

〔語釋〕
(一)涼にあて宮を賜はるべき由の神泉苑にての勅諚
(二)十一月下の酉日賀茂の臨時祭の使なるべし
(四)あて宮に對する戀
〔考異〕
(三)湛へて―湛へなどして
(五)雪の降る―「の」ナシ

おとゞ見給ひて、正頼「九月に仰せられしを思ひたるなめりかし。警策なる人にあれば、かしこをば人にこそ頼み聞えたれ」(一)など宣ふ。侍從の君、時雨いたく降る日、
仲澄 神無月雲がくれつゝしぐるればまづわが身のみ思ほゆるかな
源少將、祭(二)に使に立つとて、
仲頼 袖ひぢて久しくなれば冬中にふりいでてぞゆくとふが逢ふやと
兵衛佐、物にまゐるとて、物語などす。かへる曉に、御前の池より水鳥の立つを見て、
行政 我ひとりかへれる池にをし鳥の汝もつれなく鳴きて立つかな
藤英、六十餘日がうちに對策せんと、夜晝いそぐ。年頃雪を夜の光にて勤めつれど、今はこの大將殿の御かへりみに、食物は山の如し、油は海のごと湛へて(三)あり經るにも、なほこの事を(四)歎く。雪の(五)降る日、
藤英 心こそあかくなりしか雪降れば戀には惑ふものにぞありける

菊の宴

此の卷の初以下十一段は「嵯峨院」の卷の第九段以下と事實も文章も大概相似たり。蓋し同文の兩卷に入りて相重複せるものなるべく、兩者其の一を削るべきなり。卷の名よりすれば此の卷の文を存して「嵯峨院」の卷のを削ること至當なるべしと雖も、事實の聯絡及び文章より見る時は「嵯峨院」の方を存するを勝れりとす。故に彼の卷の分を正文に立て、此の卷の分は假に圍みをかけて之を存せり。但第九段以下第十一段の終までは「嵯峨院」の卷になき所にして且必ず無かるべからざる記事なれば、之を彼の卷の末より續けて讀まざるべからず。

梗

(一)東宮の殘菊の宴。東宮、あて宮を正頼に求む。(二)あて宮の處置につきての正頼夫婦の相談。仁壽殿の女御、東宮に奉らんことを勸む。(三)正頼邸の神樂の準備。(四)樂の當日。兵部卿親王大宮にあて宮を求む。宴會。(五)仲忠情を仲澄に訴ふ。(六)大宮、母嵯峨院の大后の六十の賀を行はんとす。其の準備。(七)東宮以下の懸想人等歌をあて宮に贈る。(八)大宮、六十の賀の爲に嵯峨院に參る。(九)嵯峨院の大后の六十の賀。あて宮琴を彈く。東宮あて宮の入内を大宮に迫る。大后大宮にあて宮を東宮に奉らんことを勸む。(十)東宮よりあて宮に歌を贈る。(十一)懸想人等、あて宮入内の事定まれりと聞きて各憂悶す。(十二)藤英の榮達。宮あこ君を介してあて宮に文を贈る。(十三)忠こそ

概

法師歌をあて宮に贈る。(四)實忠、正頼の邸に留まりて妻子を顧みず。妻子の悲嘆。長子眞砂君の病死。(五)三月上巳の祓に正頼一家を擧げて難波に遊ぶ。(六)東宮、實忠歌をあて宮に贈る。(七)兼雅戀を長谷に祈る。祐澄を語らふ。(八)懸想人等歌をあて宮に贈る。(九)實忠の熱心。兵衛の君を責めて文をあて宮に取次がしむ。戀病。七大寺比叡山等に祈る。(十)實忠の妻子、志賀の山本に隱る。實忠仲忠と偶然その隱家を訪ふ。識れる妻と知らざる夫。(十一)實忠歌をあて宮に贈る。

(一)　東宮の殘菊の宴。東宮あて宮を正頼に求む。

斯くて東宮、霜月の朔日ごろ、殘れる菊の宴聞召しけるに、御子たち上達部參り給ふ。博士文人等召して文作らせ御遊びなどし給ふ。大將のおとゞのみ(一)參り給はず。斯くて夜深くなりて、東宮御遊などし給ふついでに、東宮「此處に物せらるゝなかに事もなき女、誰多くものせらるらむ。賭物にして、女くらべなどせられよや」左の大臣、(二)季明「此の中には聞えずなむ。平中納言ばかりや。それもちひさくなむ、聞え侍る」源中納言奏し給ふ、(三)「左大將の朝臣にこそ一人二人は侍らむ」平中納言、正明「然のみはあらじ。又も聞ゆる樣あり」

兵部卿親王、「さがなの物言ひや」とて、苦しと思ひて物も宣はず。東宮、(一)東宮源宰相を見やり給へば、(二)東宮「彼の集へらるなる中に、など入らざらむ」左の大臣、季明「仰せごとさふらはゞ(三)奉り侍りなむを、畏まりてこそさふらひ給ぶらめ」東宮、「事の序あらばと思へど、すゞろに覺えつゝ、まだ大將にも物せず。彼の人には時々消息などものすれど、をさ〳〵いらへも物せられずや」など(四)宣ふ程に、(五)左大將のおとゞなど物し給へり。(六)宮、東宮「今日ぞ怪しく時過ぎたる菊をもえ見ず、(八)見えつゝましう思ほえ(七)つれば、此彼召して見せなどしつるに、給はずありつれば、さう〴〵しかりつるに」など宣ふ。大將の君、正頼「はなはだ畏し。例もわづらひ侍る脚病の、おこり困うじ侍りて、久しう内裏にもまるらず侍りつるを、唯今ある人の告げ申しつればなむ、驚きながら、さぶらひ侍りつる」とて、御物語し給ふ序に、宮、東宮「年頃聞えむと思ふ事の有る

(語釋)
(一)正頼

(考異)
(二)誰多く―誰が多く
(三)奏し給ふ―ナシ

(語釋)
(一)「東宮」衍文なるべし
(二)實忠
(三)正頼が我をも望に入れてくれぬは如何
(四)當人のあて宮には
(五)正頼
(八)其方が不參なりし故

(考異)
(六)宮―東宮
(七)思はえ―おぼえ

〔語釋〕
（一）「などとて」なるべし
（二）上野の宮が僞ゐて宮を奪ひし如き詭計
（三）又あの樣に却つて正頼に欺かるゝかと思ひて
（四）「みこた」は「みかた」なるべし
〔考異〕
（五）悲しと見やり給へり―ナシ

を、しめやかなる折なければ、え聞えぬかな」大將、正頼「今日より濕やかなる折侍らじを、いかで承りてしがな」宮、東宮「流石に聞え惡しや」（一）などて、東宮「なほ上野の親王などに、思ひおとし給へるをなむ、妬く思ほゆる、（二）さやうなる計をやせまし、など（三）思へど、そが樣にもやせらるゝとてなむ」大將、正頼「あなかしこ。然ある仰せごとなきうちにも、然さふらふべきも侍らず。くちをしう拙きのみ侍れど、然言ひて侍らむやはとてなむ、これかれにくばり侍ること侍りしに、かのみこた（四）に見給ふべきが侍らざりしかばなむ、辛く求めてものせし」東宮（五）悲しとみやり給へり。東宮「さても殘あるやうに聞ゆ。それをさへ忘れ給ふな」大將のおとゞ、正頼「拙きが中にも擇屑なるが侍るを、この神泉の御幸につかさのおほいすけ涼、同じすけ仲忠心とゞめて琴つかうまつりしに、仲忠の朝臣に、一の内親王、涼の朝臣に、正頼が九にあたる女賜ふ

〔語釋〕
（一）涼への約束は昨今の事
（二）當人のゐて宮に文をやることは已に久しき前よりの事
（四）源宰相實忠の父季明
（六）「左のおとゞ」なるべし
（七）「大將殿の君たち」なるべし
（八）誤脱あるべし、「ても し」を「もし」とかける本もあり
〔考異〕
（三）東宮―ナシ
（五）いとほしと見やり給へり―見やり給ひていとかなしと見やり給へり

べきよし、宣旨くだりにしことなむ侍る」と申し給ふ。東宮、「それは今の事にこそあなれ。こゝには其處にこそ唯今聞ゆれ、（二）彼所に聞えて（一）久しき心地なむする」大將、正頼「宣旨を背かぬものに侍ればなむ、思う給へ、煩ひ侍る」（三）東宮、東宮「何かそは。罪あらば奏せさすばかりにこそはあなれ。な思し煩らひそ」大將、正頼「然らば仰ごとに隨はむ」など奏したまふを、そこばくの人、肝心もくだけておもほす中に、源宰相、青くなり赤くなり、魂もなき氣色にてさふらふを、左のおとゞ（四）いとほしと見やり給へり。（五）

畫詞 こゝは東宮おはします。お前に、上達部御子たち、兵部卿の宮、左おとゞ（六）、右大將、中納言二所、源宰相、大床子たてて涼、仲忠、仲頼、行政、大將殿君たち（七）を首にて、四位、五位、古き進士、只今の秀才藤英など、召したるは引出物賜へり。こゝは殿上人等博士ひとむらにても（八）し給へ

㊀ あて宮の處置につきての正賴夫婦の相談。仁壽殿の女御東宮に奉らんことを勸む

〔語釋〕
（三）語あるべし
（四）さほどの身柄の人でもなきに

〔考異〕
（一）怪しき―怪し
（二）東宮―宮

り。作りて文奉る。樂所あそびす。文臺立てたり。みな物書きたる上達部御子たち博士たちまで、白きうちきはかまかづく。ひともこふく賜はる。斯くて大將のおとゞまかで給ひて宮に聞え給ふ、正賴「東宮よりあてこそに今も宣ふ事やある」宮、大宮「然あめり」正賴「その事をぞ宣ひつるや。しばしはとかく聞えつれど、いと切に宣ひつれば、え否び侍らざりつるを、兵部卿親王、平中納言いと物しと思ひたりつる中に、源宰相の、ある中に思ひ入りて居給ひたりつる。左の大臣是彼に見合せてぞ、涙ぐみてものし給へる、いとほしかりつれ」宮もいとほしと思い給ひつゝ、大宮「怪しき（一）この子によりてこそ、興ある折もいとほしき折も多かれ。東宮（二）などかは、人々あまたある折しも、然は宣ひ出だしつらむ」おとゞ、正賴「なほ人々かく物すと聞召して、なりけ（三）そと思しめいて宣はするにこそはあめれ」宮、「源宰相然い（四）ふばかりの人には

〔語釋〕
（二）其方を我が戀しはじめし時分は
（三）誤脫あるべし
（四）仁壽殿女御
（六）「などとて」なるべし

〔考異〕
（一）氣色見ゆる―氣色を見ゆる
（五）給へり―給へば―給へれば

あらぬを、氣色見ゆるぞ惡きかし（一）」おとゞ、正頼「かしこく思ひ鎭むれど、それしもぞ著きかし。男は、然こそはあれば、かくてもさふらふべけれど、昔おほむことを思ひそめ參らせし程は、何心地かせし。かの主有識なれど、この道になれば、かくこそはあれ。その道人目つゝまるゝものかは。これを思（二）へばこそ、この如くも□宣ふ（三）人々には、え惜み申したれ」など、宣ふほどに、女御の君（四）まかで給はむと聞え給へれば、御迎の車廿ばかり、四位、五位、六位數多く、同胞の君だちさながら參り給へり。御輦の宣旨遲く下りて、夜ふけてまかで給へり。大宮あくるつとめて、中の大殿にわたり、君だち御裳引きかけつゝおはします。宮、兵衞の君して西の大殿に、大宮「其方にや參り候ふべき、こなたにや侍る」と聞え給へり（五）。女御、仁壽「其方にたゞ今參りて」とて渡り給へり。宮、大宮「其處にまうでむとこそしつれ」（六）などて、大宮「久しう長居

〔語釋〕
（一）懷胎
（三）打棄てのみ置くべきにあらずと思ふ
（六）「かたはにこそあめれ」なるべし

〔考異〕
（二）し給へる―し給へり
（四）こそは物たばかりは―こそさやうの事は
（五）たち―ナシ

し給ひつる度にてそあれ。そが覺束なさになむ」仁壽「この度も暇たまはせざりつれど、怪しく惱ましくのみ侍れば、ことつけてまかでつるぞや」大宮「など然は仰せらるゝ。もし例のことか（一）」仁壽「いさや、そが見苦しき事」宮、大宮「何かは、さうぐ〳〵しかりつるに。何時よりぞは」女御の君、仁壽「いさや。棚機の心地せし頃よりなむ」宮打笑ひ給ひて、大宮「紅葉の橋はいかにぞ」とて、物語し給へる（二）序に、大宮「あて宮は、などてか斯くて（三）のみとぞ思ふや。如何すべき、宣へかし」女御の君、仁壽「生女こそは（四）、物たばかりはすなれ。たばかり聞えむかし。大殿は如何聞え給ふらむ」宮、大宮「そもまだ思ひ定められざめり。東宮なむ御氣色ありて宣はすなる。内々にも、仰せらるゝ事ありけりとなむ」女御の君、仁壽「東宮よりは尙聞え給ふや」大宮「然かし。されど、やんごとなき人多く候ひ給ふとて、此人たち（五）のはかなくて交らひ給はむ、かたはにはこそある（六）

〈語釋〉

(二)朱雀の妃妾たちも多けれど其中に時めくは二の宮と左大將殿のと二人のみの意歟、「二の宮」は「四の宮」「左大將」は「右大將」の誤なるべし、すべて此處の女御の詞解しがたき處多し

(三)誤脫あるべし

〈考異〉

(一)ものを—「もの」ナシ

(四)宮なれ—宮なされど

(五)には—「に」ナシ

(六)君だち—みこたち

(七)參り—いてき

れ」女御の君、仁壽「人は多かれどその儘にしもなきものを(一)。內裏にも二(二)宮左大將ばかりこそ。さてはな(三)ときこえぬ。左大殿はおほせかし。おなじ君達と聞ゆれど、あらまほしく、めでたくおはします宮なれ(四)。この君たちのさむらひ給はむこそは似つかはしからめ。御里ずみし給はむには(五)、便なうこそあらめ。內裏にはたゞ二人あるやうにてあらせむ。まゐらせ奉れば、さやうの事し給ふまじき人なればなむ、彼處には、えものせぬなど、度々宣へど、さいたちて候はどこそあらめ、宮には君だち(六)なども、まだ參り(七)給はねば、賴もしかし」宮、大宮「うしろめたくぞあるや、御方をこそは肖物に」女御の君、仁壽「あなゆゆし」など笑ひ給うて、日一日御物語し、御琴あそばし、かたぐ男君たち、おとども皆おはしまして御遊ありて、方々より興ある物ども淸らに調じて參り給ふ。斯くて皆夜更けて御方々に歸り給ひぬ。

〈語釋〉

(一)「と給ひて」は「ゐ給ひて」

● 正賴邸の神樂の準備

(二)「伊勢の君」は「辨の君」なるべし、正賴の長子左大辨忠澄

(三)誤あるべし

畫詞 こゝは中の大殿にて宮、女御の君御物語し給へり。あて宮御子たち、五所御方々おはします。みな物參れり。男君たち七所ばかりと給ひて(一)、物まゐる。御たち多かり、右大將殿より、御菓物割籠など奉り給へり。

かくて霜月の神樂し給ふべき事、伊勢の君(二)にきこえ給ふ、正賴「府の源中將ものし給ふことする(三)、この度の神樂すこしよろしうせばや。召人など擇びて、その行事心留めて物せられよ」辨の君、忠澄「例の者どもは參りなむ。この族の外に、雅樂頭などらは、內裏の召にもかならずなむ侍る」正賴「なほ廻らし文して奧に草假名かきつけて遣はさばすまはじ」辨の君、忠澄「遊の者どもはえやみ給はざらむ。末に和歌を詠まむやは」など宣ふ。

かくて其の夜になりぬ。おとゞ、正賴「さればこそ、然はあらじと思ひつかし」とて、幄打ちて、催馬樂笛ふき、歌うたひ、著き竝みぬ。これさふらふ唯今

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(二)祐澄
(三)「などとて」なるべし

の逸物どもなり。上達部御子たち殿のうちより、世にある限つどひ給へり。御客人にて、兵部卿の親王涼の中將なむものし給ふ。神樂よりかへり給ふ。巫子おりて舞ひ入る。召人ら物の音いたし神歌つかまつる。

　やひらでを手にとりもちて山ふかくわがをりて來る榊葉の枝

　山ふかくわがをりて來る榊葉はかみの御前にかれせざらなむ

　さかきばの香をかうばしみとめ來れば八十氏人ぞまとゐしにける

　優婆塞がおこなふ山の椎がもとあなそば〳〵しとこにしあらねば

など(一)て遊びつるほどに、兵部卿親王中將君(二)して大宮の御許に、御消息聞ゆれば、中の大殿にお座よそひて對面し給へり。兵部卿親王「夏頃河原にて、嬉しう聞え承りしを、今夜もおなじ神の御德ならではとはせ給ひてこそは」などて(三)、大宮「院には參り給ふらむや。宮のうへのみおはしますと承りて參

〔語釋〕
(一)「誰にも〳〵」
(二)朱雀こそ天子の事故嵯峨院を尋ね奉ることも手重からんが
(三)大宮の子ども
(四)あて宮の事
(五)差上げんとせし娘も差上ぐる事出來ぬ樣になりたれば

らばやとせしを、怪しき人に見給へ惑ひてなむ」親王、兵部「一日參りて侍りき。異なる御事もおはしまさゞりき。さて御上どもをなむ宣はせし。誰〳〵(一)に對面する事の難き、御世も行くさき短き心地するを、覺束なからぬ程にてあらむとおもほすを、えさらぬ事。(二)内裏にこそ行幸も難からめ、然らぬ人々さへ覺束なきを」大宮「わか君たち殿の君たちなどもいかで見え奉らむ、またけしからぬ者どものいま出で來たるも御覽ぜさせむと思ひ給ふれど、見苦しき(三)樣なれば」など聞え給ふ。兵部卿親王、「いでや今は聞えさせて効なけれど、いみじく忍びがたき事は、先聞えさせむとこそ思ひ給ふれ。(四)月頃思ひたまふ事の、終にはかなくなりぬること。數ならぬ者に思されざらましかば、斯くもあらざらまし。おなじ御中らひにも、頼み聞えさせしかば、かやうの折にも人よりはとなむ思う給へし」宮、大宮「などかかひなく思さるべき。さ思ひ(五)

〔語釋〕
(一)御氣に入りさうもなき娘のみなる故
(二)あて宮入内の噂を
(三)不詳
(四)仲忠涼、頭は「籐の誤」
(五)此處誤脱多しと見えて解しがたし
(六)「頭」は「籐」の誤

給へたる事あるが、又えさもあるまじければ、一所をなむ聞えさするも、よくもあらぬ中にも、いかでと思ひ給ふれど、(一)え見給ふまじくのみあれば、少しよろしきや出で來るとてなむ」宮、兵部「一日東宮にて(二)承りしかば、片時世に經べき心地せねば、徒らにならぬ程に、斯くなむとだに聞えさせむとてなむ、心魂をくだきて聞えそめたる身のみこそ、いとからく悲しくは覺え給へ」など、泣く〳〵きこえ給ふ。大宮、とかく聞えこしらへて入り給ひぬ。歌かくて(三)さうはちのもののしらべ、物の音どもおなじ聲にとゝのへて遊す。仕うまつりなどするほどに、(四)頭中將源中將など、(五)こゑたぐひならものたてまつる人を、かたさりたてまつれ、そのなにがしおもてをといふ。式部卿親王、「源中將の朝臣何の才か侍る」涼「うち仕うまつる才なむ」式部「いで仕うまつれ」涼「うちよけの君だちや」古屏風のあるを押倒して入りぬ。(六)「頭中將の朝臣

〔語釋〕
(一)三字衍文歟
(九)仲忠情を仲澄に訴ふ

何の才か侍る」仲忠「和歌の才なむ侍る」あるじのおとゞ、正頼「難波津にやある。冬ごもりの頃ぞや」とてかづきわたして奥へ入りぬ。「祐澄の朝臣、何の才か侍る」祐澄「渡守の才なむ侍る。あな風早の夜や」「仲頼の朝臣何の才か侍る」仲頼「木樵の才なむ侍る、人にあらすのみや」「仲澄の朝臣何の才か侍る」仲澄「山伏の才なむある、あなまつくさのかや」「行政の朝臣何の才か侍る」行政「筆ゆひの才なむ侍る、わたりがたき物は、冬毛なりや」などいひたてたるに、源中將垣下の所より入りいまするを、右のおとゞ、「かの君は何の才かおはするや」「藁盜人の才なむ侍る」兵部卿親王「こてうふくかぜはあな入りがたの宿や」とてつい立ち給へり。かくて上達部親王たちは、供人まで物かづきもののふしまで祿賜はりぬ。かくて皆まかでぬ。藤中將侍從の君の御方に、仲忠「仲忠まかでつべき方なし」とて、仲忠「(一)あなに三

の宮にあさましく強ひられ奉りて、ものも覺えず給べ醉ひにけり。この序に聞えむ事は、罪もあらじな。神もゆるしとかいふ」とて、物語の序に、（仲忠）「一日東宮にて悲しき心地もせしかな。やがて御前にて死ぬと覺えし。いかで今日まで侍るならむ」侍從、（仲澄）「怪しのつらへむしや」中將、（仲忠）「されどふしぬる牛の心地ぞするや」（仲澄）「ぬしはこと筋になり給へる、ひとはあらずや。何をかおぼす」中將、（仲忠）「玉のうてなもといふ。源中將(一)の君こそ羨ましけれ」侍從の(二)「角折れたる牛の讐なりや」中將うち笑ひて、（仲忠）「むく犬のあいなだのみみのやう(三)にてぬしおふけなう、おはせそ」（仲澄）「かの人はたゞ今の世の一にて、内裏にもこゝにも、雲井より降りたるよりも殊に思ひ聞え給ふ人を、さる序にしかおほせられぬ。かゝる身をもちて、なぞこのはかなごとは」中將、（仲忠）「畏けれど心魂をつくして聞えそめたるを、こゝには身をかへてもいかで

【語釋】
(一)涼
(二)「侍從の」の「の」衍歟
(三)「みゝの」は「みの」歟

(六)大宮母嵯峨院の大后の六十の賀を行はんとす。其の準備

〈語釋〉
(二)此處誤あるべし
(三)嵯峨の大后をいふなるべし
(四)「いぶかしげに」なるべし

〈考異〉
(一)みのなのもえ—みのなるもろ

とはえ思ひ給へよらぬは、いと畏きぞや」侍從、仲道「藥の杵はいかにぞ」中將、仲忠「みのなのもえくはぬ心地ぞするや(一)」などいひて。かくて大將殿の宮年頃、御母后の宮の六十の賀つかうまつりたまはむ、御厨子御屏風よりはじめて、うるはしき御調度どもを、綾錦にしかへして、おとゞにきこえ給ふ、大宮「いせの君、そのかみこに對面したりしに、宮の上(三)の、參らぬことをゆふかしげ(四)に宣ひけるを(二)、いかで、思ふ事して參りにしがな」おとゞ、正頼「いと易き事にこそあれ。來年こそは足り給ふ年におはしますらめ。御子の日がてらまゐり給へかし。早あるべからむ事をせさせ給へ」宮、大宮「皆したるを、かづけ物なむまだしきこそ、人々は朝服のことをなむ、黄金の藥師佛五尺にて、陀羅尼經などせらるるなり。二の宮は法服をなむし給ふなる」正頼「それは今年となむ聞く。身には御としみのことなども御覽ぜさせよ。た

〈語釋〉
(一)忠澄、諸澄、祐澄
(二)「からまひおや」一本「かれまひをや」ともあれどいづれも解しがたし
(三)「ならはさむ」なるべし

〈考異〉
(四)今日は聞えん—今日はとめんと

だならむやは」おとゞ、正頼「男子はあそびし女子は物の音かきならして聞召させ給へかし。舞には親王たちの御子をも、左大辨兵衛督中將(一)などの御子ども出ださるなりや」大宮「宮あこ家あこなどをば、例の人にはあらで、仲頼行政らして、いかで習はせむとなむ思ふ」おとゞ、正頼「中將どの院などは、うしろめたうはあらじ、また女たちも恥かしげにはよもあらじ、からまひおやこ(二)の人々ならば、さざらむ(三)、またせぬとなめれば、さはありとも宣ひなむかし」とて、召しに遣はして、人もなき御簾の内に召し入れて、正頼「年頃大事と思ふ事を、主たちのおなじ心にし給はぬに、忍びて物することなむあるを、然言ひてあらむやは、今日は聞えん(四)とてなむ、消息ものしつる」少將仲頼「甚畏し。何事にか侍らむ。御大事を宣ひ聞ゆべく參るべきと宣へるになむ、承たまはりおどろきぬる」おとゞ、正頼「ふし柴を山と積み、林としても、たゞ

今この事しつべし、たゞこれになむ」とて、正頼「まめやかに、こゝにものし給(一)ふなむ、院の后の宮、來年御年足り給ふ年なるを、え承り過すまじうなむ。家あこ宮あこらに舞仕うまつらせむと思ひ給ふるを、人の古せる手は傳へじとなむ思ふ、御弟子にて生し立てられよ」と物せよなむ」(二)少將久しく思ひそひて、仲賴「更に仕うまつらぬ事なり。自ら御覽ずらむ、去年(三)吹上の濱などにてこそは、人仕うまつらぬなどなく仕うまつるめりしか。その折なども、仕(四)うまつらずなりにしことなり」行政も同じごと申す。おとゞ、正賴「朝臣(五)さへ斯うものせらるゝめればこそ、かの少將(六)の宣ふこと(七)もおほゆれ。宮あこをば少將落蹲、兵衞佐は家あこ陵王はとかることとなく習はし、男どもに、樣々の物の音どもなどに合せて出だし立てらずば、生々世々の互の仇とならむとす。少將習はし給ふべくば、連理の契をなさむ」など、言ひかけて入り給ひぬ。少將

〈語釋〉
(一)大宮をいふ
(二)「せよとなむ」なるべし、一本には「生したてられよこれを聞えんとてなむ」
(三)「去年」又「しせむ」に作る、さらば「神泉」歟
(四)仲賴は何事をもつとめざりきと也
(五)行政をいふ
(六)仲賴
(七)「こと」も」は「とこそ」なるべし

良佐、この事をすと、いかで聞召しけむ、かゝる事すと人にも聞かれじとせ(一)しかど、如何に思さむと思ひ煩らひて、なほ大殿の思さむ事、苦しう思ゆれば、少將良佐殿の君たち十所を、五所づつこまどりに取りて、少將は粟田といふ所の奧に、鳥もかよはぬ山の中に籠り、良佐は水の尾といふ所の奧に、同じやうなる所に、人にも知らせで籠りて習はすに、手どもの限同じうはと思ひてならはす。みこたち男君たちは、今のにて舞の師してうす。民部卿宮の御方の太郎君太平樂、次郎君皇麞など舞ひ給ふ。

畫詞　こゝは民部卿の宮の御方。舞師二人、樂人十人ばかり、殿上人などおほかり。物食ひ酒飮み舞の師立ちて舞ふ。君たち習ひ給へり。中務の宮の御子太郎君萬歲五常樂まひ給ふ。舞の師がくのゐかおほかり。左大辨殿の御方の太郎君すらうちうしやう殿の太郎君鳥の舞ならひ給ふ。

〈語釋〉
(一)以下二人の心

㈦ 東宮以下の懸想人等歌をあて宮に贈る

かゝる程に霜月の晦ばかりになりぬ。新嘗會のころ東宮よりかく宣へり、

東宮 ねぎごとを神もおどろく頃しもや君が心はしづけかるらむ

あて宮、

ちはやぶる神の前にはあだ人も思はぬことを祈るものかは

ふる雪をみて聞え給へり、

東宮 數ならぬ身は水のうへの雪なれや涙のうへにふれどかひなき

御覽じこそおとさらめ。

と、きこえ給へり。あて宮、

水のうへに雪は山ともつもりなむうきてのみふる人のかひなさ

あな見苦しや。

ときこえ給へり。右大將ぬし五節出し給ひて、內裏參りの夜、

衆雅 もゝしきにさふるをとめの袖の色も君しそめねば如何とぞ見る

かひなきものになむ。

ときこえ給えり。あて宮、

ひとしほも染むべき物か紫の雲より降れるをとめなりとも

思しかくるこそなめげなれ。

など宣ふ。兵部卿の親王小忌に當り給ひて、內裏より、

兵部 色ふかくすれる衣をきる時は見ぬ人さへも思ほゆるかな

いづれのおりにか忘れ聞えむ。あないみじや。

などきこえ給へり。あてみや、

あだ人のさはにつみつゝ摺れる色に何にあやなく思ひ出づらむ

なれならではえ宣はじかし。

など、きこえ給ふ。頭中將仲忠、(一)臨時の祭の使に出で立つとて、

仲忠　夕暮のたのまるゝかな逢ふ事を賀茂の社もゆるさゞらめや

神の御徳も見たまふに(二)今參りこむ。

ときこえ給へり。あて宮、「めざましや」など宣ひて、

あて宮　榊葉の色かはるまであふ事は賀茂の社もえこそ許さじ

神もおなじ心にや。

と宣ふ。三の親王、

忠康　ひとりぬる年は經れども冬山にまだひとはだの見えずもある哉

涼の中將露の置けるつとめて、

涼　いふことにこたへぬや何ぞ冬の夜は言の葉にさへ霜や置くらむ

とさへなむ覺ゆる。

〈語釋〉

(一)「頭」は「藤」の誤

(二)「見たまへに」なるべし

ときこえ給へり。御かへりなし。侍從の君、極月の朔日に、梅のしらけはてぬるを折りて、

仲澄　年のうちに下紐とくる花みれば思ほゆるかなわが戀ふる人

先こそ思ほゆれ。

(一)なとて見せ奉り給へど、見ぬやうにて物も宣はず。藏人の源少將、晦の夜、院の後(二)うちよりまかでて、斯く聞えたり。(三)年かへりて、朔日の日良佐、

政行　たちかへり年とともにやつらかりし君が心も越えたりと見む

藤英は宣旨賜はりて、六十が試賜はりて、年の内に、春かへりてうちかうぶりにあたりたれば、大將殿の御勞にて七日の日うちかうぶり賜はり、十一日に大内記になされ、東宮の學士になされなどして、時めく事二つなし。内宴に召されて、(四)あを色の衣に朱の衣換ふとて思ふ、

〈語釋〉

(一)「などとて」歟

(二)誤あるべし

(三)こゝに歌あるべし

(四)六位の服を五位の服にぬぎ代ふる也

㈧大宮　六十の賀の為に嵯峨院に参る

〔語釈〕
(一)誤脱あるべし

藤英　ころもでの色は二度かはれども心にしめることはかはらず

など思へども、斯くなむとも聞えず。忠こその阿闍梨、宮あこ君を呼びとりて、かく聞こえたてまつる。

うぐひすの谷よりいづる初聲も世にうき物と思ひぬるかな

かくは思ほえぬものにこそあなれ。

と聞えたれば、恐ろしとのみ思す、

かくて后の宮の御賀正月廿七日に出で來る乙子になむ、つかうまつり給ひける。まうけられたるもの、御厨子六よろひ、沈、紫檀、白檀、蘇枋なり。(一)こうの辛櫃などおほい織物にしきなどすはこ薫物藥の壺、硯の具よりはじめて、御衣六具、御衾御よそひ、夏冬春秋、夜の御衣からの御衣、御裳、御はしのおりたてちょしろかねをきてちことの蒔繪してうちの物色に隨がひて、ありがたく淸らにならべすゑたり。御手水の調度、銀の坏一つ、御盥、沈を圓にけづりたる貫簀、銀の匜沈の脇息、銀の透箱、唐綾の御屛風、御几帳の骨、蘇枋紫檀なり。御几帳のかたびら、夏冬春秋、御裀御座など、いふばかりなし。御臺六よろひ、かねの御器に黃金の毛うてり。これらよりはじめてせぬ事なし。

かくて廿六日參り給ふ。車二十、絲毛十二、かねづくりの檳榔毛十、うなゐ車二つ、しもつかへの車二つ。御前天の下の人のこらず四位五位百人、六位數知らず。御よそひ、大宮女一宮今宮までは、あか色に葡萄染のかさねの織物、唐の御衣、綾の裳、あて宮は十五同じあか色の織物五重がさね、上の御衣しろき綟のうへのはかま。御供の人、青丹に柳がさねのからきぬあをみずりの裳上下わかず著たり。わらは、同じごと。ともづかへ平絹の三重がさね著たり。

㊈ 嵯峨院の大后の六十の賀。あて宮琴を彈く。東宮あて宮の入内を大宮に迫る。大后、大宮にあて宮を東宮に奉らんことを勸む。

〈語釋〉
(一)正頼の妻女一宮
(二)嵯峨院の大后
(三)「來しを」は「來んとせしを」なるべし
(四)仁壽殿女御をいふ
(五)「けり」は「ける」なるべし
(七)兼雅
(一一)實正

〈考異〉
(六)上に—ほとりに
(八)右大將—左大將
(九)生ひ—老い
(一〇)今植木す—ナシ
(一二)そむる—なむる

かくて參り給ひて、宮、後の宮に聞え給ふ、女一「怪しく其の事となきものから、騷がしくのみ侍るを、見給へむづかりて、久しくえ參らざりつる事。先つ頃も御藥のことおはしますと承りて、驚きながら參り來しを、此の內裏に候ふがほと〳〵しく侍りしを見給へあわててなむ」后の宮「此處には、事にもあらざりけり。例の熱などなむ有りけり。(五)などか物し給ひけむ」など宣ふ。かくて彼の御座所しつらひ、御調度ども、有るべき樣にまかなはれたる、玉光り輝く。御屏風の歌、

正月。子の日したる所に、岩に松生ひたり。(六)上に鶴遊べり。(七)(八)右大將、
岩の上にたづのおとせる松の實は生(九)ひにけらしな今日に逢ふとて
二月。人の家に花園有り、今植木す。(一〇)民部卿、(一一)
植ゑそむる(一二)人ぞ知るべき花の色は幾代見るにか匂ひあくとは

〈語釋〉
(一)不審、源宰相歟然らば實忠なり
(三)「頭中將」は「藤侍從」とあるべき也
(六)雁行字を成すの意

〈考異〉
(二)誰に—君に
(四)居り—あり
(五)池水の—池水も

三月。はらへしたる所に松原あり。源中將、(一)
禊する春の山邊に並みたてる松の世々をば誰(二)に寄すらむ
四月。神祭る所に山人歸れり。頭中將仲忠、(三)
神祭るさか木折りつゝ夏山に往き返りぬる數も知られず
五月。人の家に、橘に時鳥居り。(四)中將祐澄、
我が宿の花たちばなの時鳥千代ふる里と思ふべきかな
六月。人の家に池あり。蓮おひたり。少將仲頼、
池水(五)のみどりも深き蓮葉にのどかに物の思ほゆるかな
七月。七夕祭りたる所に、少將行政、
彦星のかへるに幾夜逢ひぬれば今朝來る雁(六)の文になるらむ
八月。十五夜したる所あり。雁飛べり。侍從仲澄、

〔語釋〕

（一）「人の」の「の」衍文なるべし

（二）忠澄

（三）「兵衛佐諸澄」なるべし

（四）淸正

〔考異〕

（五）ばかりに—「に」ナシ

秋ごとに今宵の月を惜しむとて初雁の音を聞きならしつる

九月。紅葉見る人の(一)山邊にあり。田刈積めり。中將實頼、

織り敷ける秋の錦にまとゐして刈りつむ稲を餘所にこそ見れ

十月。網代ある河原に、船どもこぎ浮けたり。左大辨(二)、

漕ぎつらね氷魚はこぶとて網代にはおほくの冬を見なれぬるかな

十一月。雪降れるに、人濡れたり。(三)兵衛督の君、

降りにけるよはひもいさや白雪のかしらに積る時にこそ知れ

十二月。佛名したる所。(四)左衛門の督の君、

かけて祈る佛の數し多ければ年に光や千代もさすらむ

など詠みて、少將仲頼書けり。辰の刻ばかりに(五)事はじまりて幄うち、舞臺裝ふ。笛、箏、鼓、響きつ。樂所、舞人も參る。舞の君たち、青色に蘇枋がさ

〔語釋〕

（一）合せ香の名

（五）五の君の夫

（六）七の君の夫

（七）大臣上殿の子ども、五男顯澄、六男兼澄。六の君等

（八）「后の宮」なるべし、宣旨は侍女

（九）參列せる

〔考異〕

（一）御火桶まゐる—御火桶四つまゐる—御火桶火まゐる

（三）おなじ—おなじく

（四）華足—けうそく

ね、纓のうへの袴樂所の君たち、闕腋、柳がさねなど著つゝ參る。かくて暫しあれば、御火桶(一)まゐる。沈の火桶、銀のほとぎ、沈を火箸にして、黒方(二)を鶴のかたにして、銀のはしなどして、帝后の御前に參る。御臺參る。暫しあれば、左大將、折敷九十、おなじ黄金の華足(四)、萬のもの數を盡して參る。上達部、殿上人、とり次ぎて參る(三)。女御の君のまかなひ民部卿(五)、御前に、沈の折敷同じごととして、打敷、參る物おなじごと。(六)左衛門督の殿より、大宮より姫君たちの御前、蘇枋の折敷二十づつ、彼方のおほん腹の(七)君たち、御方々よりも大宮(八)の宣旨、お許人、内侍、命婦、藏人の前に、衝重して賜ふ。それよりもまで(九)給へる上達部、親王たちの御前、遊び人、舞人の前まで參りはてぬ。又銀、黄金の若菜の籠、おなじ壺ども、色々のつくり枝どもに、よろづの寶物ども淸らにし入れて、持てつらねて參り給ふ。御かざ

(一)「内侍のかんの殿」は大宮の誤なるべし
(二)「御かへし」なるべし
(三)どちらか一つは
(四)嵯峨院
(五)正頼
(八)仲頼
〈考異〉
(六)帝より—帝を
(七)世の…の才—樣々の御才の盛にて

し、(一)内侍のかんの殿、松の下に鶴するゐて、

おのれだに齢久しきあしたづの子の日の松の蔭にかくるゝ

(二)御、

われひとり鶴と松とを見るよりも(三)ひとつ〳〵は君にとぞおもふ

など宣ふ折に、東宮、年のはじめに未だ參り給はぬを同じうは、とて、今日まゐり給へり。(四)院の帝驚きて對面し給へり。かくて樂始まりて、君たち舞仕うまつりなどす。(五)大將殿の宮あこ、落蹲舞ひ給ふ。上達部かしづきて出だし給ふ。舞臺に立ち給ふに、(六)帝よりはじめ奉りて、そこらの人驚く。「只今の世こそは(七)世の盛にて、樣々の才人のかたちさへ勝れてあれ。其が中にも選びとよのへて、この世に見えぬ業をせむとせし、吹上、神泉の御幸なんどにも見えざりし舞の手かな」など騒ぎ滿ち、上達部、親王たち習はせる(八)少將な

〈語釋〉
(一)「のぼる」は「のぶる」歟
(三)外から見ゆる方を几帳にて掩ひ
(五)「ちゝなどの」又「ちゝなくの」等に作る。いづれにても通じがたし
(六)「あはれや」歟
〈考異〉
(二)て—ナシ
(四)給ふ—給ひて
(七)裝束かれたる—ナシ

ど涙落さぬなし。次ぎて家あこ君、陵王舞ひ給ふ。只生ける陵王に舞ひ給ふ。驚き怪しがり給ひて、帝、舞ひはつるすなはち、二所ながら召しあげて土器取らせて、斯う宣ふ。

嵯峨　過ぎにける齡ぞ(一)のぼる雲ちかく遊びはじむるたづの雛鳥

宮あこ君、

君にとて世々をば思ひしら雲につらねて遊ぶたづの雛鳥

とて土器取り給ふ。后宮、女一宮よりはじめ奉りて、(二)大將殿の君たちに御琴彈かせ奉り給ふ。きさいの宮、「あてこそは、など見え給はぬぞ」とて、(三)あらはなる方に、御几帳さし出でさせ、大后「猶此處に。あらはにもあらず」とて姉君たちかしづきて、參らせ奉らせ給ふ。(四)きさいの宮、「理こそはありけれ、(五)ちゝなどの口開けさせなどしけるは。いで(六)あなれや」とて(七)裝束かれたる

箏の琴二つ調べて、大后「此の上には多くもあらず」とて奉り給ふ。あて宮、「更に」など聞え給ふ。上、大后「さ言ふばかりには聞えずや。猶少や(一)」と聞え給へば(二)なむ、ひゞき高く面白く仕うまつり給ひける。「只今誰ぞや、斯ばかりの琴思ほえぬ」など驚きて、帝東宮聞し召す。頭中將(三)、「誰ならむ、我が手に覺えたるかな、あらじと思ふものを」などあるかぎりの人驚くこと限なし。東宮、「仲忠の朝臣聞くに恥かしからぬ手かな」と宣ふ。左大將のおとゞ涙を落して聞き給ふに、皆人、あて宮なるべしと思ひぬ。后の宮、「いと有り難し。只今(四)の御手なめりかし」とて、

大后つねよりもけふの子日の嬉しきはひく四つの緒を聞くにぞありける

あて宮、

木隱れて風のしらぶる松(五)のねは今日もひかれぬものにぞありける

〔語釋〕
(一)少しひき給へ
(三)「藤侍從」歟
(四)當今の名手

〔考異〕
(二)給へば—給へれば
(五)松の—松が

など聞え給ふ。后宮、銀の櫛のはこ六よろひ、黄金のはこ、壺ども(一)の中に萬のあり難き物ども入れて、世の中にあり難き御するびたひ、つらぐし(二)(三)、笄子、元結、大宮仕のはじめの御調度奉り給ふ。

かくて東宮、后宮に參り給ひて、御物語など聞え給ふ。大后「かく時も知らぬ住居せし程に、年月過ぎけるも知られざりつる(四)に、今日此の君(五)の知らせ給ふに、殘り少なくなりにける行く先も哀れに思ほゆるを、かく渡りおほしたれば、末の世つぎ給ふ心地になむ」東宮、「年のはじめにも參りなむとせしを、今日かく參り給ふと承りて、おなじくばとてなむ。仲頼(六)らまうけてさふらふ心地なむする」と聞え給ふ。

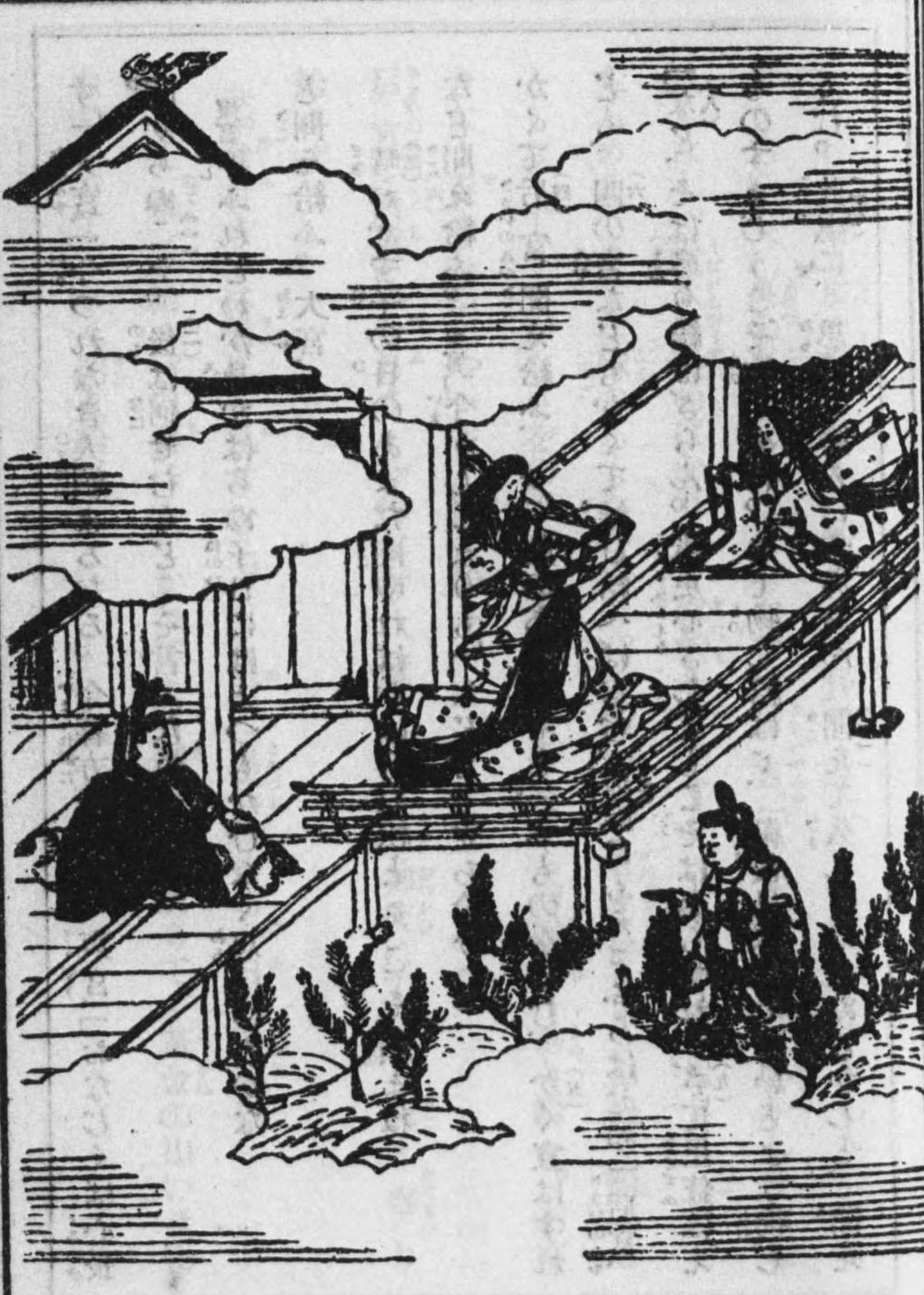
かくて大將殿の大宮(七)に對面し給ひて、東宮「久しくもなりにけるかな。后宮に參りて侍りし時の儘にや侍らむ。三(八)の宮のさとのまゝにや」大宮、「あな久(九)

〔語釋〕
(二)頰櫛の義なるべし
(五)女一宮をいふ
(六)誤脫あらん歟、「仲頼は」とある本もあり
(七)女一宮

〔考異〕
(一)どもの中に—どもなどに
(三)つらぐし—へらくし—えりくし
(四)つるに—つる程に
(八)三の宮の—「の」ナシ、此處いづれにしても聞えず
(九)久しや—久しやとて

〔語釋〕
(一)常に手紙にて申上げ居るあて宮の事も
(二)差上ぐる樣なる子どももなければ
(四)末々の御宮仕をさすべき娘でもあらば差上げたしとは思ひ居れども
(五)不祥、「いたち」を「ゐたち」とも書けり
(六)誤なるべし
(七)泥中の蓮といふ事もあれば多くの女の中に拔群なるべきあて宮の運命を危ぶむ事勿れといふ事なるべし
〔考異〕
(三)恥棄てて―はなちすててし

しや。御消息などは常に聞ゆれど、それはた聞えぬよりも覺束なくなん」東宮「いかでそれらも、かゝる序にこそ承りぬべかなれ」大宮、「幾度にかは聞き定め(一)給へらん」東宮、「對面する人には、常に物するは、斯うなども聞え給はずや」大宮、「承る時もあれど、さるべき子ども侍らざめれば、心ときめきに思ひ侍りつるに」東宮、「思ほし棄つる(二)にこそはあなれ。聞えずとも思ほし出でやすると思へど、然もあらねば、(三)恥棄ててと云ふばかりになむ聞ゆる」大宮、「言ひ知らぬが中にも、(四)雜役の藏人などにも仕う奉りぬべきもの侍らば參らせむ、と思ひ給ふるを、やむごとなき人數多さふらひ給ふと承れば、(五)いたちのまなき心地してなむ」東宮打笑ひ給ひて、東宮「參り給はん程こそ、倉の鼠の心地もすべかなれ。(六)いと然な思しそや。何のなかの蓮(七)とかや言ふこともあるを。餘所にては常に覺束なきを、かゝる序に承り定めてむ。僞とや思



〔語釋〕
（一）「戀ひしなん後はなにせん生ける身の爲こそ君を見まくほりすれ」
（三）上の句は多くの女を寵し給ふ由評判ある故の意
（四）「后宮など聞え給ふ」とある本もあり。「后宮に聞え給ふ」なるべし
（五）東宮が懇望せらるれども
（六）承香殿、嵯峨院第四の皇女
（七）東宮へあて宮を差上げず
（九）あて宮東宮に上らば寵甚しくて滅多に里に下る事は出來まじ
（一〇）我に對して
（一一）東宮の詞
〔考異〕
（一）こそ―そ―こと
（八）などそは―などかうは。「などかそは」なるべし

す」大宮、「今つれなき人頼まるなる。今暮方になむ」東宮、「おなじくば心長閑からぬこそ。（一）後は何せむなどこそ言ふなれ」とて、（二）

東宮 年ふれどわが身かはらぬ子日にはまつもかひなく思ほゆるかな

と聞え給ふ。大宮、

時わかず子の日のあまた聞ゆればかはらぬ松とえこそ頼まね（三）

など聞え給ふ。東宮「今かしこまりも」などとて立ち給ひぬ。

かくて后宮（四）聞え給ふ、女二「此のあてこそと云ふものをなむ、（五）かく宣はすれども、（六）四の宮などもかくて候ひ給へばなむ、（七）彼處にもえさふらはせぬ」后宮、「など、（八）そは參り給はざらん。殊更心ざしてもこそは參らすれ。（九）さて里住はえものすまじうこそ物すめれ。さて物し給はゞ、御後見ばかりはいとよう物してむ。（一〇）此處に、思ほし勝るにやあらん、「（一一）聞えて久しくなりぬるかしと、聞え

〔語釋〕
（一）あてこその幼稚なる由をいふ也
（二）麗雅の女、梨壺
（四）源季明の女、昭陽殿
（五）「參らせ給へ」となるべし
（六）東宮に
（七）「などとて」なるべし
（八）不詳
〔考異〕
（三）殊なるも―ことなる事あるも

奉れよ」と度々宣へども、斯からむ序にとてなむ」宮、「（一）あさましう果敢なきうちにも、萬の事かたはなるをなむ」后宮、「いでや、ことに恥かしげなる人もなし。（二）右大將殿のばかりぞ、容貌心目やすく、まうのぼりなども屢せらるめる。さては殊なる（三）もなかめり。（四）大殿のは、方々にもまうのぼり給ふこともなくて、さがなさをのみぞ、事にはせらるめる。猶早う參り給へ。（五）あぢきなう責めらるゝや」など聞え給ふ。

后宮（六）内裏に、今日さゝげ物ながら、藏人の少將を御使にて、かく聞え奉り給ふ。

大后 今日よりは君にを見せむちくま野に萬代つめる今日の若菜は

など（七）て奉り給ふ。内裏にも、かねてより然る御心ありて、黄金の山（八）いき物などありて、かく聞え給ふ、

（語釋）
（二）「藤侍從」歟、仲忠なるべし
（三）仲澄
（四）樂歟
（五）「罷り置かれにけりな」なるべし
（考異）
（一）下には—下は
（六）琴の聲—御聲

（朱雀）若菜つむ野べをば知らで君にとは龜のを山の小松をぞひく

など聞え給ふ。

かくて東宮歸り給ふ。上達部、親王たちには女のよそひ、それより下(一)には程につけつゝ賜ふ。宮人、男には白きうちぎ、袴、女には裝束一くだりづつ東宮の御とも、殿上人、宮づかさまで賜はりぬ。

かくてこと果てて、大將殿にかへり給ふ。御車ども、霞のごとくに引き續けて、君だち、侍從の君より始めて、上達部ならぬ人は御馬にて仕うまつり給ふ。頭中將(二)、侍從(三)の君は、馬を竝べ手綱をかはして、物語をする序に、頭中將、（仲忠）「世の中のかく遊び(四)などは、吹上の濱にて盡きにきと思ふを、殿にこそと(五)りおかされずなりにけれな。宮あこ君の御舞、君の御箏は、三千大千世界に敵はあらじかし。其が中にも今日の箏の琴(六)の聲は、いみじかりつるものかな。

（語釋）
（一）「源氏の中將」衍文歟、涼
（二）「さはさも」を「さはそちみ」とかける本もあり、いづれにしても詳からず
㊉ 東宮よりあて宮に歌を贈る
（三）「雁すむ里」を「よりこしき」とかける本もあり、いづれにしても通じがたし
（四）通じがたし一本には「いまはやよしなる心地」
（七）女一宮
（考異）
（五）袖の—袖も
（六）今だに—今は

源氏の中將(一)、仲忠等が耳は、身にも添はで、彼の御琴のあたりに」侍從、（仲忠）「如何にぞ。覺束無かりつる心地せられつらむ」中將、（仲忠）「彼の御爲には、さ(二)はさもひが物とぞ思ふや」いらへ、（仲澄）「雁すむ里(三)でふよりや」中將、（仲忠）「いざや。戀てふ山までも」など怪しからぬ戲しつゝ、殿まで歸り給ひぬ。

かくて殿に歸り給へるに、東宮より、

一日いと嬉しかりし喜びは、まづと思う給へしに、今(四)はのよなる心地してなむ。いでや、

君によりたゆげに袖(五)のひぢぬれば嬉しかりしもえこそつゝまね

今(六)だに早くを。つねにかはしまのまつにな思ひ給ひそよ。

など聞え給へり。大宮(七)かく聞え給ふ。

（宮）包むべき袖のくちなば嬉しさも終になき身となりもこそすれ

など聞え給ふ。又東宮より、

　いづこにか包(一)まざるべき嬉しさは身よりもことに餘りしもせじ

　袂(二)にしもあらじや。

と宣はせたり。あて宮、

　雲にまだおよばぬ身より餘らぬは永き心のなきにやあるらむ

　と思ひ給へるなむ。

など聞え給へり。

かくて東宮に、宮(三)もおとゞもたのめ聞え給へりとて、聞え給ふ人々、精進忌をしつゝ、山々寺々に、不斷の修法を七度(四)、春のはじめ參り(五)給はむ日まで行はせ、いみじき大願を立て、或は山林に交りて、金(六)の御嶽、越の白山、宇佐の宮まで參り給ひつゝ願し申し給はぬ人なきなかにも、源(七)宰相は淵瀬(八)をも知

〔語釋〕
(一)古今「嬉しさを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてと言はましを」
(三)あて宮の父母
(四)「七度……日まで」衍文歟
(五)あて宮が東宮へ上る日まで
(六)大和の金峯山
(七)實忠
㊀懸想人等、あて宮入内の事定まれりと聞きて憂悶す

〔考異〕
(一)東宮—「東」ナシ
(八)をも—「を」ナシ

らず惑ひこがれつゝ、殿(一)のうち片時離れず、御前の簀子を離れで、草木につけつゝ、涙を流して、斯くぞ聞え給ふ。

實忠　言の葉も涙も今は盡きはててたゞつれ〴〵とながめをぞする

いでや、聞えさすべき方ぞ覺えぬ。こゝらの年頃、思う給へ惑ひつることの甲斐なく、人傳ならで、夢ばかりも聞えさせで止みぬること。吾が君や、雲居の餘所にても、聞えさせてしがな。今暫しだに徒らになし果(二)て給ひそ。

と聞え給へれど、御返りもなし。右大將、

兼雅　今は聞えさせむもいと畏けれども、立(三)つこと憂き蔭の心地してなむ。

　いでや、

　八百萬(四)荒ぶる神は祈ぎつれど君は物きく時のなきかな

〔語釋〕
(一)正賴の邸內
(二)「なし果て」なるべし
(三)古今「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは」

〔考異〕
(四)あらぶる—あれたる

多くの年月をえこそこしらへずなりぬれ。

と(一)聞え給へり。あて宮見給ひて、「春(二)の残はまだ多かめるものを」など言ひて、これかれ笑ひて御返なし。

兵部卿宮より、

数かくとか言ふ様なれど、思う給へやる方なければ、いかでか思ひ給へ忘(三)れんとて、

二つともふみゆく方はなきものを跡につきつゝまどふ(四)ころかな

あないみじや。如何様にせむ。

と聞え給へり。平中納言、

正明 斯くのみ思ひ給はんよりも、世に住まずもがなと思ひ給(五)ふれども、それさへ心にもかなはぬものにこそ。

〔語釈〕
(二)上の古今の歌によりていへり
(三)古今「行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」
(五)「給ふよりも」とかける本もあり。「給へんよりも」なるべし

〔考異〕
(一)と—など
(四)ころかな—心か

とて、(一)

正明 身をなげん方さへぞなき人を思ふ心にまさる谷しなければ

如何にせん(二)〳〵。

と聞え給へり。御返りなし。

三の親王、雨の降りたる頃、御前の紅梅の匂ふ盛に、

忠康 くれなゐの涙の流れたまりつゝ花の袂の深くもあるかな

大空さへこそ。

など聞え給ふ。頭(三)中將、

仲忠 涙川うきてながるゝ今さへや我をば人の頼まざるらむ

袖の濡るゝは人のとがめらるはや(四)。

など(五)聞え給へり。源(六)中將、

〔語釈〕
(二)古今「世の中の憂きふし毎に身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ」
(三)「頭」は「藤」か
(六)涼

〔考異〕
(一)とて—とてなむ
(四)はや—にや
(五)など—と

涼 ありそ海のまさごの數は知りぬれど通ふばかりのあとをこそ見ね
　讐ふべき方こそ覺えね。
御返りなし。侍從(一)、御前のこのめのうちけぶりたるを見給ひて、かく聞え給ふ。
仲澄 わが如や春の山邊も焦るらむなげきのこのめ萌えぬ日もなし
　(二)山にもみちぬる心地こそすれ。
など聞え給へど、いらへ聞え給はず。源宰相、
實忠 萌えいづる若楓ともなりぬらむさてもや人に及ばぬと見む
兵衞の良佐(三)、
行政 魂を人にかよはく(四)なりぬればわがあつさをも知らでやあるらむ
　と思ひ給ふるこそ、いみじうつらけれ。
などあり。

〈語釋〉
(一)仲澄
(二)古今「わが戀は野にも山にもみちぬらん思ひやれども ゆく方もなし」
(三)良峯氏なる故良佐といふ也
〈考異〉
(四)かよはく—かよはて

藤英の大內記、時なること二つなし。東宮には學士、內裏の殿上ゆるされ、文つくり日記書きなどして、難き文、面白き文をも片時に作れば(一)、公にはいみじう(二)かしこきものにし給ふ。よき人々、聟に取り給はんと宣ふを(三)、耳にも聞き入れず。頭の藤英「衰へ迫れる時には、這ふ蟲、蟻とも、木傳ふ鳥とも貶し言ふぞかし。頭の髮に火焔のつき、大海に流るゝを助くることもなし。恥を棄て、身を顧みず出で立ちて、時の上達部に見え知られしかばこそ、いさゝか人々しくもなれ。唯そは一つは天道、一は學生の力なり。昔、天降れるかと見えし人に肩を竝べ、上に見し人を下に見て、もとよりも及び難かりし百敷を見馴すこと、佛の御德なり。我を言ひまさぐる公卿たち、あけの衣(四)主らに御女あはせよかし。我を取りせば(五)、昔の御心に違ふべし」など言ふ程に、左大將(六)のおとゞ東宮の大夫に物し給ふを辭し給ふ表つくらせ給ふとて、召して(七)、南のおとゞしつらはせて候はせ給ふ。おとゞ御裝束して逢ひ給へり。(八)ものいと淸らにて賜ひなどして、御土器賜ふ。君だち皆

㊤ 藤英の榮華、宮あこ君を介して文をあて宮に贈る
〈語釋〉
(四)紅衣を着る身分の人即ち五位の人
(五)聟に取らばの意なるべし
(六)正頼
(七)藤英を正頼がよびて
(八)饗應したる也
〈考異〉
(一)作れば—作り
(二)いみじう—ナシ
(三)給はんと宣ふを—給ふを

（語釋）
（一）盃をめぐらす也
（二）あて宮を思ひて也
（七）普通の手紙なり
（八）「斯うなむと」なるべし。斯く〳〵とあて宮に取次ぐべしと也
（九）讀書を藤英に習はぬ故
（一二）あて宮への文の取次をよくして下さらば
（考異）
（三）炎燃ゆる—炎も見ゆる
（四）思ふ樣—思ふに—思ふほに
（五）歩み—試み
（六）こそ今はこの御あたり—こそは今はこのみたち
（一〇）な讀みそ—な見せそ
（一一）怪し—あしや
（一三）仕うまつり—仕うまつらず
（一四）いと—ナシ

土器取り給ひ、まうち君たえず流し（一）などす。御表つくり果てて暫し候ふに、魂消（二）え惑ひ（三）炎燃ゆる心地す。大内記思ふ（四）樣、昔の試策の歩み（五）にかく覺えしかば、出で立ちてこそ、（六）今はこの御あたりにも候ふなれ、なほ此のこと致してむ、と思ひて、宮あこ君にかく書きて奉る。

藤英　物おもふに胸だにもえぬものならば身より炎は出さゞらまし

　隠れ所のなければにや。

など書きて藤英「これ（七）世の常に聞ゆるなり。御覽ぜさせ給ひて御返り聞え給へ」といふ。宮あこ君、「更に斯樣の物見給はずなむある。今さりとも、斯う（八）なむ聞えむ」とて、宮あこ「久しう文を（九）承らぬかな。他人にはな讀みそ（一〇）と宣へば、いと怪し（一一）」内記、藤英「暇の更に侍らねばなむ。然はありとも、聞ゆる事（一二）だに願み給はゞ、學士をば、仕うまつり（一三）、文もいとよく（一四）習はし奉りてむ」宮あこ君、「物の師ごとにかく宣へばこそ、いと無才になりぬべけれ」など宣ひて、宮あこ君、あて宮に奉り給

忠こそ法師歌をあて宮に贈る
（語釋）
（二）實忠
（三）誤あるべし
（五）他に寵愛の女なく
實忠正頼の邸に留まりて妻子を顧みず。妻子の悲嘆。長子眞砂君の病死
（七）「ゐたる」歟
（考異）
（一）硯の…奉り—硯水にて奉れ
（四）給ふ一人女—給うけるひとつ女
（六）いふ—なむいへり

へど、怪しがりて棄て給ひつ。

忠こその阿闍梨も、大願を立てて聖天の法を不斷に行ひ、加持したる水を硯の水（一）にして奉り給ふ。

　盡きにきと思ふわがみの悲しさを君はいかでかこゝらとめけむ

と聞え給へり。なほ佛の御德なし。

かくて源宰相（二）は、三條堀河の程に、廣く面白き家に住み給ふ。うへに、（三）時の上達部のかしづき給ふ一人女（四）、十四歳にて聟取られて、また思ふ人も無く、（五）いみじき中にて、「此の世には更にも言はず、行末にも、草木、鳥獸となるとも、友だちとこそならめ」と言ひ契りて棲みわたり給ふに、男子一人、女子二人。女子はそで君、男子をば眞砂君といふ。（六）眞砂君をば、父君片時え見給はではあらず、撫で養ひ給ふほどに、殿の内豐かに、家を造れること、金銀瑠璃の大殿に、上下の人（七）こゐたる如して經給ふに、此のあて宮に思ほしつきてより、年頃の契をも忘れ、

かなしき妻子の上をも知らで、(一)彼の殿に籠り居て、吹く風鳥につけても訪らひ給はで、年月になりぬ。北の方思ひ歎き給ふこと限なし。二月ばかりになりぬ。殿の内漸う(二)毀れ、人少なになり、池に水草生え(三)わたり、庭に草しげり行く。木の芽花の色も、昔におぼえず、朝には、若し人(四)や訪れ給ふと待ち暮らし、夜うさりは、影にや見ゆると頼みわたり、涙を流して眺め渡り給ふに、春の雨つれ〴〵と降る日、雨籠りて、若君たち、父君を戀ひつゝうち泣きて居給へるを、母君あたらしくかなしと思ほして、鶯の巣に子を生み置きて雨に濡れたるを取らせて、かく書きて源宰相に奉らせ給ふ。

實忠妻　春雨と　ともに(五)ふる巣のもり憂きは濡るゝ子どもを見るにぞありける

これに劣らぬ宿は見苦しうなん。さても眞砂は數知らずとか聞ゆめる。

とて奉らせ給へり。宰相げに如何に思ふらむと思ほえて、

實忠　棲みなれし宿をぞおもふ鶯はなにに心もうつるものから

〔語釋〕
(一)正頼邸
(四)實忠をいふ
(五)ふる＝古、降。もり＝漏り、守り

〔考異〕
(二)漸う—やうやくに
(三)生え—はへ

など長閑に思したれ。げに如何にと思ふものからなむ。眞砂は數知らむ時に

やと宣へ。

とあり。北の方見給ひて、涙を流して經給ふほどに、眞砂君(一)十三歲そで君十四歲なり、父君撫で養ひ給ひしのみ戀しくて、遊びもせず、物も食はで思ふ程に、(二)父君の我を思ほしゝ時には、遊びしに片時立ち退きしをだに、苦しき物にこそし給ひしか、今は前を渡りありき給へどとぶらひ給はぬは、御子とも覺さぬなめり。親無き人は、心もはかなく、才も習はで、官爵も得ること難くこそあなれ、我こそ然るべき人なゝれ、など思ほしく屈して、病つきて、只よわりに弱りぬ。眞砂君めのとに言ふ樣、(三)眞砂「われこそ、父君の戀しく覺え給ふに、えあるまじく覺ゆれ。(四)上に仕うまつらんと思ひつるものを」と泣く〳〵言ふ。めのと、「あな忌々しや。吾が君は、などか宣ふ。上も今はかくおほん德もなくなり給ひづれど、君だちのおはしませばこそ、行く先を賴み聞えて、許多の人さふらへ。おはしまさ

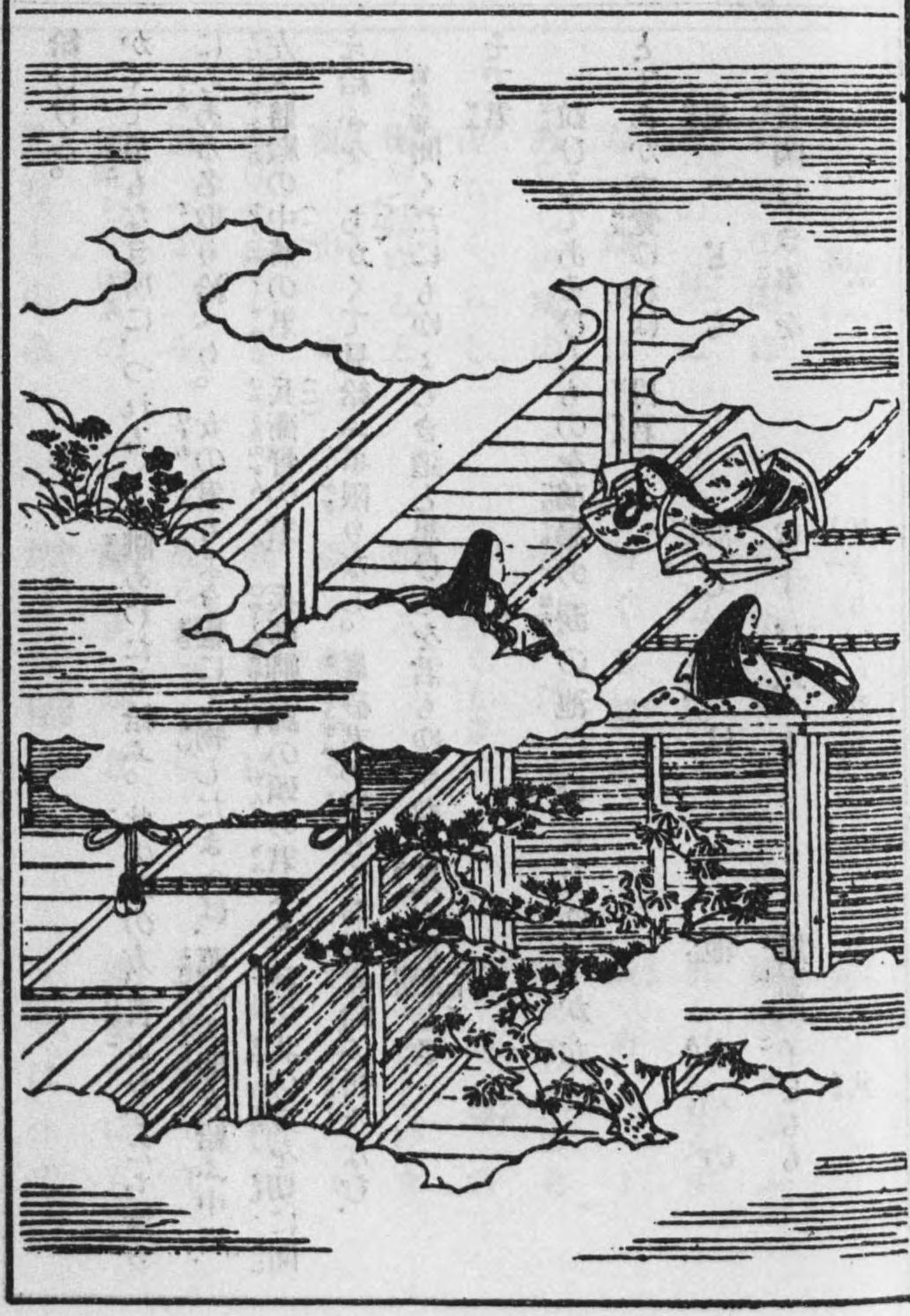
〔語釋〕
(一)「十三歲そで君十四歲なり」此十一字傍注の攙入歟
(二)以下眞砂君の心
(四)母に

〔考異〕
(三)言ふ樣—いふげに—いふはに

〔語釋〕
(一)「まゝ」は乳母の自稱
(二)生きる譯にゆくまじ
(三)妻をいふ
(七)わが願を成就せしめ給へと思ひて
(八)眞砂君の法事の願文
(九)實忠が法會の僧に多くの布施を與へたる也
〔考異〕
(四)この上の戀ひ―この上をもしらで戀ひ
(五)佛經書き―佛かき經かき
(六)調じて―「調」ナシ

ずば、まゝ(一)よりはじめて、何を頼みて仕うまつらむ、とこそ思さめ。つらく、あるまじき父君により奉りて、身をも徒らになさんとは思すな」と泣く〳〵言ふ。眞砂君、「さは思へど、(二)えぞ有るまじきや。我が亡からむ代に、上に良く仕うまつり給へよ」など言ひわたるに、遂に父君を戀ひつゝ亡くなり給ひぬ。母君惑ひこがれ給ふに効なし。

源宰相は、かゝる事をも知り給はで、思ほす事のならぬをのみ思ひ入られ、臥し沈み病になり、或る時は遊びありきつゝ、旅住みをし、思ひしめ、此の上の(三)(四)戀ひ悲しみ給ふをも知らぬほどに、眞砂君の七日のわざを、母君佛(五)經書き、法服調じ(六)て、比叡にてし給ふほどに、宰相、思ひ成し(七)給へと、御社に詣うであひ給へるに、(八)此の君のわざをする願書に、親の心變りたるにより、一人ある男子を徒らになしたることを、面白う作れり。一山の人悲しみのゝしる。源宰相驚きて、泣き惑ひ臥し轉びたまへど、効なし。(九)多くの誦經じ給ふ。さてなむ眞砂君の亡きをば知り



給ひける。

かくて男もなき所に、つれ〴〵と眺めわたり給ふ。此の北の方、昔よりかたち淸らに心ある名取り給へり。女の君もよき程にて物したまへば、萬の人聞え給ふ中に、左大將殿の中將の君(一)、兵衞督の君(二)、兵部卿、馬の頭の君など、此の北の方を切に聞え給ふを、ちかくて(三)見給ふ事限りなし。眞砂君の戀しくおぼえ給ふ折々なむ、

實忠妻 聞くだにもゆゝしき道と思ひしを君もゆきぬと見るが悲しさ(四)

そで君、

泣びゐてあそびしものを鳰鳥の涙の池にひとりゆくかな

とてあかず覺ゆれば、母君、

思へども　悲しき物は　池水の
長閑けき事を　むすびつゝ　鴛鴦の子どもも
ならび居て　憂きもつらきも　もろ共に

〈語釋〉
(一)正賴の三男祐澄
(二)「兵衞佐の君」歟、正賴の四男顯澄なるべし
(三)誤脫あるべし。「ちかくて」を「ちかくかく」とも「ちかくてかく」とも「ちかく」ともかけり
〈考異〉
(四)悲しさ―かなしき

淵にも瀨にも　おくれじと　契りしものを
いつの間に　花の色々(一)　咲きまがふ
春の林に　うつり居て　あとだに見えず
なりゆけば　明くる朝を　眺めつゝ
あらしの風の　音にだに　聞えやすると
待ちくらし　暮れ行くときは　飛ぶ鳥の
影や見ゆると　賴みつゝ　松の葉しげき
奧山の　深く悲しと　思ひつゝ
月日の行くも　知らぬ間は　二葉に生ひし
撫子を　來る朝ごとに　かき撫でて
何時しかいろの　薄き濃き　盛をだにも
見むとのみ　思ひし程に　うちはへて

〈語釋〉
(一)實忠が花麗なる正賴の邸にのみゆき居るをいふ

〔語釋〕
(一)誤あちんか
(二)木下歟
(五)餘所ながらも實忠が音信さへせば眞砂君が死する事はあるまじ

〔考異〕
(三)えだ—した
(四)だにも—だにぞ

親を戀ひつゝ　泣きためし　から紅の
海を出でて　黄なる泉に　おり立ちて
いさごの波を(一)　うちそむき　悲しきまでに
つきにけり　夜々ごとに　ぬばたまの
衣の下に　臥し渡り　しのゝめ毎に
起き居つゝ　花のこもとに(二)　遊び來し
我が身の一人　行く道に　枝なる雪の
消ゆる間も　遲れんとやは　思ほえし
宿の板間は　荒れまさり　木のもとはかく
漏りぬれど　玉のえだにも(三)　ありしかば
蝶鳥だにも(四)　通ひこし　空行く雲の
(五)よそにても　有りやと問はゞ　深草の
峰の霞と　ならましや　猶たらちめを
思ふやと(一)　ながめてくらす　春(二)の日の
日暮しまでに　立つ雁の　かずもかずには
有りも有るかな

〔語釋〕
(一)眞砂君が死後なほ父母を慕ふかと思ひて
(三)正頼卿
(九)大臣上

〔考異〕
● 三月上巳の祓に正頼一家を擧げて難波に遊ぶ
(二)やと—には
(四)ほてにあげて—ほにあげて—ほとにあげて
(五)はくゐ—はくえ
(六)なく—など
(七)御船に—御船は
(八)あて宮…三には—あて宮に奉り給ふ二には大い殿の君男君たちに奉る三に

とて歎き渡り給ふ。

かくて彌生の十日の日ばかりに、初の巳の日出で來たれば、左大將殿(三)には、上巳の祓しに、難波へ、方々、男君だちも、殘り少なくおはします。百五十石ばかりの船六つ、檜皮ぶきの船具して、金銀瑠璃に裝束かれ、大きなる勾欄をうちつけ、(四)ほてにあげて、白き絲を太き繩になひ、大いなるはくゐ(五)にて、船の調度につかひすゑて、御簾どもなどもぬるものなくして(六)、船六つに船子二十人ばかり、舵取四人、さうぞく選び、かたちを整へ、國々の受領ども、一つづつ御船のさうぞくどもして奉りたるに、一の御船(七)に大宮、女御、あて宮(八)、二に彼方の北の方(九)の御男君だ

ち、三には御方々七所ながら奉り給ふ。御船一つに大人十二人、童四人、下づかへ四人、やんごとなきを擇ばれ、さうぞく御船毎にかざり男ども(一)も心殊に整へたり。又の御船に、左大將殿、頭中將、(二)源中將、(三)源宰相など、一つには御聟七所奉る。そこばくの宮殿の人、あるは御船にさふらひ、或は小船どもに乘りてわたり給ふに、(四)かうぶり柳に到り給ひて、大宮、

女一(五)名にしおはゞあけの衣はとき縫(六)はで綠のいとをよれる青柳

女御の君、

仁壽殿(七)川べなる柳が枝にゐる鷺をしろくさくともまづ見つるかな

あて宮、

色かへてひさしくなれど青柳のいとゞふかくも見ゆる綠か

など言ひて(八)長洲に至り給ひて、鶴の立てるを民部卿の宮の御方、

五君千歳ふるたづの(九)おりゐる今日よりや長洲てふ名を人の知るらむ

〔語釋〕
(一)藤中將なるべし、仲忠
(三)涼
(四)淀川の岸にあり
(五)かうぶりとは叙爵即ち五位に叙せらるゝをば五位の袍の色の紅なるを思ひてよめる也
(八)淀川尻にあり

〔考異〕
(一)男ども…一つには—男御舟には
(六)縫はで—ぬがて
(七)川べなる—川づなる
(九)おりゐる—立ちゐる—おりぬる

中務の宮の御方、鶯の鳴くを聞きて、

中務をしむなる春の長洲の濱邊にはなにを歎くぞうぐひすの聲

左近中將殿の御方、

四君春をしむうぐひすの音もきてなかす野はまだ(一)花ぞさかりなるらし

民部卿殿の御方、

三君うち群れて長洲の濱にやどりして春の名殘や久しきと見む

御津にて、左衞門督の殿の御方、

七君おぼつかなまだ白雲の餘所ながらみつと頼まむことのはかなさ

藤宰相殿の御方、

八君音にのみ聞きつるものをみつの濱見なれてのみも思ほゆるかな

右のおとゞの御方、(二)

大君きゝ渡りはつかに今日ぞみつのはま見つゝは過ぎじ船宿りせむ

〔考異〕
(一)まだ—又
(二)右のおとゞの御方—大將殿

〔語釋〕
(一)などては「などとて」なるべし
(四)なとては「などとて」なるべし
(五)大祓の祝詞の詞を用ひたり
(九)頭は藤なるべし、仲忠、「の」は衍文なるべし

〔考異〕
(二)には—をば
(三)なくも—なくもはた
(六)かづけ…のぼりて—よき馬鞍御使にたまふはやくのぼりて
(七)御まうけを—し「を」ナシ
(八)待ち—ナシ

などて(一)港に御祓し給ふ程に、東宮よりかく聞え給へり、

東宮　はる〴〵と行く川ごとに祓ふとも我が歎には(二)離れしもせじ

あて宮打笑ひ給ひて、「腹ぎたなくも(三)」など(四)て、

あて宮　禊にはなげきの花も散りぬらむ(五)八重雲はらふかぜのさむさに

とて女の裝束かづけ(六)給ふ。御使急ぎのぼりて參りぬ。

かくて、難波に出で給ふ程に、畿内、山陽道、南海道の受領ども集ひて、おはしますべき所を、有り難く面白うしなし、花の林、浦のまゝに植ゑ竝べ、同じき砂子、同じき岩、有りがたくをかしき姿に調じて、萬の御まうけ(七)をして待ち(八)候ふに、御船ども漕ぎつらねて、萬の上手、船歌に物の音ども吹き合せて、船ごとに遊びかはしておはします。萬歳樂所々に御唱歌して待ちたてまつる。かくて御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに祝詞申して、一度に御はらへする程に、頭(九)中將の御祓のもの、取り具して奉る。黃金の車に、黃金の黃牛かけて、乘せたる人、つけたる人、みな金銀に調じて、かく聞え奉る。

仲忠　月の輪のかけてや世々を盡してむ心をやらむ雲がかりかな

と聞えたり。あて宮、

雲にだに心をやらば大空に(一)とぶ車をば餘所ながら見む

とて返し給ひけり。源中將、同じ樣に調じて、かく聞えたり。

宮　戀せじのみそぎの船も漕ぎよらば大海(二)(三)の原に解きや放たむ

と聞えたり。あて宮「物も言はで返す(四)もあはれ」とて、中納言の君してかく言はせ給ふ、

あて宮　禊してみぬより人を忘るてふ船を放たぬ風やなからむ

とて皆返し遣はしつ。又御方々の、枻に居て、方々に物聞えなどし給ふを、源宰相羨(五)みて、

實忠　竝み立てる松のねたさを難波女にかへすぐ〴〵もみそぎするかな

〔語釋〕
(一)和名抄に「兼名苑注云奇肱國人能作飛車從風飛行故曰飛車」竹取物語に「とぶ車一つ具したり」
(二)大祓の祝詞の詞を用ひたり

〔考異〕
(三)大海の原に—大うなばらに
(四)返すも—返すを
(五)羨みて—ナシ

〔語釋〕(一)神岡歟
(二)岸かは歟
(四)誤あらん歟

〔考異〕(三)住の江—すみよし
(五)式部卿—民部卿

あて宮、

かみをかの禊なるらん岩の上にこもれる松のおふるきしかは(一)

源宰相(二)「木工の君に」とて、かく言はせたり、

實忠 住の江(三)の松のゆかりとたのむかな難波のみそぎ神や享くらむ

木工の君、

難波女をはなざかりなる禊にはあだなることの如何離れむ(四)

など言ふ程に、夜に入りて月面白う、濱靜かなるに、おほん遊び盛に、いろ〳〵の花散り敷きたる浦に潮の滿つを見給ひて、あるじの大殿、

正頼 色々の花こきまぜにちり敷ける浦は幾入うちて染めしぞ

式部卿(五)の親王、

ちる花を留めわびつゝ濱に出でてをしむ春さへ程やなからん

中務の親王、

〔語釋〕(一)兼雅なるべし
(三)「のみこ」は衍文なるべし

〔考異〕(二)ちれと—ちると
(四)群千鳥—「千」ナシ
(五)立つを—立つに
(六)うてば—うけば—うくは

春ふかみ花の色々散りぬれどなごりある空と見るぞ怪しき

右のおとゞ(一)、

立ちよるも嬉しとも見ず花ちれ(二)と吹きにし風のなごりと思へば

民部卿のみこ(三)、

實正 都いでてやなぎも花もみがけるを錦とやなほ人の見るらむ

左衞門督、

清正 群れて訪ふ今日をまたぬは櫻花うらさへ浪のをればなりけり

藤宰相、松原に潮の滿つを、

忠俊 ふか綠滿ちひてそむる浦の松いづれのしほに色まさるらむ

源宰相、波にきほひて群千鳥(四)の立つを(五)、

實忠 濱千鳥友をつらねて立ちぬるはよる〳〵浪のうてば(六)なりけり

源中將、歸る雁の飛ぶ影を滿つ潮に見給ひて、

〈語釋〉
(一)不相變あて宮の入内せずして待たしむるを云ふ

(大) 東宮實忠歌をあて宮に贈る。

〈考異〉
(二)一具—さては

(三)かげ—かぜ

(四)妹をおきて—いもをきて

涼 歸るともまだしら雲にとぶかりを今朝こそ潮の滿ちかたに見れ

など言ひて御設したる國々の司どもに、女のよそひ一具、(一)櫻色のほそなが、袴など賜はせて、面白き所々見ぬ所なく見て歸り給ひぬ。

かくて又東宮より、

何時となけれど、日頃はいとゞ覺束なくなむ思ほゆるかなとてなむ。

(二)まつならで生ひずもあるかな住吉のきしかげ(三)ごとに思ふものから

と聞え給へり。あて宮、

浪こゆるまつは枯れつゝ住吉のわすれ草のみ生ふとこそ聞け

と聞え給ふ。

源宰相、賀茂に詣で給ひて、いみじき大願を申し給ふにも、なほ悲しう覺え給ひければ、御社より、

實忠 妹(四)をおきて賀茂の社にまづ來ても血なる涙をえこそ止めね

御返りなし。
右大將のぬし、長谷より御嶽詣と思ほし立ちて出で給ふに、井手のわたりにあり(一)ける山吹の面白きを折りて、かく聞え給ふ、

兼雅 思ふこと祈りつゝ行けばもろ共にゐでとぞつぐる山吹の花

唐土もとかいふなれば頼しくなむ。

と聞え給へり。されど御返りなし。大將の主いたく歎きて、長谷に詣で給ひて、思す事を、かたう大いなる願を立て給ひて、七日七夜籠り給ひて、日毎に誦經し(二)つゝ、「思ふこと成し給へらば、黃金の堂たてむ、金色の御かた現はし奉らむ。(三)月に一度、左右の御燈、命のあらんかぎり奉らむ」など申し給ひて出で給ひて、龍門、(四)比曾、(五)(六)高間、(七)壺坂、御嶽にしのびて詣で給ふ。然るまゝに、さかしき道を歩みも知り給はず歩み給へば、御足腫れぬ。かくても思す事の難かるべきを心細う思しつゝ詣で給ふに、(八)ひぢがさ雨降り、雷閃めきて、落ちかゝりなむとする時

廿 兼雅戀を長谷に祈る。祐澄を語らふ

〔語釋〕
(一)兼雅
(三)佛像をつくり奉らん
(四)龍門寺
(六)比曾寺
(七)高間寺

〔考異〕
(二)七夜—ばかり
(五)比曾…坂—よりとまづおぼさる
(八)給ふに—給ふを

に、右大將のぬし、三條の北の方、(一)頭中將よりもあて宮に聞えさして止みなむずる(二)事、と思すに、涙止まらず思ほさる。それよりもかく聞え給へり。

兼正 思ふこと成すてふ神も色ふかき涙ながせばわたりとぞなる(三)

と聞え給へり。あて宮見給ひて物も宣はず。中將の君、祐澄「ふりはへ斯く宣へるを、御使のたどに參るらむこそいとほしけれ。何時も聞え給はぬものにもあらぬを、(四)此度ばかりは祐澄に許し給へ。(五)此の御返事は聞え給へ」あて宮「さ思ひてこそ度々(六)聞えしか。常には如何は」と思して聞え給はず。(七)
右大將のぬし、畏く祈り給ひて餘所ながら願し申し給ふ。兼雅「祈り成し給へらば、(八)(九)いさゝことら月に從ひて奉らん」など願し申し給ひて、神といふ神、佛といふ(一〇)佛に大願を立て盡して、思ほしわづらひて、中將の君を三條殿へ迎へ奉り給ひて、(一一)物語などし給ふ序に兼雅「怪しく年月經るまゝに、つれなさのみまさり給へば、(一二)思ひわづらひて、神佛に、若し聞き入れ給ふやとて、遠き所に詣で給へてしかど、

〔語釋〕
(一)以下兼雅の心
(二)「頭中將」衍文なるべし。俊蔭女に一旦中絶えしよりもあて宮を得ずして止まんことを一層悲しく思ふなり
(四)返事も貰ひ得ずして行りゆくも氣の毒なりしに
(五)從來返事する時もありし
(七)「思し」は衍文なるべし
(八)長谷の觀音に祈るなるべし
(一〇)不詳、「いさゝこと」を又「いさことし」「いさゝかことう」などゝ書けり
(一一)祐澄
(一二)あて宮が

〔考異〕
(三)成す—なる
(六)ばかりは—「は」ナシ、又ばかりと
(九)祈り給ひて—祈りをさへして

如何あらんとすらん。いでや、かやうの事は、心に任せて、人々のみ恨みらるゝものとこそ思ひしか、此の御爲(一)にこそ、身さへ徒らになりぬべきものと思ひぬれ」中將、祐澄「如何なればか然侍らん。かやうの心もまだなき人(二)にて、聞えにくゝ侍りしを、とにかくに宣ひて(三)、時々聞えさすめりしを、日頃は親たちなど同じ所にて、祐澄等もえ物も宣はねばにや侍らん」右大將殿、兼雅「事の近くなりにたればにこそあなれ(四)。時々ほのめきし御返も見えずなりぬるは、人笑へになし給ふかな。兼雅、子もあまた無し。仲忠は自から出で立ち(五)侍りなん。忝く(六)とも、己が一つ子(七)にて物し給ふとも御身は沈み給はじ。人の命を助くと思ほして此のこと成したばかり給へ。聞えありて御罪になるとも、それをな思しそ。吾が佛。いとこそ侘しけれ」祐澄「祐澄も、いかでと思ひ給ふ事なり。然れど、數多侍る中に、らうたき(八)物にして、暫しも離ちてはえあるまじとて、宮(九)よりも切に宣はするを、且は畏まり聞えさするものから、え出し立てられぬを見給ふればなむ。とかくしなさむは難く侍

（語釋）
（一）あて宮の爲に
（二）あて宮はまだ情を解せぬ子どもにて
（三）色々とすゝめて返事をさせしに
（四）東宮へ入内の事近づきし故なるべし
（五）出世もすべし
（六）祐澄をわが子同樣に保護して出世せしめんといふ事歟
（八）父母があて宮を特に寵愛して
（九）東宮
（考異）
（七）一つ子—ひとり子

るに、思すことに叶ふ(一)とて、此處に歎かれんことなむ心苦しかるべき」大將のぬし、兼雅「春宮にと思したるを此處にと聞ゆるは、空に遊ぶ雲のたかく(二)宿るばかりにはあれど、宮仕し給ふ人、必らず彼の位(三)にしもなり給はず。此處におはして、(四)兼雅よりはじめて私の君にて物し給はむには、徒らになるばかりにしも殿(五)は思さじ。御心より起りて、をのこばかり(六)の人は物し給はずやは。此處(七)には、此の事かひなくなりなば、やがて徒らになりぬべきを、助け給はゞ、まさりぬべくなむ。かやうの事知らぬ人の樣にな宣ひそや」(八)などてかはらけ度々になりぬ。明くるまで物語などして、あて宮にかく聞え給ふ、

兼雅「覺束なかりつる御返さへ、今は宣はせぬこそいみじうつらけれ。

とて、

兼雅「いにしへ(九)のあとを見つゝも惑ひしを今行く末を如何にせよとぞ

とて女のよそひ一具かづけ奉り給ふ。中將歸り給ひてあて宮に、祐澄「御返事聞

（語釋）
（一）兼雅の望を叶へんとて父母に歎きをかくるは忍び難し
（二）「たかく」は「谷に」の誤なるべし
（三）皇后の位
（四）兼雅以下の人々すべてあて宮を主君の如くに大事にせば
（五）正頼
（六）誤あるべし
（七）我は
（八）「などとて」なるべし
（九）「いにしへ」は「いにしへは」なるべし。以前は御返事を得てさへなほ途方にくれたりしを御返事さへ得がたくなりし今後を如何にせよとせらるゝぞ

え給はずとて、いみじく恨み聞え給ふなり。などかは心やりばかりに聞え給はぬ。人には深くつらきもの(一)にしも思はれぬものぞや」など聞え給へど御返りも聞え給はず。

兵部卿の宮より、

兵部　君がため(二)塵とてたつるたましひや積れば戀の山となるらん

御返りなし。平中納言殿(三)より、

正明　うちはへておつる涙や袖のうへに潮のみちくる海となるらん

御返りなし。三の親王、四月ばかりにかく聞え給へり、

忠康　烟たつかしらの雪は夏わかみ(四)いかで降れると知る人のなき

これをだに御覽じ咎め(五)ぬこそはいみじうつらけれ。

など聞え給ふ。頭(六)中將の君は、近き社には詣うでぬ所なく、越の白山まで參るに、路も知らぬ山に惑ひければ、路よりかく聞ゆ、

〔語釈〕
(三)「すつる」歟
(四)「わかず」なるべし
(六)藤中將歟、仲忠
㊅懸想人等歌をあて宮に贈る

〔考異〕
(一)にしも―としも
(二)君がため―君により
(五)咎めぬ―とめぬ

仲忠　なぐさむる神もやあると越路なるまたは知らねばまどふ(一)頃かな

と聞え給へり。御返りなし。源中將より、

涼　聞えさせで久しうなりぬれば、覺束なう(二)のみなり勝るこそいみじう侘しけれ。いでや行末覺えぬ人にもこそな(三)。いみじく惑はし給ふかな。

とて、

涼　我をかくなど徒になしつらむ後をたのまむものと知る〲

御返りなし。藏人の(四)少將、(五)宇佐の使にさゝれて下るに、それより、

仲頼　いはし水宇佐までゆるす逢ふことをなほいらへずば(六)神を恨みむ

御返りなし。侍徒の君、

仲澄　戀をのみたぎりておつる涙川身を浮舟のこがれ増すかな

兵衞佐、

行政　山も野もなほ憂しといへばしらま弓(七)いるべき方の思ほえぬ哉

〔語釈〕
(一)「こそなれ」なるべし
(五)宇佐神宮の奉幣使
(七)いる―入る、射る

〔考異〕
(一)まどふ―まよふ
(二)のみ―ナシ
(四)の少將―の源少將
(六)神を―神も

又藤英の大內記、

夏草におく露よりもはかなきは君にかゝれる命なりけり

忠こその阿闍梨、

世の中を行きめぐりにし身なれども戀てふ山をまだぞふみ見ぬ

誰々も御返りなし。

かくて東宮より、

恨みつゝ空しくならば我さへやには去らず鳴く蟬となるべき

あて宮、

松になく蟬としならば雲の上のしりへの位(一)何にかはせむ

又宮より、

春宮 わがくだく心(二)の塵は山と(三)なりおつる涙は海と(四)なるかな

有り難くも思はせ給ふものかな。世のためしにもなりぬべしや。

〔語釋〕

(一)後宮の位、即皇后の位

〔考異〕

(二)わが―わり

(三)山と―雲と

(四)海と―雨と

とて奉れ給ふ。あて宮、

かせ雲のおとろくかめの甲の上にいかなる塵か山と積りし(一)

宮より、

東宮 龜の尾の山には誰も到りなむ(二)君をまつにぞ老いもしぬべき

船の中ならぬ人さへ憂き瀬(三)は多かるを、思ひ知らせ給はじや。

など書きて奉れ給ふ。あて宮、

山よりも到りがたきは風(四)たかみ危き海のあればなりけり

など聞え給ふ。

源宰相(五)、思ほしわづらひて、山林に交りて、山々寺々に、不斷の修法おこなはせつゝ聞え給へど、御返りなしと、歎くこと限なくて、然言ひてあらむやはとて、

かく聞え給ふ、

實忠 帆をあげて岩より舟はかよふともわが水莖は路もなきかな

〔語釋〕

(一)風雲歟

(二)徐福が仙藥を求めに東海に行きし故事を用ひ「童男丱女舟中老」の句によりてよめり

(五)實忠

〔考異〕

(三)憂き…給はじや―ナシ

(四)風たかみ―岩たかみ―岩たゝみ

◉ 實忠の執心。兵衛の君を責めて文をあて宮に贈る。戀病。七大寺比叡山等に祈る

御返りなし。又宰相、實忠「あふことの難くてやまば吾はなほ人を恨みて石となりなむ」御返事なし。思ひ惑ひて兵衞の君を局に呼びて宣ふ、實忠「などか今は夢ばかりの御返もなき。御參りは何時ばかりぞ」兵衞、「委しくはえ承らず。今は誰にも、時(一)時の御返も聞え給はねば、さやうに思ほしたる事ぞや。日を定められぬことばか(二)りにこそあなれ」實忠「いでや、如何樣になすべき。吾が佛、助け給へ。斯くてお(三)はします時だに死ぬる心地するものを、まして參り給ひなば、やがて死に果てぬべし。いかで、さらぬ前に、餘所ながらも一言聞えさせむ。とかく年頃になりぬ(四)れば、思ほし疎むべくもあらぬを、よきに聞え給へ」兵衞、「あな恐ろし。何時とても、さるべき折はなけれど、此の頃は、宮、おとゞ、御方々おはしまし、夜はやがて此方に大殿籠れば、兵衞なども、近くは得さふらはずや。すべて今は効なし。(五)(六)早や思し忘れね」源宰相、「吾が佛。など斯くいみじき事は宣ふ。いづれの世にか

〔語釋〕
(一)あて宮の東宮へ參らるゝには
(二)東宮へ上らるゝに決著せられたりと見ゆ

〔考異〕
(三)助け―さづけ
(四)一言―一聲
(五)なども―などは
(六)や―ナシ

忘れ聞ゆべき。今は何心もなし。只こゝらの年頃思う給へ焦るゝことを、斯くなむと餘所ながら聞えてしがな、とのみなむ思ふ。まろを斯くながら殺し給ひても、君の御敵とこそならめ。同じくば、殺し給はで。殿にものしき人に思ほされ給は(一)(二)(三)むには、命までにはあらじ。官爵賜はり給はゞこそあらめ、殿にこ候は得候は(四)(五)ざらめ、それはな思ほしそ。なほ〲物聞えむ。たばかり給へ。おぼろげにては(六)かく聞えじ。身のうちに火の燃ゆる心地すればぞや。助け給へ」と血の涙を流して宣へば、兵衞、「わりなき事になむ侍る。年頃かくのみ聞え給ふを、さもありぬ(七)べき御氣色見えば、必らず身は徒になるとも、と思う給へしかど、思ひかくべくもあらず、いと恐ろしければ、すべき方なくなむ侍る。若しも隙侍らば、今斯くな(八)(九)むと聞えさせむ」宰相喜びて御文書き給ふ。

實忠今は聞えさせじと思ひ給ふれど、程もなしとかいふなる身より思う給へ餘り(一〇)ぬるを、遣る方なければなむ。斯ういみじき目を見給へ餘りぬるよりは、死

〔語釋〕
(二)我をあて宮に取持ちたる事發覺して正頼に憎まれたりとも君が命を失ふ程の事はあるまじ
(五)通じがたし
(七)出來さうな樣子ならば自分の身にかへても御取持申すべしと思ひしかど

〔考異〕
(一)ならめ―あらめ
(三)殿にものしき―たのもしき
(四)あらじ―ならじ
(六)思ほしそ―おぼしそ
(八)なむ侍る―侍り
(九)若しも―「も」ナシ
(一〇)程も―ほとも

ぬるものにもがなと思ひ給ふれど、それも斯くながらは途(一)なき心地なんする。

とて、

實忠「思ふことかたくてしなば死出の山關とやならむ塞がれる胸

いかで夢の中にも斯くなむと、聞えさせて止みぬるものにもがな。吾が君や。如何にせむ。

とて、兵衞の君に、蒔繪の置口(二)の箱一具に、綾絹たゝみ入れ、夏の裝束、綾がさねにて入れて、かく言ひて取らせ給ふ、

實忠「燃えさらぬ思ひこめたるみを熱みぬける衣をあつしとな見そ

とて取らせ給ふ。兵衞、とかく聞えてまう上りて、あて宮に此の御文を奉る。見給ひて物も宣はず。兵衞、「いみじく惑ひ入られ給ふめるを、此度ばかり、たゞ一行聞え給へ。思ひ死に死に給ひなば、恐ろしくもこそ」と聞ゆれど、聞き入れ給はず。

〔語釋〕
(一)死んで行くに途なき
(二)錫などにて緣をつけたる

源宰相心魂を碎きて、思ひ歎くこと限なくて、兵衞の君を呼びて斯く聞え給ふ。

實忠「湧くがごと物おもふ人の胸の火に落つる涙の瀧をますかな

今は聞えさすべき方こそなけれ。

とて、兵衞の君に、をかしげなる沈の箱(一)二よろひに、黃金一箱づつ入れて取らせ給ふとて、

實忠「年を經て賴む人だにつれなきに箱のこがねも何にかはせん

兵衞、

數(二)しれる黃金はわれも何せんにはかりなしてふ戀をこそ思へ

とて、賜はらでまう上りて、あて宮に此の御文奉るとて、兵衞「なほ此の度ばかり、一行聞えさせ給へ。「此度さへ宣はずば、やがて(三)死ぬべし」と惑ひ焦れ給ふを

〔語釋〕
(二)「かけつれば千々の黃金も數しりぬなどわが戀の逢ふばかりなき」此歌によりてよめり

〔考異〕
(一)二よろひ—一よろひ
(三)やがて—ナシ

（語釋）
（一）「あだ人の」なるべし
（二）おひかけて
（四）東宮入内を決定せぬ時さへむづかしかりしに

（考異）
（三）賴まれ―賴ませ
（五）簀子のめぐりには―簀子にはめぐりて
（六）方も―かひも

見給ふれば、「いといみじくなん」あて宮、久しく思しわづらひて、彼の文の端に只かく書き給へり、

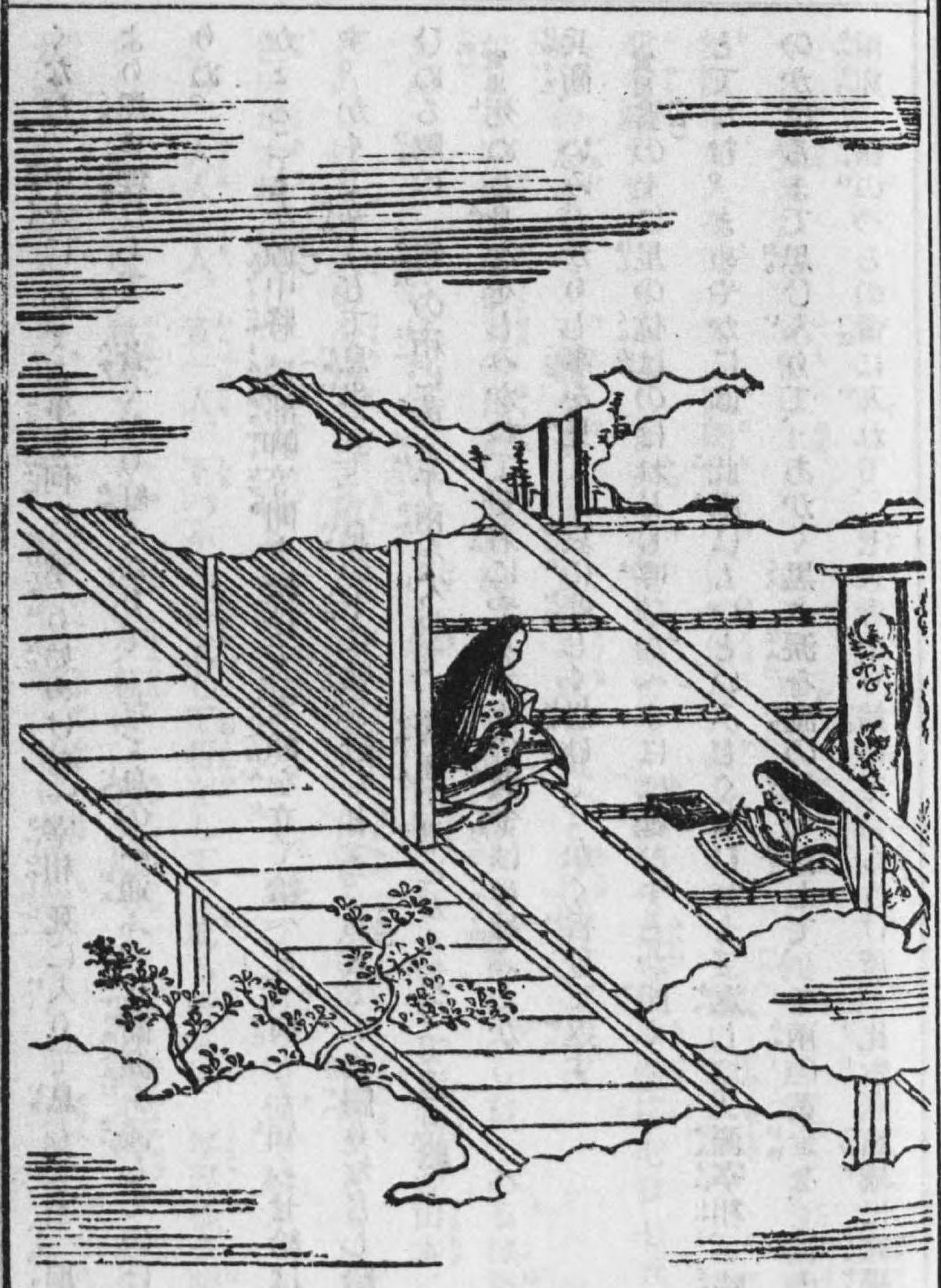
あて宮　涙をばいかゞ賴まむまた人の目にさへ浮きて見ゆとこそ聞け

と書きつけ給へり。宰相喜び給ふこと限なし。（一）（二）立ちかへりて聞え給へり、

實忠　年をへて歎かぬ人は浮ばぬをまたかゝる目は誰か見るらむ

あらじとなん覺ゆる。

とて奉れ給ふ。兵衞「此度ばかりと宣はすれば、隙を伺ひて、おぼろげならず聞えて御覽ぜさせつ。今はすべき方もなし。かけてもな賴まれそよ。（三）思し定めぬ時（四）だにあるものを、今は、世は倒になるとも思ほしかへすべきにもあらず。身を捨てて思ほすとも、簀子のめぐりには君だち、（五）御帳のめぐりには宮、おとゞよりはじめ奉りて、御方々隙なくおはしますには、飛ぶ鳥といふとも翔り給ふべくもあらず。見奉れば、いみじくいとほしと思う給ふれど、たばかり聞ゆべき方（六）もな



くなむ。中々に、かゝる事を何に承り始めけむ」宰相死に入りて息もせず、頂より黑き煙たちて、蒼くなり紅くなりて、たゞ息のみ通ふ。兵衞淚を流してのぼりぬ。

かゝることを源中將(一)民部卿(二)等聞き給ひて、大願を立て給へど、何とも知らせ給はず。かくて辛うじて息出でて、息の下に物言ひなどす。(三)おとゞも皆歸りなどし給ひぬる隙に、銀の箱に黃金千兩を入れて、兵衞の君にかく言ひて遣り給ふ、

　　實忠　死ぬる身をしみかねてぞ君にやる千々の黃金は命延ぶとか

兵衞、いみじかりし事を見て、哀に悲しく思ひて、かく言ひて返す、

　　實忠　(四)雲の上に星の位はのぼれども呼びかへすには延びずとか聞く

とてなむ。まめやかには、此處にもいといみじくなむ」とて返しつ。源宰相、時のかはるまで思ひ入りて、あかく黑き淚を瀧の如く落して、千兩の黃金を、三十兩宛、銀のつるの壺に入れて、七大寺より始めて、らうけ所(五)、比叡、高雄に修經

〔語釋〕
(一)こゝの源中將は實忠の兄實頼をいふなるべし
(二)實忠の兄實正
(三)實忠等の父季明
(四)魂よばひの故事を思ひてよめる歟
(五)誤あるべし

す。その志、只此の事なり。天地佛神、與力し給はゞ、と思ふ。源宰相、猶すべき方覺えねば、比叡に上りて、あるが中に、驗かしこき四十九所に(一)、よき阿闍梨四十九人を選りて、阿闍梨一人に伴僧六人具して、四十九壇に聖天供を、布施供養ゆたかに、うるはしき衣を袈裟に著せつゝ行はせ、自らは中堂に七日七夜、(二)かせの忌をして、五體を投げて、此の事成し給へと行ひ給ふ。(三)

(四)かゝるに彼の眞砂君の母君に聞え給ふ人々、あるはたゞ入りに入らむ(五)、あるは盜まん、などし給ひければ、いかで(六)人も寄らざらむ所にあらむ、とて志賀の山本になむありける。人の心に入れて造りたりける所の、山近く水近く、花紅葉どもの色色の草木植ゑ渡したる所に、住み給ひし殿をかへて(七)、忍びて渡りて住み給ふ。女どち、大人一人、童一人、下づかへ一人して行をして、或る時には、琴琴搔き鳴らして經給ふに、秋深くなり行く頃の夕暮に、秋風肌寒く、山の瀧心凄く、鹿の音はるかに聞え、お前の木草(八)、或は色の盛、或は花の散り(九)などして哀なるに、母

〔語釋〕
(一)「四十九所に」衍文歟。一本には「驗かしこき所に四十九所に」とあり
(二)未詳
(五)當人の諾否にかまはず押入りて本意を遂げん
(六)母君の心
(七)「かへて」は「かひて」又は「えて」の誤なるべし
◎實忠の妻子志賀の山本に隱る。實忠、仲忠と偶然その隱家を訪ふ。識れる妻と知らざる夫。

〔考異〕
(三)給ふ―給ひける
(四)かゝるに―ナシ
(八)木草―草木
(九)散り―さき

〔語釋〕
(一)「めのと」の下に脱字あるべし
(三)祈禱の事
(五)藤中將なるべし、仲忠
(七)龍華歟

〔考異〕
(二)山里の…恨みじ—山里は梢さびしくみるもみぢかな
(四)彼の—は
(六)見つけて—見つけ給ひて
(八)りうげ—うりふ
(九)うち笑ひて—ナシ

北の方、そで君、御簾をあげて、出居の簀子に御たち竝み居て、北の方琴、そで君琴、めのと(一)など掻き合せて、北の方、

實忠妻 秋風の身に寒ければつれもなき男鹿の聲の遠ざかりゆく

そで君、

見る人もなくて散りぬる山里(二)の千草の花は世をば恨みじ

乳母、

ひぐらしの鳴く山里の夕暮はもの思ふ袖に露ぞ置きそふ

と言ひつゝうち泣きて居給へるに、源宰相、(三)(四)彼のこと果てて歸り給ふに、(五)頭中將も、志賀に籠りて、同じ様なることとして歸り出づるに、比叡の辻にて源宰相(六)見つけて、實忠「何處よりぞや」と宣へば、頭中將、

仲忠 入りぬべき路やくと足曳の(七)(八)りうげの山を立ちならしつる

源宰相(九)うち笑ひて、

〔語釋〕
(一)實忠の妻の隱家

〔考異〕
(二)見れど飽かず—見もあかず—見あかず

實忠 露霜のおきそふ枝をなげけどもかひある山はわれもまだ見ず

をかしからむ紅葉折りて山づとにせむとて見給ふに、(一)此の家の垣根の紅葉、唐紅を染めかへしたる錦を懸けて渡したると見ゆ。源宰相、「情有る枝は彼處にぞあらむ」とて、まづ押し折るとて、

實忠 濃き枝は家づとにせむつれなくてやみにし人や色に見ゆると

中將、

仲忠 山づとも見すべき人はなけれどもわが折る枝に風もよぎなむ

とて折りて立ち給へるに、なほ此の家見れど(二)飽かず面白し。人々え過ぎ給はで、

源宰相、

實忠 里とほみ、急ぎてかへる秋山にしひて心のとゞまるや何ぞ

中將、

仲忠 ひとりのみ蓬の宿に臥すよりは錦織りしく山べにを寢む

とて此の家に入り給ひて見入るれば、籬の尾花、色ふかき袂にて、をれかへり招く。源宰相、(一)思すことは成らず、年頃の妻子は、如何にしけむ方も知らで、萬に哀に思ほゆれば、

實忠 夕暮の籬にまねく袖みればきぬ縫ひ著せし妹かとぞ思ふ

(二)妹が門の聲ぶりに北の方聞き給ひて、「哀にも(三)失ひたる人こそ(四)あなれ」北の方、「あなむくつけや。それは鬼の(五)聲ぞせむ。これは人の聲にこそあなれ」とは宣へど、そて「それなりけり。げに似たる聲かな」と宣ふに、猶かく哀に覺ゆれば北の方、

實忠妻 ふる里のつらき昔を忘るとてかへたる宿も袖はぬれけり

そで君、

立寄りしまがきを見つゝ慰めし宿をかへてぞいとゞ悲しき

とてこれかれ打泣きつゝ居給へるに、中門おし開けて二所(六)並び立ち給へるを見給ひて、實忠妻、むくつけく(七)此のわたりに有りつらむ。あなかま人々(八)な言ひそ」とて御

〔語釋〕
(二)催馬樂の「妹が門」の節にてこの歌を謡ひしなるべし。「聲ぶりに」の下「口すさび給ふを」などあるべし　又「北の方」は「そで君」の誤なるべし
(三)「にも」衍文歟
(四)實忠をいふ
(五)實忠の聲ならば鬼の如くなる筈
(六)仲忠實忠
(七)どうして此邊に實忠が來て居るならんきびが悪い
(八)口をきくな

〔考異〕
(一)入り給ひてー入り居給ひて

簾取り下して入り給ひぬ。人々ちかく立寄り給へば、(二)流石に人は住むものから咎めず。簀子ちかく寄りて宰相、(一)

實忠 夕暮のたそがれ時はなかりけりかく立寄れどとふ人もなし

とてのぼりて居給ひぬ。皆聲聞き知り給へる人のみあれば、(三)物も言はせず。宰相、

實忠「などか物宣ふ人も無き。若しかたは人の住み給ふ所か」とて、

實忠「山びこもこたふるものを夕暮にたびの空なる人の聲には

怪しく、などか世離れたる住居はし給ふ。思ふ心無き人々(四)すかすや」など宣ふ。そで君、「夜晝戀ひ泣き給ふ父君の、稀に見え給ふを、如何いらへ聞えざらむ」とて御座などいだす(五)とて、圓座に書きつく、

そて君 旅といへば(六)我も悲しな世をうしと知らぬ山路に入りぬと思へば

(七)「同じ山路に、とか言ふなる」など言ひ出して(八)暫しありて(九)、透箱四つに、(一〇)よしづきたる様に、紅葉折り敷きて、松の實くだ物盛りて、くさびらなどして、(一一)尾花色の

〔語釋〕
(一)實忠等
(二)此句實忠等の眼中より寫す
(三)實忠妻が
(四)「すかすや」は「おはすや」の誤歟。「すみ所や」とかける本もあり
(七)「捨ててこそ同じ山路に入りにけれ心々のうき世なりしを」
(一一)薄　黒燒にして入るゝなりとぞ

〔考異〕
(五)い　すーはらはす
(六)といへばーてへば
(八)出しーナシ
(九)暫しありてー暫しばかりありて
(一〇)よしづきたる様にーはしつきすゑて

〔語釋〕
(一)かり—假、雁
(四)女の方にて素性を知らせず
(五)實忠の心
(七)實忠はあて宮の事のみ思ひ居る故氣がつかぬと見ゆ
(八)「有心者なり」歟、「うらむにやなる」「こしむしやなり」などかける本もあり
(九)妻をいふ
〔考異〕
(二)いへば—いへど
(三)すぐる—すぐず
(六)かな—ナシ
(一〇)鳴く—鳴くを

強飯などまゐる程に、雁鳴きて渡る。北の方、土器にかく書きて出し給ふ、

實忠妻 秋山に紅葉と散れるたび人を更にもかりと告げて行くかな(一)

源宰相、

實忠 たびといへ(二)ば雁も紅葉も秋山を忘れてすぐる(三)時はなきかな

北の方、

實忠妻 秋はてておつる紅葉と大空に雁てふ音をば聞くもかひなし

など言へ(四)ど氣色も見せず、怪しく(五)をかしき所(六)かなとは見給へど、思ふ(七)心のいみじければ、それを思ふにやあらむ、え思ひ遣り給はず。源宰相、實忠「如何見給ふ。心もなくは見えずなむ」中將、仲忠「更にも宣ふかな。(八)うしむじやなり。語らひ置きて、時々は紅葉見る所にし給へ」宰相、實忠「いでや、見る人に心移りては、身も徒らに、年頃哀と思ひし人(九)のなりけむ方も知らず、らうたしと思ひし子をも失ひてしかば、今は然る心をぞ思はぬ」かく言ふ程に、鹿はるかに鳴く(一〇)。宰相、

〔語釋〕
(二)鹿の音を鳴らして君に元の妻を思出さするはしはらしき風よと也
(三)實忠の妻をいふ
(四)此詞誤脱あるべし
(七)不詳
〔考異〕
(一)笑ひて—「て」ナシ
(五)我等が—わが
(廿)實忠文をあて宮に贈る
(六)如何ならましな—はかなからましな

實忠 鹿の音に戀ひまさりつゝ惑ひにし妻さへそひて思ほゆるかな

頭中將うち笑ひて(一)、仲忠「珍らしくも、故里を思し出づるかな。うるせき(二)風なりや」とて、

仲忠 色ふかき木々のひま〳〵鳴く鹿は君まつ人に劣らざるらむ(三)

など夜一夜言ひて、曉に歸るとて、物など宣へども、人もいらへず。源宰相、實忠「など我等(四)(五)が思ふ心いみじかりけりと思へば、此處を見棄てて歸るこそ、如何(六)ならましな」中將、仲忠「仲忠は思ふ心もなけれど、(七)物の心もなど言ふ樣にあるにや」とて歸りぬ。

かくて源宰相、彼の四十九壇の修法に加持したる香水を硯の水にて、あて宮に、

實忠 言の葉も身も限にはなりぬれど涙はつきぬものにぞありける

いでや、今まで斯う聞えさすべうもあらざりしを、今一度御返りをだに見給へて、黄なる泉の道にも、と思ひ給へてなむ。

とて兵衛の君に、いみじく悲しきことを言ひて、取らす。兵衛、あて宮の湯殿に出で給へるに、委しく聞えて奉れば、あて宮、亡くなりぬとのよしりしを哀と聞召して、返事や一行せましと思せど、聞えこそあれとて、物も宣はず。
(一)(二)　(三)

〔語釋〕
(一)實忠が焦れ死にしたりといふ噂を聞きて
(三)人に噂を立てられてはならぬと

〔考異〕
(二)なくなりぬとのよしりしを―なくならばやと宣ひしらせしを

あて宮

梗概

【一】あて宮東宮に參る事定まる。懸想人等の失望。仲澄の苦惱。【二】御參りの準備。仲忠、涼、實忠等の贈物。【三】仲賴出家。【四】あて宮仲澄の病を訪ふ。【五】仲澄悶絶す。あて宮東宮に參る。【六】あて宮の榮華。【七】仲東宮の妃たち。あて宮懷胎。【八】庚申。あて宮人々を饗す。【八】實忠、小野より忠、行政、仲賴法師を訪ふ。【九】仲賴、あて宮に歌を贈る。聞絶。あて宮の長歌をあて宮に贈る。【十】仲澄歌をあて宮に贈る。【十一】悲嘆。【十】滋野眞菅あて宮を獲んとす。告訴。眞菅父子流罪。【十二】三春高基遁世。【十三】あて宮東宮と歌を贈答す。【十三】あて宮、若宮を產む。產養ひ。飯米を所々に頒つ。昭陽殿女御の嫉妬。【十四】あて宮、二の宮を產む。

かくて、あて宮東宮に參り給ふこと十月五日と定りぬ。聞え給ふ人々、まどひ給ふこと限なし。その中にも、源宰相、(一)御兄の侍從は、(二)ふし沈みて、たゞ死ぬべしと惑ひ入られ給ひて、(三)いみじう悲しきことども書きつらねて、日毎にかきつくし聞え給へど、(四)御返なし。惑ひ入らるゝ中にも、源侍從、心一つに思ひて、ふし沈みて湯も水もたえて、死ぬべきに、(五)大宮、いと悲しと思して、女一など(六)いふ效な

〔語釋〕
【一】あて宮東宮に參る事定まる。懸想人等の失望。仲澄の苦惱。
(一)實忠
(二)仲澄
(五)正賴の妻、女一宮

〔考異〕
(三)いみじう―ナシ
(四)給へど―給へれど
(六)なくは―「は」ナシ

〔語釈〕
(一)東宮
(二)東宮にあげて仕舞はんと
(三)正賴の子どもは多けれども
(四)祐澄
(五)あて宮入内の時にも
(七)あて宮の一身を
(八)仲澄の樣子
(一一)所詮生きられぬ事なるべし
(一二)母上御存生中は
(一三)同胞多けれども

〔考異〕
(六)たゞ—ナシ
(九)覺えず—おもほえ給はず
(一〇)聞え給ふ—聞ゆる
(一四)いかで—ナシ
(一五)思ひ給へつる—思う給へる

くはなりまさり給ふぞ。あてこそを、宮(一)のいと切に召せば、(二)何かはと思ふを、(三)あまたものし給へど、中將(四)と其處とをこそは、宮にも上ゆるされなどし給へれば、然らむ折にも、宮のうちの事をも後見すべし。(六)たゞこ(七)の御上をば、其處にあづけ(五)奉らむ、となむ思ふを、斯くいたづら人にていますかるが、いみじく悲しきこと」と泣きまどひ給ふ。(八)いとゞしきにつけて、物宣ひつゞくることも覺え(九)ず、あるかなきかにてぞ聞え(一〇)給ふ。仲澄「月日の經るまゝに、斯くのみなり勝り侍らば、なほえ(一一)侍るまじきにこそ侍るめれ。つかさ、かうぶりをも、人と等しく賜はり御覽ぜられむと思う給へる本意に叶ひて、(一二)御世のかぎりは仕うまつらむ、とこそ思ひ侍りつれ。斯くながら歇み侍りぬべきが、いみじう悲しきこと。(一三)數多おはしませども、中のおとゞの姬君になむ(一四)いかで仕うまつらむと、(一五)思ひ給へつる。御宮仕の程などには、雜役をだに、とこそ思ひ給ふる時しまれ、いたづら人になりぬること」と泣く〳〵聞ゆ。宮、おとゞに、女二「侍從の、いと賴もしげなう見ゆるに、

〔語釈〕
(三)あて宮に懸想せる人人
(五)あて宮の東宮入内

〔考異〕
(一)騷がしかなり—「な」ナシ
(二)樣…あなり—樣になんみな人あなる
㊁ 御參りの準備。仲忠、涼、實忠等の贈物
(四)ある—あなる
(六)御裝—御ようい

思ひこそ煩ひぬれ。如何ならむとすらむ」おとゞ、正賴「そがいとほしき事。などこれしも斯くあらむ。わが子といふもの、いと面伏せ、人笑へなるは無きがうちに、これはなり出でぬべく、門をも廣げ、氏をも繼ぐべきしも斯くあれば、いみじくなむ。すべて、世の中いと騷(一)がしかなり。これが煩らふ樣(二)に、みな人(三)あなり。源宰相も死ぬべしとなん言ふなる。今年のこととして、斯くなむ(四)ある。怪しく騷がしかりぬべき年とて、春のはじめより、いとつゝしみ給ひて、御嶽、熊野詣、やんごとなき上達部、おりたちて山踏し給へる年にこそあれ」と宣ふ。

かくて御まゐり(五)近くなりぬ。御調度、御裝(六)を、うるはしく淸らに調ぜられ、御供人、おとな四十人、みな四位あるは宰相の娘、髮長にあまり、長よき程にて、手かき、歌よみ、琴琴彈き、人のいらへすること、みな上手、年二十餘のうち、裝束、唐綾、たゞの絹、一つまぜず、皆あか色。わらは六人、五位の女、十五歲のうち、容貌、するわざ、おとなの如し。裝束、からあやの赤色の五重襲のうへの

〈語釋〉
(三)沈香を食器の樣にこしらへたるなるべし
(五)涼
〈考異〉
(一)萬の—「の」ナシ
(二)はじめて—「て」ナシ
(四)奉れ—奉り

きぬ、纐のうへの袴、あはせの袴、綾のあこめ著たり。下づかへ八人、手織のきぬ、袴せず、檜皮色に紅葉がさね、侍の女、ひすまし二人、皆かくの如し。

かくて其の時になりて、御車數の如く、御供の人しなぐ〳〵裝束きて、日のくるゝを待ち給ふ程に、仲忠の中將の御許より、蒔繪の置口の箱四つに、沈の插櫛よりはじめて、萬(一)の御けづりぐしの具、御櫛匣の御調度、よき御すゐ額、笄子、元結、えりくしよりはじめて、あり難くて、御鏡、疊紙、齒黑めよりはじめ(二)て、一具、薫物のはこ、銀の御箱に、かうのあはせ薫物入れて、沈のおもの(三)に、銀の箸、火取に沈の灰入れて、黑方を薫物の炭のやうにして、銀の炭取のちひさきに入れなどして、こまやかに美しげに入れて奉るとて、御髪の箱にかく書きて奉れ(四)たり、

(仲忠)からくしげ明けくれ物を思ひつゝみな空しくもなりにけるかな

とて孫王の君に、夏冬の裝束して志す。御使、さし置きてかへりぬ。

かくて源中將(五)、夏冬の御裝束ども、よそひなど麗しうして、沈の置口の箱四つにたゝみ入れて、包など淸らにて、かく聞え給へり、

(涼)人知れずそめわたりつる袖の色も今日(一)幾入と見るぞかなしき

とて奉り給へり。宮おとゞ見給ひて、「言ひ知らず麗しきものどもかな」とて、「留むれば事あり顏(二)なり、還せば情なし。物は警策なるえう(三)のものなり。なほ留めつるなり」とて笑ひ給ふ。

源宰相、さるいみじき心地に、聞えすぐし給はで、兵衞の君に、裝束して志し給ふとて、

(實忠)もゆる火も泣く音にのみぞぬるみにし涙盡きぬるけふの悲しさ

聞え(四)給ふべき隙あらば、かく聞え給へ。萬のこと、忘れきこえねど、物もおぼえず。

となむ宣へりける。

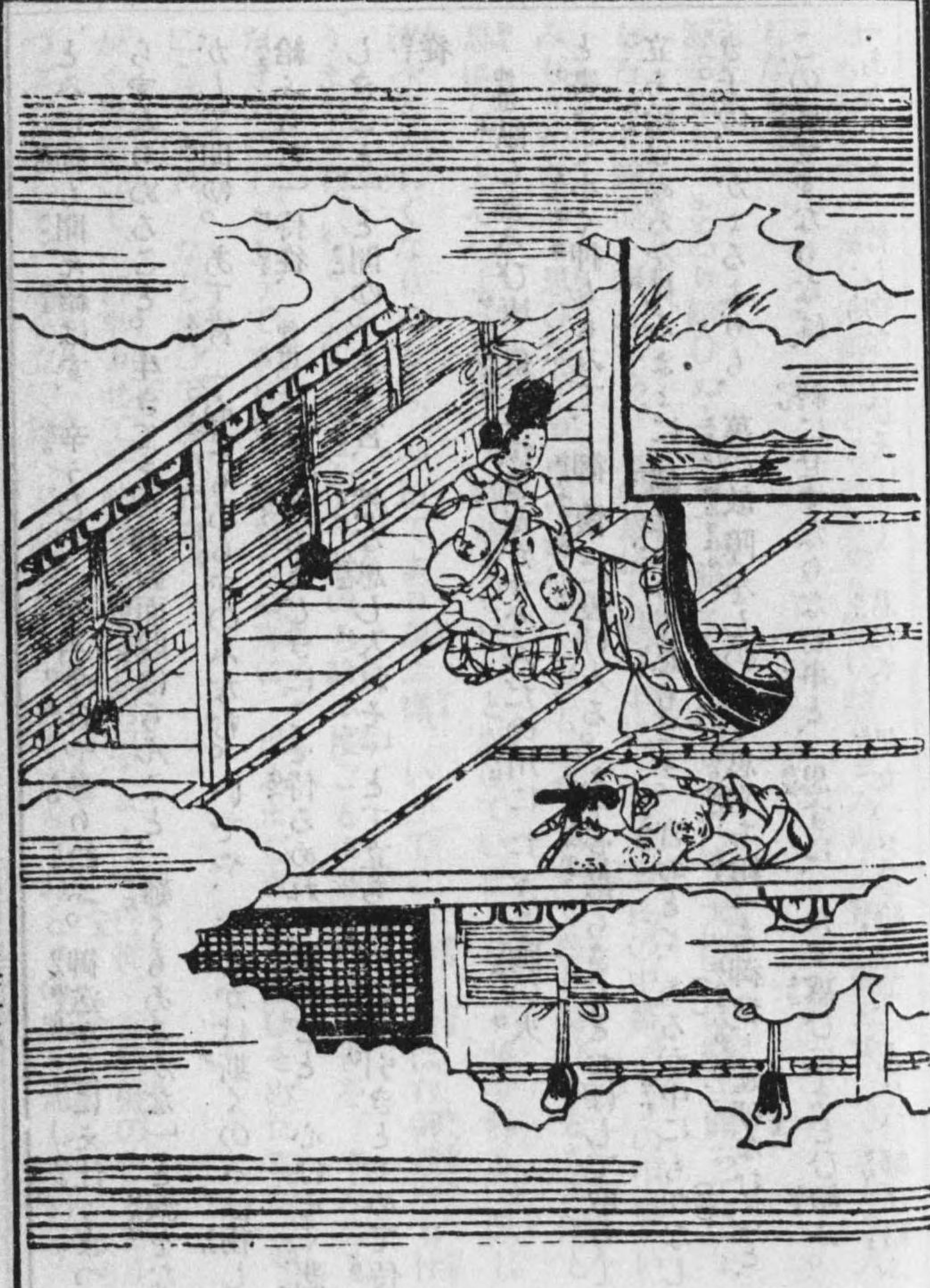
かゝる程に、「侍從の君、人面も知らず、くちをしうなりぬ」とのゝしる。宮、お

〈語釋〉
(三)要の物、要用の物の義歟、「こうの物」とかける本もあり
〈考異〉
(一)今日—けに
(二)事あり顏なり—はゞかりあり
(四)聞え—など聞え
㊁ あて宮仲澄の病を訪ふ。仲澄悶絶す。あて宮東宮に參る。

〈語釋〉
(一)仲澄の部屋を
(二)あて宮
(五)今直に來よとあて宮へ言ひやらん
(六)仲澄が
(七)みがきをかけたる如く

〈考異〉
(三)ゆゝしや―いみじや
(四)さばれ―さまれ

とゞ、かつは思し騒ぎ、かつは御参のこと思し急ぐ。大宮、局(一)にさしのぞき給ひて、「只今は如何にぞや。この御参のことどものすとて、え見奉らずや」侍従、仲澄「限にこそあめれ。今一度、(二)かの御方に對面賜はらずなりぬること」と聞ゆ。宮、女二「あなゆゝしや(三)、などか然あらむ。(四)さばれ、「今(五)ものし給へ」と、然ものせんかし。今日はと思へど、あないみじや」とて涙を流し給ひてあて宮に、女二「侍従のいと心ぼそく物しつるを、わたりて見給へ。物のはじめに、いとうたてと思へど、對面せんとものしつれば」など宣ふ。あて宮、心憂しとはおほせど、宮聞え給へば、わたり給ふ。宮、おとゞのすみ給ふ、北のおとゞに、臥(六)し給へり。あて宮、その頃御かたちの盛なり。長五尺に今すこし足らぬ程、いみじく姿をかしげに御髪のうるはしくをかしげに清らなる、黒紫のきぬを瑩(七)せるごと、生ひたる限するまで至らぬ筋なし。めでたきこと限なし。今日はまして心殊に見え給ふ。兵衛の君、孫王の君ばかり御供にておはしたり。侍従の君、見奉り給ひて、



〔語釋〕
（一）生きがたきなるべし
（二）以下正頼夫妻の心
（三）仲澄をいふ
（四）仲澄死すれば死の穢によりてあて宮の入内は無論延引すべき也
〔考異〕
（五）延びなむ―のびん

とみに物も聞え給はず、辛うじて、仲澄「今日や參り給ふ。御送をだにえ仕うまつらずなりぬること。生きてまた御對面賜はらんこと、難くもあるかな」と涙をながして聞ゆ。あて宮、「心にもあらずのみなむ。いでや、などかは斯くのみは物し給ふらむ」侍從、仲澄「（一）なほえ侍るまじきにこそ侍るめれ。萬のこと、心ぼそく悲しきこと」と聞ゆ。あて宮、「然な思し入れそ」とて立ち給へるを引きとゞめて侍從、

仲澄　臥しまろび唐紅に泣きながすなみだの川にたぎる胸の火

と書きて小く押しもみて、御懐に投げ入る。あて宮散らさじとおぼして取りて立ち給ひぬるを見るまゝに、絶え入りて息もせず。宮おとゞ、（二）あるが中にもかなし（三）き子の、かゝるよりも、萬の故障をしのぎて思立ち給へる御參、（四）（五）延びなむこと、この度せずなりなば、終にせずなりなむ事と、思すに、たゞ惑ひにまどひ給ふ。「あなかま。暫し物な言ひそ」とて、君だち、男女つどひ給ひて、まどひ騒ぎ給ふ

〔語釋〕
（一）涼
（二）「とう中將」なるべし仲忠也
（三）仲頼
（五）仲澄
（六）藍青になりたる形容なるべし
〔考異〕
（四）あれ―あなれ
（七）うつぶし―ナシ
（八）あて宮も―「も」ナシ

をも知らず、外には御車どもを裝束き設けたり。みな人物も覺えず、さかしき人もなし。

源宰相も、まゐり給ひぬと聞きて、絶え入り給ひぬれば、大殿には騒ぎ滿ちてのゝしる。上達部、親王たち、もの思ほし歎く中に、たゞ（一）源氏の中將、（二）とうの中將、いみじうかなしと思ひながら、世中ははかなきものなり、かく參り給ひぬとも、限と思はじ、と心づよう思ひて、御送もせむ、と思ひていましたり。（三）源少將も、臥し沈みて久しくなりぬるを、かねてより思ふ樣、いかでこの參り給はむ御送をも仕うまつらむ、いさゝかなることも、殿のし給ふ度ごとに參らぬは無きを、やんごとなき事にしもまうでざらむ、數ならぬ身に、思ふまじきこと思ひそめたるが過にこそあれ、など思ひて參りたり。

かく（四）皆集ひて、御車よせて、時なりぬ、と聞召すまゝに、（五）侍從、（六）百濟藍の色して（七）うつぶし臥して、願を立て給へどかひなし。（八）あて宮も、おとゞの斯く思しさわぎ、

（語釋）
（二）誤あるべし
（三）脱文あるべし
（四）占はせたれば
（考異）
（一）など―と

萬の人の參らせじとのみ思ふが、聞かむ事、など思して、いみじく悲しきことをのみ聞き見つれど、耳にも聞き入れ給はぬ御心ながら、かく聞え給ふ。
あて宮別るとも絕ゆべきものか涙川ゆく末もあるものと知らなむ
など思し入るぞや。いといみじく見給へつゝ、心憂しとは思ふものから、いとほしや。
（一）など書きて、あて宮「これ、かの君に奉れ」と宣ふ。兵衞の君、「おとゞ、君だち隙なくおはしまし、かの君はいふかひなくなり給ひぬるものを」と聞ゆ。あて宮、「（二）なほとて奉れ」と宣ふ。兵衞、よき折もて參りてお前に。（三）宮おとゞに聞え給ふ、女二「この頃かく煩らふを、もの問はせつれば、女の靈となむ言ひつる。たゞ今何わざをかはせむ」（四）忠こそ阿闍梨の御許に御文遣はす。おどろきて參り給へり。内に召し入ると、宮女君たち退き給へる折なれば、兵衞ちかく參り寄りて、物おぼえぬ君の御手に、この御文を押し入れて、指のさきして、腕に書きつく、「これ

（語釋）
（一）「まだたく」とは命の危き樣を形容して言へるなるべし
（二）よし仲澄が明日死して早速あて宮が退出せねばならぬにもせよ
（四）仲澄があて宮の文を見て
（七）あて宮に懸想したるをいふ
四　仲賴出家
（考異）
（三）君だちの上「の」ナシ
（五）言ふ―いひ
（六）絲毛…うなゐ車一つ―絲毛十、こがねづくり十なりうなゐ車二つ

は御方の御文なり」侍從、死にはつるに、御湯つゆばかり落しいる。おとゞ、正賴「忠こその御驗あり」とよろこび給ふこと限なし。かくまだたく（一）を見給ひて、明日は（二）まかづとも、今宵參らせむ、と思して、おとゞ、君だちの（三）立ち給ひぬる程に、この（四）御文見て、物はつかに言ふ。（五）よろこび給ふこと限なし。かくて御車二十、絲毛六つ、（六）黃金づくり十一、うなゐ車一つ、下づかへ車二つ。御前、四位卅人、五位三十人、六位數知らず。皆よき人なり。かくて參るすなはち、まうのぼり給ひぬ。御ともの人まかで給ふ。
源少將、木工の君に逢ひて、とみに物もいはで、涙を流すこと限なし。仲賴「年比いともかしこくて、物馴れたるやうに御覽ぜられつるを、何の報にかありけん、拙き身に、おふけなき（七）心つきて、今まで侍るべくも覺えざりつれど、御送をだに仕うまつりてこそ、とて。いでや、君に對面することさへ、限に覺ゆるこそ、いみじう悲しけれ」とて、

仲頼 今はとてふりづる時はくれなゐの涙とまらぬものにぞありける

とだにさかしうも言はで、泣き惑ふこと限なし。木工の君、「心ぼそくも宣ふかな。年頃はげに志ありてきこえ給ふと見奉りつれど、かく參り給ひぬるが効なきこと。いでや、一所(一)にもあらず、いとほしくぞ承はるや」(二)と聞えて、

木工 ふかき色に君しもなどかふりつべき誰もとまらむ涙ならぬを

世の常に思しなせかし」少將、いふばかりなく泣き惑ひて、歸りてすなはち法師になりにけり。

畫詞 これはあて宮の內裏に參り給へるところ。(三)御車ども引き立てたり。下り給へり。おとな、童、群れて歩めり。これは御局。上にまうのぼり給へり。靫負のめのと、御使に來たり。源少將、木工の君と物語(四)し給ふ。

かくて宮(五)參り給ひにしより、まうのぼり給はぬ夜なく、御局に宮(六)わたり給はぬ日なし。萬のこと、せぬわざなく上手にものし給へれば、御遊びがたきにし給ふ。

〔語釋〕
(一)あて宮を失ひて悲しむ者は仲頼一人のみにあらず
(五)あて宮
(六)東宮
〔考異〕
(二)と聞えて—とて
(三)御車ども—「ども」ナシ
(四)し給ふ—したり

㊄ あて宮の榮華・東宮の妃たち・あて宮懷胎

宮にさふらひ給ふ人々(一)、大將殿(二)の大宮の御はらから、同じ后ばらの四の宮と聞ゆる、左大臣殿の大君(三)、右大將殿の大君(四)、平中納言殿の君(五)。かくさふらひ給ふ中に、四の宮、右大將殿なむ時に(六)おはしましける。こと人は、よろしくおはしませど、左大臣殿の、あるが中に、年老い、かたち醜くあへなし。心のさがなきこと二つなし。君だちまだうまれ給はず。かくて、あて宮參り給ひて、また人あるものとも知り給はず、うちはへまうのぼり給ふ。稀に人の宿直の夜は、夜ふくるまでこの御局(七)にのみおはしまして、御遊などし給ふ。かくて二日ばかり有りて、まうのぼり給へるつとめて、東宮、

珍らしき君にあふ夜は春がすみあまの岩戸を立ちも籠めなむ

と宣ふ。あて宮、寢給へるやうにて、ものも聞え給はず。かゝる程に姙み(八)給ひぬ。

畫詞 こゝは東宮、大將殿の御局に參り給ふ。あて宮御年十五、中納言の君年十九、孫王の君二十一、帥のきみ十七、宰相(九)のおもと十八、兵衞の君廿、中

〔語釋〕
(一)妃妾たち
(二)承香殿、「大將殿の大宮の御はらから」とあるべし。正頼の妻たる女一宮の同胞の意なり
(三)源季明の長女、昭陽殿
(四)兼雅の長女、梨壺
(五)正明の三女、宣耀殿
(六)時めきたりの意
(七)あて宮の局にのみ東宮が御座ありて
〔考異〕
(八)姙み—にんじ
(九)宰相のおもと—宰相の君

〔語釋〕
(一)「辮の御」なるべし
(二)正頼の長子忠澄
(三)正頼
(六)妃妾たち
(七)正頼邸に
(八)毛彫し
㊅庚申、あて宮人々を饗す
〔考異〕
(四)交らはずて—まじはらずて
(五)年かはりて—ナシ

將の御、辮ご(一)、大輔の御、木工の君、少將の御、左近、右近、衞門などいふ人いとおほかり。うなゐなど御前にさふらふ。(二)左大辨の君參り給へり。そこに宮おはしまして、箏の御琴あそばす。あて宮と御碁あそばす。(三)大將のおとゞ御局に參り給へり。宮「なほこゝに」など宣はすれば、御前にさふらひ給ふものなど聞え給うて、東宮「仲澄は、などか久しく參らぬ」大將、正頼「日頃あさましく病にしづみ侍りて、交らはず(四)てなむ侍る。よろづの神佛に願を立て侍れど、今はたのむべくも侍らず」宮「らうたきことかな。公にも仕うまつりぬべく見えつるものを。實忠の朝臣も然ぞいふなる。あやしう人の愛子ども、など斯からむ」と宣ふ。

かくて年かはりて(五)、二月中の十日、年のはじめの庚申出來たるに、東宮の君だち(六)、御局ごとにまかなひし給ふ。あて宮、さらぬ前より、殿上帶刀の陣に菓物出ださむとおぼすに、よき折なり、とて殿(七)に聞え奉れ給ふ。宮の御臺には、かねの御器に、黄金の毛(八)うち、銀の折敷三十、こがねの御器。御臺の打敷は、花紋綾に、羅

〔語釋〕
(一)誤あらんか「さ」を「よ」に作れる本もあり
(二)碁の賭物
(四)松葉色に染めたる紙也といふ
(五)未詳。別本には「これはたゞこそのそめうなり」「これはたゞこそのけふなり」「これはたゞこそのそ命なり」
(六)涼
〔考異〕
(三)碁代の—碁代に

かさねたり。檜割籠五十荷、たゞのわりご五十荷。檜割籠は御かた〴〵にし給ひ、たゞのは、殿に仕うまつる受領どもにおほせ給へれば、仕うまつれり。するゑ物は、政所より、飯四石ばかり入れる檜の木の櫃十、厚朴の木に黑柹の脚つけたる中取十にするゑ、一尺三寸ばかりの、圓木の盌に、生物、乾物、鮨物、貝つ物、たけ高くうるはしく盛りて、厚朴の木に柊の脚つけたりしきさら(一)どもにするゑて、一石入る樽十に、酒入れ、碁代の(二)(三)錢二十貫、紙、筆、卓に積みて、色々の色紙積みて十。高坏、蘇枋の卓に、檀の紙、おをがみ、まつがみ(四)、筆など積みて碁代にしたり。かづけもの、女の裝束、しらはり褌など設けられたり。おとゞ、君だち參り給へり。物ども、一度に持てつらねて參る。見物なり。内裏より、白き透箱に入れて、よき菓物、酒殿の大御酒など召して、藏人木工亮を御使にて、「これ(五)は忠こそのそ命なり。あへものにとて」など宣はせたり。源中將(六)の許より、沈の割籠十荷、入れたるもの、飯には、白粉ふるひて入れ、しきもの、袋などめでたうして奉れ給へ

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)碁盤
(四)不詳
(五)東宮
(六)頭は藤のあやまりなるべし
(八)正頼邸にて
(九)東宮職
〔考異〕
(三)盤―はこ
(七)臺盤所―臺盤の所
(一〇)には…承りぬ―ナシ
(一一)そまう―そめう

り。(一)藤中將、銀の透筥十。あはせ薫物、沈の鶴したる硯箱、しろかねの筆、こがねの硯、龜などする。唐の錦のいと淸らなる、ぢんの盤に、しろがね、こがねの筋やりて、しろかねの碁石笥に、しろき玉、(二)紺瑠璃の石つくりて、雙六の盤、(三)て(四)うとかくの如くにて、様かへて、碁代の錢、銀にて、おなじ箱にて奉れたり。おとゞ見給ひて、「正頼あやしく煩らはしきわざせらるゝ中將たちかな」と宣ふ。(五)宮にはかくて、内にまうけられたる御調度などは、めるべきまゝに奉らせ給ふ。割籠三十荷ばかり、(六)頭中將の奉れたる透箱、一くだりながら奉れり。(七)臺盤所割籠、碁代など添へたり。四の宮の御かたに、(八)殿にまうけられたりし箱、檜割籠添へて奉れたまふ。殿上よりはじめて、宮のうち所々の帶刀の陣まで、割籠碁代など、淸らにして賜ふ。内裏の殿上、藏人所、侍從所、衞府の陣まで、半取、(九)職の尉に碁代の錢紙賜ひわたしつ。かくて、上の御使の藏人に、しらはり、褌かづけ、御返(一〇)には、畏まりて承りぬ。このそまう(一一)のおろしの多くさふらひけるを

〔語釋〕
(一)後世の穴一といふ遊の類なりといふ

〔考異〕
(二)攤—碁
(三)御歌—「歌」ナシ

なむ、この時過ぎざりせばと見給ふる」ときこえ給ふ。中將たちの使にも、白張褌かづけて、御消息言ひにつかはす。

内にも、宮、殿上人あつまりて、攤(一)(二)打ち遊するに、上いと近き御局なれば、宮わたり給へるに、あて宮おき居給へり。東宮「あないざとや」など宣ふほどに、雁多く連れてわたる。宮、東宮「このかりはいづちぞや」と宣ふ。中將仲忠、

つれて行く雁がね聞けばあかでのみ春の宮よりかへるとぞ聞く

宮の御歌、(三)

東宮 あかでのみ別るゝ雁のたむけには花の錦もとぢられぬかな

左大將、

正頼 青柳のいとまをしとて鶯の雁のたむけもとぢずやあるらむ

源中將、

涼 かへり行く雁のはかぜにちる花をおのがたむけの錦とや見む

〔語釋〕
(一)「右兵衛佐」か、正頼の二男諸澄右兵衛佐なり
(二)實類
(四)「右衛門佐」か、正頼の四男連澄右衛門佐なり

〔考異〕
(三)ふるさとは—ふるさとを
(五)中分は

中將實頼、

故郷へ翼すめずとぶ雁もこゝを過ぎず鳴くなり

左兵衛佐、(一)

しら雲の雁のたむけの錦とや山のはかぜに織り亂るらむ

左近中將、(二)

實類 ほころびてわかるゝ雁の(三)ふるさとは今やとふらんあまの羽衣

中將祐澄、

花をれる春は經ぬれどなく雁のかへれる數を知る人のなき

左衛門佐、(四)

なく雁に浮べる雲のゆきかひていづくにまつと契りおきけむ

などこれから宣ひて、女のよそひかづく。あくるつとめて、御臺ども御方々に參らせ給ふ。源中將の沈の割籠、(五)かたつらは仁壽殿の女御の御許へ奉り給ふ。

〔語釋〕
(一)照陽殿
(三)「かまう」は嚙むの意なるべし
(五)以下「太り給へり」まで照陽殿方の樣
(六)梨壺
(七)檀紙
(八)承香殿
(九)宣耀殿

〔考異〕
(二)の君の―ナシ
(四)狸の…とめるかな―狸のおぼしくしくとあるかなしたのきぬをおはくしてとめるかな
(一〇)平中納言―「平」ナシ

畫詞　こゝはあて宮。御たちいと多かり。檜割籠、すみもの、透箱いと多かり。左(一)大臣殿の(二)君の御局いと近し。殿上人のゝしるを聞きて、照陽殿「例の夏犬なれば、あつまりてかまう(三)夜にはあらずや」物かづきしたるを見て、照陽「狸(四)の多くしてとめるかな」など言ひてゐ給へり。庚申(五)し給はず。御たち白き衣のすけたる、うす色の裳など著て、四五人ばかり居たり。君年三十ばかり、かたち醜し。いかめしく太り給へり。こゝは大殿。殿上人三十人ばかり。ものかづけ給へり。これは右大將どのの御局、(六)大君の御かた、年十八。かたち淸らなり。御たち二十人ばかり、裳、唐衣著てさふらふ。庚申し給へり。殿上に割籠二十荷。碁代に、錢二十貫出だし給へり。なまめきてし給へり。あをき透箱に、み(七)ちのくに紙、あを紙など積みて出だし給へり。これは四(八)の宮の御局。宮おはします。御年二十。御たちいと多かり。おとな十五人、わらは四人。庚申し給へり。これは平(九)(一〇)中納言殿の御局。君年十六。容貌いとをかし。御はらからの藏人、

〔語釋〕
(一)あて宮をいふ
㊆ 仲忠、行政、仲賴法師を訪ふ。仲賴あて宮に歌を贈る
(四)仲賴
(五)正賴
(八)仲忠をいふ、「頭」は「藤」のあやまりなるべし。
(九)涼　以下一々に註せず
(一〇)行政
(一二)仲賴の籠れる山

〔考異〕
(二)おはするかな―おもはするかな―おはかなるぞや―をはりするかな―おはかするぞや。按「おはするかな」なるべし
(三)かくて―ナシ
(六)思ふ心―思ふ御心
(七)自らも―自らに
(一一)うるはしき―をかしき

式部丞居給へり。「めでたくも(一)大將の君(二)おほするかな」。式部「かれは心ことなる人ぞや。誰もえ並び給はじ」といふ。

かく(三)て源(四)少將は、山に籠りし日りより、穀を絶ち、鹽を絶ちて、木實松の葉を食きて、六時間なく行ひて、涙を海とたゝへ、なげきを山とおほして、歎きわたるを、帝よりはじめ奉りて、惜みかなしまぬ人なし。中に大將殿(五)「思ふ心(六)やありけん。自ら(七)もおはしつゝ訪ひ給ふを、頭(八)中將、源中將(九)、兵衞佐(一〇)などは、うるはしき(一一)御遊びがたきなりしものを」と惜みて、少將を戀ひて、花摘みがてら、水尾(一二)におはしたり。少將よろこびて對面して、物など言ふ。人々涙をおとさぬはなし。頭中將、仲忠「吾が佛」など斯くおもはぬ樣にてはものし給ふ。仲忠ら、片時世に經べき心地もせねども、親に仕うまつらんと思ふ心深ければ、しばし交らひ侍れど、かくておはするを見奉り侍れば、まづ悲しくなむ」とて、

仲忠　うちみれば涙の川とながれつるわれも淵瀬を知らぬ身なれば(一)

少將、

仲頼　世の中を思ひ入りにし心こそ深き山べのしるべなりけれ

源中將、

涼　蝶鳥のあそびし花のたもとにはみやまの苔の生ひんとや見し

と泣く〳〵物語してかへりぬ。

大將殿の君だちものし給へるにも對面し給ひて、物語などして、かへり給ふにつ(二)けて、あて宮の御許にかく聞え給へり。

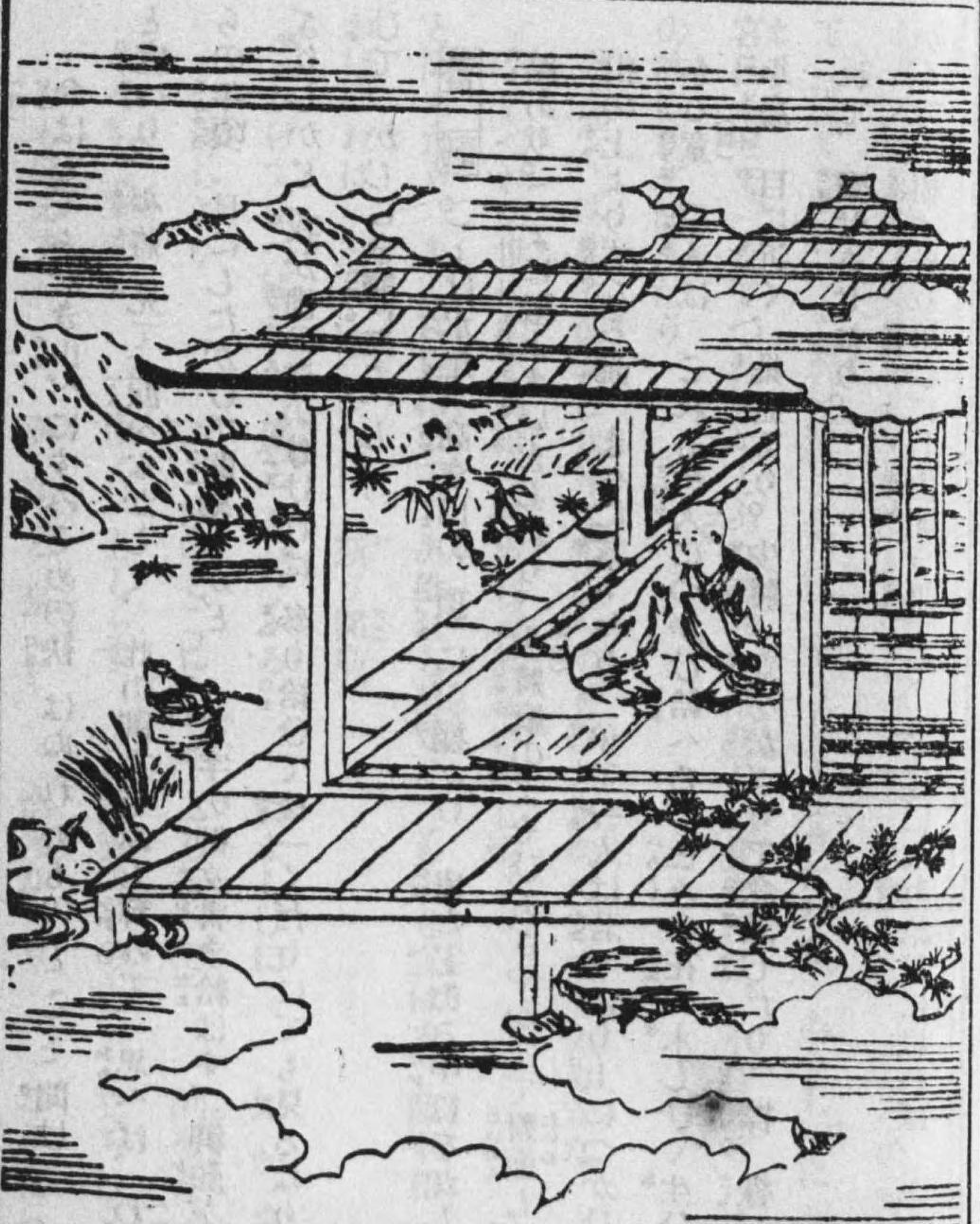
仲頼　紅の袖ぞかたみとおもほえしいまは黑くも染むるなみだか

これならぬは無きこそいみじき。(三)

など聞えたり。あて宮、怪しくもなりにけるかな、もの言ひし時いらへもせずなりにしを、かく哀になりにたる事、今は何かはと思して、

〔語釋〕
(二)正頼の子どもの尋ねたるにも仲頼が逢ひて
(三)今は僧になりたれば衣は黑染の外はなしと也

〔考異〕
(一)ながれつる—ながれつゝ



今はとてふかき山べにすみぞめの袂はぬれぬものとこそ聞け

と宣へり。少將見て、涙をながして、此の御文をふし拜みて、思へば、わがこゝ(一)らの年頃、日にしたがひて聞えしかど、一文字の御文書き給はず、御顔をだに見(二)ざりしかど、我が佛の道の尊ければ、參り給ひて後一くだりにても見るなり、と思ひて、かしこき寶にすべし。

畫詞　こゝは水尾。高き山の頂に、樋かけ、庵などある中にをかしげなる路あり。こゝに殿上人いましたり。少將麻のよそひあざやかにて對面し給へり。(三)山の上より大なる瀧、まへに落ちたり。弟子一人は若うより上につかひつけ給へる童、(四)一人は、これも舍人につかひ給へる。色々の花の木しげく生ひたり。小鳥、目に近く、巢立てり。少將、堂をかざりて念誦したり。櫟、橡、鉢に入れて、齋せさせたり。

(五)かくて(六)宰相は(七)參り給ひにし由聞き果てて、(八)不益になり(九)給ひにければ、(一〇)おとどうち

〔語釋〕(一)以下仲賴の心
(六)源實忠
(七)あて宮の東宮へ
(八)埒あかぬ病人になりしかば
(一〇)父季明

〔考異〕(二)見ざりしかど—見ざりしかども
(三)少將麻の—少將のあざり
(四)童—どうじ
(五)かくて宰相は—宰相も
(九)なり給ひ—「給ひ」ナシ

㈧　實忠、小野より長歌をあて宮に賜る

おどろき給ひ、東坂本に小野といふ家におきて、大願たて、よろづの神佛に祈り(一)て、泣きこがれつゝ惑ひ給ひければ、辛うじて生きたれど、ありし樣にもあらず、宮仕もせで、たゞつれ〴〵とあり經(二)。なほ悲しく覺ゆれば、小野より、兵衞の君の許にかく聞えたり、

實忠　かくばかり消ゆる我身に年をへてもゆる思のたえずもあるかな

いづれの世にか思ふ給へ慰めむ。あないみじや。

と聞えたり。あて宮見給ひて、あはれと思せど、ものも宣はず。源宰相悲しくおほゆれば、三月晦がたに、斯う聞ゆ、

實忠　かけていへば　塵とくだくる　たましひに　ふかき思の
つきしより　(三)ふる江のとこに　としをへて　列をならべて
すむ鳥の　ゆくへもしらず　鴛鴦の子の　立ちけん方も
(四)おもほえず　黄なる泉に　消えかへり　なみだの川に

〔語釋〕(一)比叡山の東麓

〔考異〕(二)あり經なほ—あり經れど
(三)ふる江—入江
(四)おもほえず—おもはえて

浮寐して　今やいまやと　たのみこし　君がこゝろを
かぎりぞと　思ひし日より　山ざとに　ひとりながめて
もえわたる　ふかき海べと　みつしほは　袖のもろまで
たゝへても　みるめ求めん　かたもなく(一)　今はかひなき
こゝちして　なごりぞ物は　悲しかりける

など聞えけれど御返なし。かく覺束なければ(二)、更にわすれ聞えず、折々につけて、なほ聞えけり。交らひもせず、宮の御許へも參らず、ながめ給へり。

【畫詞】こゝは源宰相小野におはす。はらからの中將(三)いましたり。おとど御文あり。

かくて(四)侍從の君も、參り給へる日はかなくなり給ひにしかど、御消息にかゝりて(五)、ありつる御思ひは月日に添へてまさり、身は弱くなりつゝ、え堪ふまじく覺ゆれば、あて宮にかく聞え給ふ、

〔語釋〕
(三)實賴
(四)仲澄
(五)あて宮の手紙によりて又生きかへりての意なるべけれど詞足らず

〔考異〕
(一)なく—なし
(二)ければ—けれど歟

(九)仲澄歌をあて宮に贈る。悶絕。あて宮の悲嘆

仲澄　いひでて(一)もつひにとまらぬ水のあわを(二)水籠りてこそあるべかりけれ

かくまで聞えて、あるまじく覺えしかば、聞えそめて、侍らざらむ世にも思しいでむこそ、いとも〳〵(三)いみじう厭はしければ、いでや、吾が君の御爲には、身のいたづらになりぬるも思ひ給へず。今一度の對面賜はらずなりぬるを思ひ給へるなむ。

と聞えたり。あて宮見給ひて、あるが中に(四)、いかでと思ひきこえし人の、怪しき心の見えしかば、つらしとおほえ給へしかど(五)、かう心細く宣へること、心憂く、など此の君にしもかく思されけん、など思して、かく聞え給ふ。

あて宮　おなじ野の露はいづれもとまらねどまづ消ゆとのみ聞くが苦しさ(六)

かく承るもいとほしうなむ。

と聞え給ふ。侍從見給ひて、文をちひさく押しわぐみて、湯してすき入れて(七)、紅の涙をながして絕え入り給ひぬ。殿の中ゆすり滿ちる、まどひ焦れ給ふこと限な

〔語釋〕
(一)いひ—械、言
(四)多くの同胞の中にて殊に力にせんと思ひし仲澄が、以下あて宮の心
(七)飲み込みて

〔考異〕
(二)あわを—あわの
(三)いとも〳〵—いとも
(五)給へしかど—給へしかども。按、「給ひしかど」歟
(六)苦しさ—苦しき

（語釋）
（一）以下あて宮の心
（二）喪服
（三）仲澄の言ひし事
（四）滋野眞菅
（七）妻とすべき女
（八）取らせて
⊕ 滋野眞菅あて宮を獲んとす。告訴。眞菅父子流罪
（考異）
（五）擇りて―とりて
（六）おほん爲に―をとこ方に

し。あて宮聞召して、いみじく悲しとおぼす。(一)斯かりけるものを、年頃心ぐるしくのみ宣ふ時、などいらへざりけむ。はかなかりける世の中に、つらしと思ひ給ひけむこと、など思ひて、いみじく泣き給ひて、「まかでなむ」と聞え給ふ。宮、東宮「怪しく、など斯くしもおもほす。數多ものせらるゝ御子にこそあめれ。いたくな歎き給ひそ。(二)服などは、あからさまにいでて著給へかし」など聞え給へど、なほ常に(三)聞え給ひしことのみ思ほえて、いといとほしく思すこと限なし。

かくて(四)治部卿の主、あて宮の御爲にとて家を造りて、調度をまうけて、心一つによき日を(五)擇りて、御むかへにとて、子ども、家の人ひき率て出立ち給ふ。ある人、「あて宮は、東宮に參り給ひにけり」といふに、治部卿の主、家の中ゆすり滿ちて、怒り腹立ちていふやう、眞菅「いかでか、天下に國王大臣にもいますがるとも、諸人の聞えおきて、(六)おほん爲に家を造り、閨を建てて日を待つほど、斯くはせさせ給ふべき。眞菅つたなき身にはありとも、己が(七)妻がねを、人に(八)ほらせしめては

（語釋）
（一）訴狀
（二）眞菅一人の爲なり
（四）肩を持ちて
（五）おへこべに
（六）踵の方を足の先の方にして
（考異）
（三）汝等―「等」ナシ
（七）徒より―徒から
（八）作れり―つくれり

ありなむや。政事かしこき世に、(一)うれへ奉らむ」とてうれへ文をつくりて、文插にはさみて出立ち給ふ。そこばくの子ども、少將よりはじめて、「宮仕を仕うまつりつゝ、つかさかうぶりのほしき事は、(二)一所の御爲なり。斯くあるまじき事を申されば、人の國さかひまでも逐ひ遣され、流罪の罪ともならば、如何せん」とて恐る〳〵申す。治部卿のぬし、太刀を抜きかけて、眞菅「汝等が首を、たゞ今取りてむ。(三)汝等は、我が敵とする大臣の(四)方によりて、はからしむる奴なり」と言ひて、太刀を抜ききらめかして、片端より追ひはらひて、冠を後ざまにし、上のはかまを(五)かへざまに著、片脚に脚二つをさし入れて、夏のうへのきぬに冬の下襲を著、靫負ひて、飯匙を笏に取り、靴片足、草鞋片足、踵をば(六)はなにはきて、(七)徒より參りて、帝の南殿に出で給へるに、立ちて、白き髪、鬚の中より、紅の涙をながしてうれへ申す。文を見給ふに、いふ限なくさがなき事を(八)作れり。おどろき給ひて、治部卿のぬしを、伊豆の權守、和政の少將を、長門の權介に、藏人の民部丞など、

〔語釋〕(一)結ひ鞍歟
(二)三春高基
(五)あて宮の事
(七)「かたはし」より歟

(十一) 三春高基遁世

〔考異〕(三)ものをも—「を」ナシ
(四)ものをも—「を」ナシ
(六)家を—家より

そこばくの子ども、放ち遣され、懲じ給ひて逐ひつかはす。少將泣き歎くこと限なし。

畫詞 こゝは、治部卿腹立ちて、太刀をぬきて、子ども逐ひすてたる所。女ども、太刀をとりて、額を土につけて歎く。男六人、女四人、手をすりて主に物いふ。これは流されたり。馬、車にのりて行く。子どもゆひくら(一)に乗りて行く。非違の尉、佐などして逐ひやれり。

かくて致仕(二)の大臣、斯かることを聞きて、水もすゝらで泣く〳〵いふ樣、高基「われ、昔より、食ふべきもの(三)をも食はず、著るべぎもの(四)をも著ずして、天の下に謗られを取り、世界に名をほどこして、財を蓄へしことは、死ぬべき命なれど、難きことも、財持たる人は心に叶ふものなり。今は大臣の位を絶ちて、たゞ思ふこと此の事(五)一つなり。それ叶はずば、今は我が財あるに効なし」とて、七條の家、四條の家(六)をはじめて、かたはら(七)より火をつけて、片時に燒き亡ぼして、山に籠りぬ。

(十二) あて宮東宮と歌を贈答す

〔語釋〕(一)自身を露にたとへたり
(二)衣ばかりの隔てを

かくてあて宮出でさせ給へるつとめて、宮のすけを御使にて、

東宮 夜の間も如何にとおほつかなく、急ぎまかで給ひしかな。

とて、

東宮 夕されば宿りし花もうつろひておもひ消ぬべき秋の夜の露(一)

とあり。あて宮、

色々の花のなかなる白露は萩の下葉をおもひしもせじ

とて、御使に紫苑色の綾のほそなが、袴一具かづけ給ふ。月たちて又宮より、

東宮 あひも見で月日へだつる我が中にころも(二)ばかりをなに恨みけん

あて宮、

年月も衣もなかには多くともこゝろばかりは隔てざらなむ

又宮より、

餘所にのみかくながらふる袖よりも人まつ瀧の落ちぬ日ぞなき

㊃ あて宮若宮を産む、産養ひ。飯米を所々に頒つ。照陽殿女御の嫉妬
〔語釋〕
(一)歌此誤あるべし
(四)「きさいの宮におはす」なるべし
(五)大殿は忠正、右大將は兼雅
(六)朱雀院后宮の心、みこの宮は東宮
(八)皇子誕生なかりしを
(一〇)多くの妃妾たちの中にてあて宮が第一に皇子を生み奉りしことを
〔考異〕
(二)し給ふ―ナシ
(三)裝束をし―裝束をして
(七)御子の宮―御子の君
(九)すみもの―ナシ

あて宮、
(一)まつたきといかゞ頼まんよしをだにねをとゞめてしわかるとおもへば

かくて、あて宮の御産屋のまうけし給ふ。(二)おとな、童、みな白き裝束(三)をし、大宮なども此方におはして待ち給ふに、十月朔日に男宮生れ給ひぬ。宮より御使たちかへり參る。東宮の御母、(四)きさい宮おはす。(五)大殿右大將などの御妹におはします。その后の宮、内裏の帝よろこび給ふ。(六)(七)御子の宮、御年二十になり給ふこと、人々參り給ひて久しうなりぬるに、まだ(八)斯かること無かりつるを思しつるに、中らひよき所にしも生れ給へることかな、とおぼして、三日の夜、内裏の后の宮より、御産養、銀のすきばこ十二、御衣十かさね、御襁褓十かさね、沈の衝重二十、銀の箸かひ、坏どもみな同じもの。(九)すみもの、いといかめし。碁代の錢百貫、大なる紫檀の櫃に碁代入れて、宮の大進を御使にて、后の宮の御消息、大宮の御許に、
后宮いと(一〇)珍らしきことを、まづそれよりしもはじめ給へるをなむ、思ふやうな

〔語釋〕
(一)あて宮の食料の米
(三)皇子はあて宮がまづ生みたるを
(五)「夏ごろも」は「すき米」の誤なるべし
(八)かの貰ひし米を

〔考異〕
(二)珍らし…ものし給ふを—ナシ
(四)思ひ—思う
(六)夏ごろもは—夏よりは
(七)頃にも—よに
(九)これ—ナシ

る心地して嬉しくおもひ給へる。いと羨ましげなる人々に、あえものにせさせん。すき米のおろしすこし賜はせよ。まこと、これは、夜居の人々の目ざましに賜へ(一)とてなむ。

と聞え給へり。御使の大進に、女のよそひ、持てまゐれる男どもに、きぬ、布などしなぐ\に賜ひて、黄金の壺の大きなるに、かの御食の米一壺入れて奉れ給ふ。御返り、

女一宮かしこまりて承りぬ。珍らしき人は、(二)(三)まづ此處にしものし給ふを、いともかしこく思ひ給ふるに、(四)思すやうにと宣はせたるをなむ、いとも\/嬉しく思ひ給ふる。(五)(六)夏ごろもはほどおほくすきて、殘り少うなり侍りにける頃にもなむ。(七)

と聞え給ふ。

后の宮、瑠璃の壺の小き(八)四つに入れて、東宮の御局どもに、(九)「これ、あえものにし

〔語釋〕
(三)照陽殿
(四)あて宮は照陽殿には從姉妹也姪にはあらず
(五)多くの人の胤を宿して子を産みて

〔考異〕
(一)奉れ—奉り
(二)四の—五の—二の
(六)給へるかな—給ひつるかな
(七)「いと清らに」以下巻末まで刊本「梅の花笠」の巻の末に入りたり今古寫本及諸家の校合本に從ひてこゝに入る
(八)にて—「て」ナシ
(九)又—ナシ

給へ」とて奉れ給へり。四の宮よりはじめて、みな食き給ひつ。御使に、物かづけ、御消息(一)をかしき樣に聞え(二)給ふ中に、大殿(三)の君は、投げ散らして宣ふ、照陽殿「誰か、その姪(四)の食み殘しはほしき。萬(五)の集め子を産みて、宮の御子といへば、まことかとてもてあがめ給ふ」など局の毀れぬばかり口舌ちのゝしりて、かく聞えてかへし奉れ給ふ。「斯うせずとも、頭大なる子は、おほく産み侍りぬべくなむ」とてかへし奉る。后の宮聞召して、うち笑ひ給ひて、后宮「あはれの人や。心憂くものし給へ(六)るかな」と宣ふ。

かくて五日の夜、院の后の宮より、同じごといかめしうし給へり。所々よりも、い(七)と清らにてあまた、碁代などいと多くて、上達部、親王たちいと多くものし給へ(八)り。御衣御むつきなど、皆かづけ給ふ。七日の夜、東宮よりいと清らにいかめしくて、權亮を御使にて、御文あり。大宮、御返きこえ給ふ。又(九)右大將殿より、御前に紫檀の衝重二十、沈の飯笥、御坏ども轆轤に挽きて、御衣御むつきなど、例